

江戸しぐさ

自然に出来て

すてきだね

# 芝三光の江戸しぐさ

## とらのまき

老いたいま

忘れてしまった

生きなみち

お も き 心

さてこれから、「江戸しぐさ」は「あいづちしぐさ」というお話をしたいと思います。

一つは「ガマの油と日本刀」、二つ目は「江戸の有名な茶屋の話」、三つ目は「ある銀行の頭取の不況対策」です。

- ・ まず「ガマの油と日本刀」

日本刀はなぜ錆びず、歯こぼれせず、曲がらず、折れず、よく切れるか、戦後アメリカはそのことをたいへん不思議がり、実によく調べ研究し、その秘密は製造過程にあることをつきとめたそうです。

折れぬためには心鉄（心金）を中に入れ、曲がらぬためには固い皮金で外から包み、良く切れるためには刃先部にさらに一段と強い鋼を加える段階ごとに打ち延ばし、折り返しを何回も繰り返しいづちを入れながら鍛錬してゆく。

一枚が二枚、二枚が四枚と倍倍ゲームで10回が512枚、12回になると何と一振りの刀は2040枚に折り返され、薄い安全カミソリの刃を重ねた鉄の原子のような構造になるのだそうです。

この過程でのあいづちこそが重要な役割を果たすようで、あいづちが悪いとなまくら（切れ味の鈍いこと。またその刃）ができてしまうことを理解していたようです。

大道に人を集めて面白おかしく売ったかのガマの油の口上（一枚が二枚、、）まで知っていたのだそうで驚きです。

米国は科学的に日本刀の秘密を明かし、ローラで折り返す技術を取り入れ、強い折れない曲がらない柔らかい心鉄と固い鋼を合成して戦車の防弾鋼板に応用したそうですが、本家本元の日本はアメリカの指摘ではじめて気づいたという話です。

江戸の商人たちは、この“あいづち”の重要さを体験的に理解していたのです。

- ・ 二つ目は江戸の有名な茶屋の娘の話

浮世絵や芝居で有名な「笠森お仙」は江戸後期の評判の美女ということで客がおしかけ繁盛したと伝えられています。

しかし、真相はただ美女というのではなく、江戸っ子お気に入りの今で言う落ち着いたアルトで受け答えする、客との応酬、つまりあいづちの打ち方がまことに上手なので、客はその“あいづち”を聞きたくてお仙の茶屋に通ったのだそうです。ただ、美女だけでは目の肥えた江戸っ子たちの心を魅了することはできなかつたはず。あいづちの大切さを、どの茶屋の娘よりわきまえて居た笠森お仙はプロショッパーだったのです。

- ・ ある銀行頭取の不況対策

ある銀行の何代目かの頭取は「江戸しぐさ」をよくご存じの方でした。

ころは昭和7,8年、折から世界的な不況のつづく中で、商売を“江戸しぐさ”で立ち直らせようと考えました。

そのため店員に“あいづち訓練”なるものを導入したのだそうです。

銀行に来るお客は金を出すか入れるかに大別されるが、お客のニーズを瞬間的に把握する言葉の荒物しぐさ、つまりお客の御用を次々に並べ、お客に選ばせるなどのしぐさも当然とり入れたのではないのでしょうか。

## あいづち

・文化・文政のころ、江戸の町は繁栄がつづき、物が溢れていました。今と同じ品物の質もあまり格差は見られなかったようです。

町衆は賢い消費者として、目も利き、“用心しぐさ”でいかものや偽ものを見抜き、見抜けずだまされたときは、まず、自分の目利きの拙さを反省すると同時に、看板に偽りがある商人ができれば、ネットワークで情報を流し、今で言う不買運動を展開しました。これが、ほんとうの消費者運動だと思います。

そんなことをされた店は忽ち信用を失い都落ちの憂き目を見ることになりますから、商人も真剣にならざるを得ませんでした。

江戸の商売に比べれば今の商売は楽だと言えるようですが、世の中は、いよいよ本当の競争の時代に入ろうとしています。

江戸商人たちは、お客へ損をさせないことをモットーに「あいづち」の打ち方で売れるものも売れなくなるということを身に滲みて知っていたからです。

なにしろ石の上にも3年で商人の基本を覚えたら、後の7年は“あいづち”の鍛錬をしたのだそうです。

・昭和の初期の頃、円タクと呼んでいたタクシーには運転手とその側に助手がおりました。このことは子供心に覚えているのですが、助手は運転技術を実地に見習うとともに、お客とのあいづち(会話であり交渉である)の訓練をするためだったのだそうです。江戸の商人文化の伝統はそのころまでは残っていたようです。

“あいづち”が打てなければ商人の資格はなかったのでしょうか。

## ゆう爺より一言

「あいづち」でこれだけの表現がありました。江戸しぐさは、人それぞれのとらえ方、考え方で変化します。多くの角度で物事を見ると世の中が広がっていくように感じます。

江戸しぐさは、「おもいやり・もてなし・きくばり」を基本とした江戸町衆のころのよりどころです。遊び心をもった楽しい内容です。



## 芝三光の江戸しぐさとは

---

「江戸しぐさ」という言葉は、「芝三光」が昭和49年に名づけたものです。

江戸しぐさの内容は、「江戸講中」にいた方たちから引き継がれた言葉です。

江戸しぐさは、江戸町衆が、江戸の町づくりの為に作った教えであり文化です。

「江戸しぐさ」に出てくる「しぐさ言葉」は、芝講師が、口承言葉をそれぞれ分かりやすく説明するために考えられた言葉です。江戸時代にあったものではありません。

短い説明しか出来ていない項目は、その言葉に「他の考え方が隠れていますよ」という教えです。直球で物事を見るのではなく、変化をさせてみてください。

とらのまきの中に出てくる分かりづらい言葉の説明をさせていただきます。

江戸町民（江戸町衆・江戸町人・江戸っ子）

江戸町衆(城下町の表通りにお店を構えてる商人)「江戸人」

江戸町人（一般庶民）

江戸っ子（江戸で生まれて3代目の人から）

講

江戸町講（町衆が集まっている講）「現在の商店会のようなところですよ」

江戸講中（江戸町講に入会した人たち）「町衆」

講師（江戸町講のリーダー）

江戸講（江戸町講の講師の集まり）

言葉

江戸町言葉（共通語）地方からの人の集まりだったので、共通語が必要だった。

江戸言葉（江戸弁・江戸っ子弁）

例をあげて、江戸しぐさでよく表現されるものをご紹介します。

「傘かしげ」してすれ違う（感謝）

雨の日に、傘を差してすれ違う時、相手の方に雨のしずくがしたたり落ちないように、傘を相手の反対側にかたむけるしぐさ

立ち止まって、相手に道をゆずるのも、一案です。

傘は高級品だったので町民の中で傘を持っていたのは江戸町衆位だったそうです。

貸し傘は、越後屋が1693年（綱吉の時代）から始めました。

刻盗人（時泥棒）は大罪人（してはいけない）

突然訪ねたり、一方的に時間を変更したりする行為は、相手の時間を奪うとして、もっとも恥ずべき行為としていました。会議なども遅刻して始まりの時間を遅らせると他の

皆さんの時間を盗んだことになります。

「弁済不能の十両の罪」とたとえられるほど、してはいけないしぐさでした。

江戸町衆は、約束事を大事にしましたので、連絡専門の小僧さんがいました。ある大手商店の古記録に載っています。

こぶし（腰）うかし（感謝）

となりと、こぶしひとつぶんぐらいちょっと腰をうごかせて席をつくる。芝居を見る時に、混んで来たら腰を浮かせて詰めたことからこのようによばれました。

カニ歩き（雑学）

駕籠屋がお寺、神社などでお客さまを乗せ、駕籠を横にして階段を上り下りするさま。

江戸時代は、宿などの階段が急だったため着物を着た仲居さんが、食事を二階に運ぶ際に、一段ずつ足をそろえて横向きで上がっていく姿。

同じ言葉を使っているのに違う表現を紹介します。

指切りげんまん（雑学）

約束を守るしぐさが子供たちの遊びに残った。

「お夕飯の時間よ」と、家に戻ってくるよう母親から声がかかると、あちこちで「指切りげんまん」の声があがりました。明日もここで遊ぼう、といった内容ですが、子供たちにとっては大事な約束でした。昔の約束を守ると誓い合う所作の名残であります。

死んだらごめん（心得）

約束は必ず守るといふ、江戸人の決意表明

約束をしたときに交わす「指切りげんまん嘘ついたら針千本飲ます、指切った」と続きますが、江戸ではこのあとに「死んだらごめん」と言いました。約束を破るのは針を千本飲んでも詫びなければならぬひどいことでした。でも、死んでしまったら、約束を果たせないのだから謝っておきますとの意味を込めました。死なない限り約束は守ると相手に誓いを立てる、大事な言葉です。

口約束（死んだらごめん）（心得）

江戸商人の真骨頂。証文がなくても、いったん約束した以上は、必ず守る。

「指切りげんまん、ウソついたら針千本飲ます。指切った。死んだらごめん」子供達の遊びに残っている唯一の江戸しぐさのフレーズである。

約束を守らないことがいかに人の道に外れているのかを、遊びの中で具体的に悟らせる江戸人の知恵でした。

「死んだらごめん」という意味は「約束を守れないのは死んだときだけ」という江戸人の決意表明を示す言葉です。

次に、後方のページに載っています、いろはかるたと、ことば遊びを少し紹介します。

「いろはかるた」

い 言ってはならない言葉「ウソ、ホント？」

ほ ほめことば、みんな楽しく生きられる

ち ちりをあつめて、リサイクル

む 無理押しは稚児しぐさ恥ずかしい

あ あいさつは上下のべつなくさわやかに

「ことばあそび」

講中の 努力がみのり 江戸の町

言葉には 遊びが持てる 人がいい

わたしども 謙虚な気持ち 客に受け

話しても 仲間になれぬ 友達よ

よむ人に 遊びをのこす 江戸しぐさ

「江戸しぐさ」を利用して、このような言葉遊びもできます。

最初に載せました「あいづちしぐさ」のように一つの言葉から5つの事柄がでてきました。江戸では、地域とか人によっても伝承が違ってくることもあります。江戸しぐさの難しいところです。

「江戸しぐさ」を楽しんでください。

授業などに取り入れて頂ければ、内容によっては子どもの心も見えてくるでしょう。

先生方も、自分を見つめ直すチャンスになるのではと思います。

私は団塊の世代です。「江戸しぐさ」を知って多くの事をまなびました。

小学校から大学まで、または社会人の方でも、充分利用できる内容だと思います。

先ず、一つの言葉を理解し、自分で消化してください。違う人生が見えてくるでしょう。

これだけの言葉の宝を多くの方に使いこなして欲しいと思います。

ゆっくり時間をかけてお読みください。

お節介やきの ゆう爺より

# 江戸しぐさ

---

## 「江戸しぐさ」第一条

人間を学び得て初めて「人」となる。

## 「江戸しぐさ」の出発点

江戸の町づくりから。

## 「江戸しぐさ」をなすもの

すなわち江戸人。

## 「江戸しぐさ」を身に付けるには江戸しぐさの人と交わるしかない。

人には添うて見よ。馬には乗って見よ。

## 「江戸しぐさ」の真骨張

しぐさを知っていても、それが、癖になっていなければ「江戸しぐさ」とはいわない。

## 「江戸しぐさ」は戦いがしたくなくなる、いじめがしたくなくなるしぐさ

平和を守り通した江戸時代。

## 「江戸しぐさ」は持てるもの

江戸しぐさは、道具はならず、前もって準備するものもならず、即座にその場に合った身のこなしが癖になっているものです。その人の身についているものすなわち、持ち運び可能ということです。つまり「持てる」ものです。

## 「江戸しぐさ」の基本

見よう見まね。盗んでいいのは見取るコツ。

## 「江戸しぐさ」は暮らしの大切なエッセンス

本質、最も大切な要素、真髄。

## 「江戸しぐさ」は「仕草」ではなく「しぐさ」（思草・志草・支草・支草）

受け継ぎたい江戸町衆のこころ。

## 「江戸しぐさ」は生き

生き生きいきるこころ。（思いやり、もてなし、気配り）。



「江戸しぐさ」は江戸人の感性の象徴  
美や善、人間が持つ知覚的な能力。  
感性豊かな人はみんなを幸せにする。

「江戸しぐさ」の第一歩はあいづちしぐさ  
あいづちの入れ方、あいづちの打ち方、あいづちの訓練。

「江戸しぐさ」はマナーではない  
自然観の中で楽しく生きていく心得。

「江戸しぐさ」は口伝で書き  
メモはとらなかったそうです。

### 江戸美人の条件

容姿よりも器量よし（容姿は見かけ、器量は人間の器を示す言葉）

生まれつきの容姿ではなく、自分の努力で身に着いたしぐさ。

気配り美人で、「目つき」「表情」「ものの言い方」「身のこなし」を評価する教養の高さが江戸人にはありました。どんな人にも対応できる上手なあいづちは、人間関係を円滑にするし、これが江戸美人の条件でした。

### 江戸小町

美人であることの他に「小意気」「小奇麗」「小確り(こじっかり)」が条件だったそうです。

江戸では「江戸小町は仕掛けに強くなれ」と言われてきたそうです。自立している女性をさしているのだそうです。つまり、商家の跡取り娘であったということなのです。

仕掛けというのは、この場合、理（ことわり）「道理」という意味で、自然（じねん）現象を見る目「人間を見る目、物を見抜く識見、季節、世相などなど、森羅万象（しんらばんしょう）に対応する能力」をそなえていることが必要でした。

江戸小町は、他の商人とのかけひきは勿論、参勤交代の武士を相手にしても一步もひかない（権威には鼻もひっかけない）プライドをもった女に育てられたようです。

### 江戸小町娘の気風

おふとんは、お天とうさま（太陽）に見せたくて見せたくてたまらない！（日光消毒しないと気がすまないの意）「3年に1回は打ち直さないと、いられない！」そうって騒ぐのが、江戸小町娘の気風なのだそうです。

「江戸っ子の元気は、きれいなフトンからうまれる！」そういわれていたそうです。

### たくましく自立する江戸の女

失わなかった江戸小町の女らしさ

### 神明女（しめじょ）「江戸の娘」

江戸のまちで成功するには、江戸人の娘を嫁にすることだともいわれていました。「しめ（神明）さんなら、なくても（いい材料で）味をつけるぞ。かっぺい（井中っぺい）はうまいものを、まずくして食わせるぞ」（聡明な女は料理がうまいという江戸版ですね）と江戸の古老がよく言ったそうです。

江戸人の女性は、無から有を生じさせる生活の知恵を持った神明女だったようです。

切れる包丁の使い方、切れない包丁しかないときの使い方、付焼刃の使い方、いきのいい魚の切り方、古い菜っ葉の切り方、柿の皮の剥き方、しら髭をつくるときの包丁の研ぎ方、荒砥（あらど）しかなかったときの仕上げの研ぎ方というような具体的でしかも応用のきく基本の手ほどきを教えたのです。例えば、母娘二人しかいないとき手っ取り早く汁ものをつくるには、椎茸を切らした時の味の付け方、乳離れしたばかりの稚児に与える汁ものの作り方、多数の客人に早く味のいい汁ものを出す要領というようにすべて、実地に役立つ教え方だったというのです。

江戸の町では、一事が万事、こんな薫陶（くんとう）を受けた女性を妻にもてば、夫の成功は疑いなしと自信を持って言えたのでしょう。しかも江戸料理は夫婦でつくることが原則だったそうです。寄合に出るのにも、片方に内緒ということはなかったようです。

### 姉様人形 「江戸女性の能力」

人形には顔が描かれていません。

江戸は女性の能力を、生まれつきの美しさだけでは評価しません。後天的に身に付けた。「客捌(さば)きが上手い、相づちが上手、色気がある」などで判断しました。

婀娜(あだ)「江戸のいきな女性」

粋で色っぽいなまめかしい女性の形容

江戸時代では20歳半ばを過ぎると年増といい、苦労人として情のある色っぽさを指した。良家の子女ではないが、粗野ではない粋な女性。

カカア自慢

銭湯の男湯ではカカア自慢(料理の腕自慢:味のバリエーション:大根の日)の亭主がお互いに競い合い、その自慢の内容によって居場所がきまり、自慢気のない女房を持った亭主が良い場所にいるとどかされたというから笑ってしまいます。(江戸っ子の遊び心とはソフトの競争だったそうです)。とにかく女が、意外に大事にされた江戸の町といわれていますが、女性もそれ相応の能力を持っていたのではないのでしょうか。そういう意味で江戸の町は民主的、男女同権であったともいえるようです。

商家は女次第

繁盛している商家には必ず優れものの内儀がいる。

店の主は、仕事の付き合いなどでよく外出をする。そこで日々の店の運営に関することは内儀の仕事となりました。

楚楚(そそ)とした物腰で丁稚や手代の躰をしたり、お客様への気配りやご近所付き合いをしているからこそ、お店が繁盛しました。しかし、そんな控えめな内儀も、いざとなれば男も顔負けの、肝っ玉の据わった女性に変わりました。

家の中を上手に切り盛りしているのは母親、女である。うまくいくかどうかは女次第、というゆえんです。

女は人のはじまり

女性は子供を産み育てる。強い立場、江戸商家の繁盛は女次第と言われました。

出女法度

江戸では「女がしっかりしていれば、争いはおこらず、江戸は繁盛する」といって、きびしく女を仕付けたようです。そして、しっかりした江戸女の頭脳流出を「出女法度」といって、やかましく取り締まったということです。

女江戸方角(をみなえとほうがく)

女子の為の江戸案内絵図。江戸八百八町、町名、橋、屋敷名などが全部かいてあり、解説や注意なども書いてありました。

男は女しだい

江戸では主婦の座は想像以上に強大だったそうです。

主婦業が大事だったという事です。

いい男になったり、出世したり男は女でかわると言われました。

おきやん

勇み肌で元気な様子

おきやんの「きやん」には侠という字をあてる。勇み肌で元気な様子を表現している。江戸時代中期に成立した言葉で、当初は男女を問わず「きやん」といった。

しかし、次第に女性のありようとして「おきやん」が使われるようになり、おてんば娘という意味が

加わった。勝気で、女らしさに欠け、蓮っ葉でおてんぼという意味。

すっこちゃん（素っ子ちゃん）

まめまめしく一生懸命はたらく愛嬌のある江戸の素っ子ちゃん。「ほめ言葉」

女隠居だまり

年増の人たちの井戸端会議

江戸町衆・江戸町人・江戸っ子・江戸児の区別

江戸は、徳川幕府が出来て地方から集められた商人が中心になりできた町です。

江戸町衆は、府内（城下町）表店（表通りに店舗を構えている商店、職人の見世、一丁四方が基準）

江戸町人は、裏店（表店の内側、集合住宅の長屋・行商人、小商い、職人、一般庶民が住んでいる）

江戸っ子は、三代続いて江戸で生まれた人、きっぷのいい人、などの表現をされています。

江戸児（江戸町衆で三代続いて江戸で生まれた人・江戸しぐさの出来る人）

言葉は、江戸町言葉（共通語）と江戸言葉（江戸弁・江戸っ子弁）に、住民の呼び方も、江戸町衆（江戸人）江戸町人（一部江戸っ子）とに分けていたそうです。

江戸町衆

江戸府内で商いをしている人たち。自衛のための地域的自治組織を持って活動。

いつも他人に気配りの心を持ち、同等、年下の人たちにも敬語を使っていた。

江戸町衆は、理想の町づくりのためにいろいろと工夫を重ねていきました。大きな力になったのは講です。江戸講の人達が結束することで、無から有が生まれる世界へと変化していきました。

江戸町衆・言葉で人生を楽しむ

江戸町衆たちは、言葉という大工道具を上手に使い分け、丁寧な言葉にはより丁寧に、狼藉には手斧言葉で立ち向かいました。

「荒い言葉を使われたら、原因は自分が悪い言葉を使ったからと思え」というのが、江戸の教えでした。

江戸は、「言葉」という無形文化財を駆使して掛合いの面白さや人生の楽しさを、満喫する都でした。

江戸町衆の世界

江戸寺子屋にしても、40歳以下は助手でした。師匠に高齢者が良いと言っているのではなく、人間を良く観察して適材適所、使い分けていた江戸町衆の考え方に素晴らしさを感じます。

江戸町衆の役割

江戸町衆は町衆全員が自衛のための地域的自治組織ですから、自分たちが悪い事をするなど、考えられない事でした。十手を持った権限の人達は、諸国から江戸に出て来た人達の目付と、江戸町衆のパイプ役をはたしていたのです。江戸町衆が、それとなく見張っていたのですから、江戸の治安が良かったのは当然です。これが、俗に言われる「御城さまは諸国をにらまれ、江戸っ児（江戸町衆）は江戸の町をにらむ」という言葉の真の意味です。また、「三人寄れば二人は他所者、気をつけよ」という注意の言葉も、ここからきています。

江戸町衆の見分け方

目の前の人を仏の化身と思う人。

刻盗人（時泥棒）をしない人。

肩書を気にしない人。

遊び心を持っている人。

## 江戸町衆の考え方

お客様には損はさせない商人道。

## 江戸町衆の癖を真似る

子供達は町衆の普段の行動を見て自然と溶け込んでいける知恵を身に付けました。

江戸町人たちも同じく江戸町衆からいろんなことを学びました。

## 江戸町衆の礼儀

人様のご意見、ご感想をお述べくださったときには答礼申し上げるのが礼儀です。

## 江戸町衆寄合・田舎寄合

寄合では、人様の発言や意見にたいしては真摯にきく。

・江戸町衆寄合の決め事では、人さまの発言や意見に対しては、かりにおかしい内容があっても、その場では「それはおかしい」とか「そんなはずはない」とか「そんなことはでていない」という式の相手の発言や意見を無視したり、否定したり、打ち消すような発言や返事は禁じていたのです。

なぜか？という、それは、どんなにおかしい発言や意見であってもおしまいまで聞いていると、その中には、江戸の繁盛に役立つようなヒントが、一つや二つは必ず含まれている、それを途中でストップさせたら聞き出せなくなるのでマイナスになってしまうという考え方があったのです。

それに対して、俗に言う田舎寄合では、すぐに相手の言葉に水を浴びせるように決め事が作られていました。これは、良い考えはすべて江戸に頂き、地方の考えは、すべて取り潰して、江戸を繁栄させるように、極めて巧妙に仕組まれた幕府の民衆指導制作であったと説明した研究者もあったそうです。決め事が先につくられました。

## 江戸式敬語

人間に上下はないという考え方が根本にあり、江戸人たちは相手に対して、一步へりくだった話し方をしました。自分の事を「てまえども」などと敬語で表現しました。同輩・後輩に対してもそうです。

初めてお会いしたときには、お初にお目にかかります。

## 江戸町言葉

上の人より横の仲間や、むしろ後輩に対して丁重な言葉、例えば「欠席します→欠席させていただきます」。歌舞伎の看板などの右側に「かな」がふってありますが、あれなども江戸町言葉の名残です。江戸町言葉は「話し言葉」です。「江戸本」を読むときには小さく声を出して読むと意味が良く通じます。

「ご存知ですか」→「御存じの通り・・・」「御存じのように・・・」というふうに、相手に敬意を表しながら、念を押す言葉を付けることになっていたようでございます。聞き手が知っている話であれば、最初の相づちは、「さようございますね」とか「そうですな」「そのようですね」と受けます。こういう相づちをされた時は、くどくど言わず、内容の要点だけを簡単に喋るように、心がけなくてはなりません。もし、知らない内容であったら、話し出して間も無い頃に「いや、まったく初耳だ」とか「初めてお聞きします」というふうな相づちをうたなくてはなりません。相手が、このような相づちを打った時は、話し手は内容をはしよらず、詳しく言うように心掛けます。

## 自身番屋・木戸番小屋「江戸の自治権」

町内の安全と安心を守る拠点

江戸は奉行所が基本の法令となる町触れを出すものの、実際の運用は町衆の自治にまかされていた。町づくりや安全の拠点が自身番屋と木戸番小屋だった

自身番屋（1716年頃）には担当を割り振られた商人たちが三、四人、毎日のように寄合をした。軽い

犯罪であれば実際に取り締まる道具も置いてあった。冬ともなれば火の用心の見廻り番が詰めました。

これに対し、木戸番小屋（1716年）には番太郎と称す单身者が住み込み、町の木戸の朝晩の開け閉（た）てを責任を持って行いました。不審者が立ち入れば、もちろん追い出しました。もともと、事件がそう頻繁に起こることもないので、生活が厳しい木戸番小屋は次第に日常必要な雑貨も売られるようになりました。冬ともなると焼き芋を売ることもありました。（町木戸は1658年からあり、当時は番の者と言っていました）

#### 江戸の火消

大名火消・定火消・町火消（1717年）に振り分けされていました。町火消はいろは47文字を組み名として編成。江戸末期には江戸の拡大に伴い百五十組にまでになっていたそうです。

町火消の活動は、町衆が負担をしていました。

#### 江戸の文まわし

世話になった人、面倒をかけた人、好きな人、喧嘩した人に…・恩讐（おんしゅう）を超えて呼び掛ける。恩讐（恩とあだ）

#### 江戸の耳・田舎の目（江戸町言葉）

江戸の言葉づかい（共通語）は、耳で聞いてすぐに判るものでなければいけません。別に「ならない」というキマリがあったわけではありませんが、これは江戸と田舎との言葉づかいに関係しているのです。

江戸は各地から人々が集まっていたので、どこの地域から来た人にも通じる言葉が必要でした。

田舎は見た目ですら判断しました。

#### 田舎の入り・江戸の出

余裕をもって行動できる人を江戸の出、いつもあわてる人を田舎の入りといいます。

#### 江戸町方

町役人を中心とした自治的機構

#### 江戸人(江戸町衆)

みんなが集まって歩く事から始める（講）。そうすれば道は自然に出来る。「道なき道に道をつくる者、すなわち江戸人のこと」。

#### 道普請おわれば（江戸人の考え）

道普請おわれば、すなわち後進に道を譲り、また、新しき道を求めて道理をきわむ。

他人の権限を侵さない要素のほうが重要である。

#### 江戸は自然流の町

江戸人たちが、住みよく生活するために考えられた新しい文化都市です。

#### 江戸文化

キリスト教を抑える為に海外との交易を制限した中で、町衆が協力し、助け合い、楽しむことの為に発想した文化です。

#### 江戸芝居

一興行ごとに新作を発表していました。

歌舞伎の年中行事で最も大切なものとして顔見世狂言（冬の芝居）と曾我狂言（新春の芝居）がありました。他に弥生芝居、夏狂言、盆狂言、秋狂言という具合に時候と密着しておりました。これが歌舞伎の芸術性の一要素ともなっておりまして、季節外れの芝居など舞台では見ようと思いません

した。

## 江戸式ぞうきんがけ

雑巾がけは素早く、合理的に、いきこなす。

つまり、必要なことを的確に行動で表し、その姿が美しくなければ合格とはいえませんでした。江戸というところは何をやるにしても「いきに」という事を象徴的に示す例として、この言葉がよく使われました。

例えば、「ゴシゴシやたら拭くのではなくて、一回拭いたらすぐひっくり返して拭く。すすぎもジャブジャブやるのではなくサラッとすすぐ」

## 江戸店持ち京商人（えどたなもちきょうあきんど）

京都にいて江戸店経営を番頭に任せた豪商たち。

江戸に支店があるが、本店は京都、というのが上方出身の商人の自負だった。実際、金融機能を上方が握っていたから1657年、明暦の大火後の復興がうまくいった。しかし、1750年ごろから上方と江戸のバランスが次第にかわっていった。

## 江戸付く

人間らしくなることである。らしくとは、まだ、本当は違う。本当のものに近づいたということです。

江戸では、人間らしく、学者らしく、江戸人らしくというように、らしくという尻尾を付けられるような者になるなど、きびしく言われたそうです。

らしくがなくなり、江戸付いた彼は、町衆として認められました。

## 目つきと言葉の両方（江戸人の目つき）

江戸人が慈しみのまなざしで会話を交わしたのは、権力者には失礼のないように、しかし決して卑屈にならないように振る舞ったためでした。

将軍様のお膝元で、世の中を引っ張っているという江戸人の自覚が、このような気風を育てたのでしょう。江戸人は、目つきと言葉の両方で、人の態度を観察しました。また、それが癖となって身につくよう、訓練もしたのです。

誰かに何かをしてもらった時に、「ありがとうございます」の言葉だけでなく、目つきでも感謝の心を表せたら、さらに気持ちは伝わるはずです。言われた方も、自分のしたことへの満足感を得るでしょう。

## 江戸の聞き上手（江戸の言葉は話し言葉中心）

人の話を聞くときは、体を少し前に乗り出す恰好で聞く。筆などを持ったら、「かわら版みたいに失礼なしぐさはおやめなさい」と叱られた。紙に熱心にメモをとるのは田舎式の考え方。どんな意見でも素直に、知らないふりして、いろいろ聞いてあげる。長い話でも相手の言葉に耳をかたむける。

## 江戸物腰

江戸町衆の言葉づかいや人に対する態度、立ち居振る舞い。

## 江戸の教え

視覚・聴覚・臭覚・味覚・触覚・五感を使え。

六感のにぶい女と所帯をもつと主は中風にかかり、家の中はゴタゴタがたえず、子は鬼の子になる。透察力と空想力を養う事が必要です。

## 江戸の葬式（観衆の江戸しぐさ）

陽のしぐさです。明るくからっとしていました。

お坊さんが、集まった稚児たちに路地説法（おまんじゅうなどを与えて、故人の徳をたたえ、ご来光

を迎える言葉)を話す。

人生芝居を立派にやりとげた役者が、舞台を去ったのですから、感動して泣くのもよし、笑うもよし、口を聞かぬもよし、大声をあげるもよし、つまり「自然に振る舞うのが、死者という役者を見送る観衆の江戸しぐさなり」という次第です。

高雅・幽玄なる江戸の世界に 心の他美(旅)を

気高く優美で、ものごとの趣が奥深く計り知れない江戸。こころの豊かさにふれなさい。

江戸の百人番頭

最上級の男の褒め言葉。唐人の間に出しても恥ずかしくない男っぷり。

一人で百人もの部下を育て使いこなす力のある人のことを言います。

江戸の無返盃

無理にお酒をすすめるな。「京の返盃、江戸の無返盃」

江戸の歴史は十当たり

江戸の歴史はそれぞれの立場によって理解の仕方が違う。

人は十人十色だから、一人一人に合った対応が必要、臨機応変に手段を講じなさいという考え方が基本にある。

八代将軍吉宗は「江戸には六十万の江戸がある」と言ったそうです。

お江戸の知恵(リサイクル)「稲藁」

江戸は無駄のない、ゴミの出ない循環社会。

雪隠(せっちん)にたまった排泄物の屎尿(しにょう)をすべて郊外の農村地に運び、肥料に変えていた。この汚物処理の仕組みによって町の衛生が保たれ、同じ時代に繁栄をしていた海外のどんな都市よりも清潔な環境を作ることができたのです

われたもの、壊れたものなどの修理屋、すべての物をゴミにしないで再利用しました。

食べ残しの物などは、小動物のエサになりました。

- ・ろうそくの流れ買い
- ・とつけえべえ(とりかえっこ)
- ・資源、時間、労力を無駄に使っていませんか
- ・ゴミはそれ以上減らせませんか
- ・新たに買う前に、今ある何かで代用できませんか

江戸の呼び名

江戸商人は江戸を「まさかの町」と呼び「まさかの町で、まさか」などと、言わないことが、江戸商人の良さで、「それこそが、いきというもの」でした。

魚河岸(江戸湊)

江戸の台所 日本橋魚河岸が誕生 関東大震災まで続きました。その後築地に移転

魚河岸の商いは、一日千両動いたと言われています。

泰平を維持した

戦争のない世が長く続いたことは 江戸の知恵にあります。

江戸食事仕様

江戸では、明暦の大火後、食事の回数が一日二回から三回になったそうです。

江戸はいつ戦乱がおこってもよいように、人々はいぎという場合のために、非常食として米を蒸してこね、ねじり棒として浴衣やかたびらに縫い込んでいました。



例えば、火を使わないで食べられるものは火を使わず、半煮えで食べられるものとよく煮なければ食べられないものに分け、百万都市の省エネルギーも考えました。よく煮なければ食べられないものは共同で煮て分けた。少ない材料と燃料で、もっとも栄養高く料理し、食べることを競ったそうです。

「大根の日」には、大根を煮たり、焼いたり、刻んだりして大根百態料理をつくり、女たちはその腕を競った。

## 春仕込み

春に収穫するものを 準備すること また 春いただくものを 準備すること。

秋や冬のお楽しみに必要な準備「秋仕込み」や「寒仕込み（冬仕込み）」と、仕込みの時期は一年に何度かあります。しかし春仕込みは「花（見）仕込み」とも言われています。再び生命の息吹きを感じ始める春、その春に収穫したものを使用する「春仕込み」は、凝縮した旨味や強い効果こそ薄くはなるものの、生き物の持つ本来の力をじんわりと与えてくれます。

もう一つの「春仕込み」は、現在の日本では多くの学校、企業が四月を新学期、新年度としています。四月から新しく物事を教わるとするのなら、学ぶ準備は三月には始めたいものです。体調を万全に整え、学問や仕事に集中する妨げになるものを片付けるのです。受け入れ態勢が整っていなければ、せっかくの仕込みも台無しです。

「仕込む」には「教え込む、教育、鍛え上げる、育てる」と「下ごしらえ、準備、支度、手回し」という意味があります。

## 江戸料理

和らぎの印！・・・やすらぎの表徴。

基本が応用で、応用が基本なり。（神明女を参照）

五指相（ごしあい）たすく・・・もって味よし・・・とかいう言葉がございました。江戸料理の味を良くする五要素・・・作る側①水、②味噌、醤油、塩、③腕、食べる側④品（ひん）食べる人の品の良さ、品とは口がこえ、手、顔の表情が豊かで・・・と、いろいろございます。⑤お仲間・いくら結構なお味のお料理でも、一人で食べるのは、美味しくございません。仲よし仲間と食べると一段とおいしくいただけるでしょう。仲間は大切にしましょう。

江戸料理はそのものの味を食べる。東京料理はそのまわりの味をたべる。

## 江戸料理の心得

夫婦で作るが原則・和（やわらぎ）のしるし

- ① お買い物心づかい
- ② お買い置き心づかい
- ③ おしたごしらえ心づかい
- ④ 御入れもの心づかい
- ⑤ お味つけ心づかい
- ⑥ おもりつけ心づかい
- ⑦ ご吟味がた心づかい
- ⑧ おすすめ方心づかい
- ⑨ おかたづけ心づかい
- ⑩ お食事ばなし心づかいがある。

## 江戸一人もの心得（食事の巻）

- ① 健康な時の食べ物
- ② 病気の時の食べ物
- ③ 頭よくなる食べ物

## 江戸わずらい

脚気（かっけ）のこと。

五代将軍綱吉の頃、精白米が主流になった。白米が美味しくおかずなしでも食べられたので白米だけをたくさん食べた人達は、ビタミンB1が欠乏し脚気になる人が出て来た。

長屋の住人は、納豆や味噌汁、豆腐などを一緒に食べていたので脚気になる人は少なかったそうです。五代将軍綱吉が若いころ、脚気になったことがあり、ぶらぶら過ごしているだけでは時間がつぶせ

ないと、練馬大根を育てた。大根がたくさん取れたのでいろいろ料理して食べたこともあって、脚気が治ってしまった。このようなことから練馬大根が人気になったそうです。大根料理がさかんになりました。

当時は、江戸にしかない病気だったので江戸わずらいといわれました。

#### 江戸手前・江戸前

煎茶手前とか番茶手前とかの、あの手前なのです。江戸手前とは何かと言うと、番茶我が物というのですから、つまり江戸の海、我が物。もっと平たく言えば、これみんなの物ということです。江戸の講中（手前ども）全員の共有の物を指した。

江戸前とは、御城の前に広がる海域の事を一般的に呼ばれていますが、他の説では「鮮魚の流通時間・距離」を意味すると言われていました。

#### 江戸前ずし

江戸の文化が生んだ寿司で江戸町民が好む郷土料理。

ごはんの多い大きなにぎり寿司・巻きずし・白魚寿司。

館山の漁師さんたちが獲れた魚を江戸の魚市場にとどけて帰っていたそうです。

#### 江戸三鮓（えどさんすし）

寿司の文化が花開いた江戸時代に江戸で名物として歌われた毛抜鮓（けぬきすし）、与兵衛寿司、松が鮓のこと。

#### なりふり構わず勝ちにいかない

勝つなら格好よく勝ちたいという江戸人の心意気。

勝ち負けにこだわると、禁じ手もありになって、なりふり構わず勝ちに行く輩がいる。しかし、江戸人は、この手の人を野暮として遠ざけた。

もちろん、勝負事だから必勝を期してそれなりの準備をし、作戦を練る備えは忘れなかった。問題は勝ち方にあった。勝つも負けるも時の運と言って、潔さを尊んだ。

#### 年賀の挨拶または書状は一度行えば一生続ける、これが江戸人

新年を迎えるとひとつ歳を取った。いわゆる「数え歳」。新しい節目の日として、気持ちも一新させた。正月には、お世話になった人たちや、お会いできなかった人たちに元気でやっていますというお知らせをしました。

例え、昨年喧嘩した相手であろうと、新年を迎えればすべてリセットされる。新たな付き合いを始める日です。

江戸では商売がうまくいかなかった相手、喧嘩別れした相手にこそ真っ先に出しました。

#### 笑顔の数

しめの内（松の内）15日の間に、一人でも多くの未知の人と出会い、笑顔を交わせば、交わした笑顔の回数に比例して、その年の、ご当人やお店の幸福と繁栄が約束される」そうです。江戸の言い伝えや風習はにくいですね。

#### 緑と水の美しい都

江戸の美しさに外つ国人もびっくり

#### 江戸のカラー

白（江戸城の天守壁の特長）・大根のしろ

#### 江戸のしつけ

子供の頃からしぐさを学ぶことで、人との接し方をおぼえた。

## 江戸躰言葉

今日使っている見習生とか見取図とか言う言葉は、江戸躰言葉の名残です。

江戸の寺子屋でも、教育という言葉を使わず、学び習うとつかっていました。

習うという字も、「手習い鑑」という本の題名にまで使われて今日に残っております。

大学の大は、マサルの意味。学は、マネブこと。まねぶは、良いものを真似して自分のものにして、そのあとは、学んだものよりも、もっと、勝ったものにする。大学とはその様な考への人達の集まった社会。

## 江戸の象徴

動物では象・魚では糸魚（いとよ）

## 江戸仲間葉我喜本

ハガキを閉じて本にしよう。

## 江戸観人学

人を観察する目を養っていた。

## 江戸の「富くじ贈り」の精神

富くじなどを贈りあう風習。

## 江戸御触文（書き）

誰にもわかるように広告した。（幕府や藩主などから町民に知らせるための文書）

## 江戸じる粉

あまり甘くない「お汁粉」です。

これは、手っ取り早くいうと、味噌汁に小豆を入れたようなものです。長く煮込むと少し甘みがでるそうです。相当召し上がっても胸焼けしません。年始回りの前に、一碗召し上がってお出かけになると、お酒の悪酔いが防げて、大変結構だったそうです。

江戸じる粉は、回を重ねるごとに、だんだん好きになって、病み付きになるといった風に、ほのかに甘い江戸の奥ゆかしさを含んでいます。

## 江戸は耳の文化

お話の文化、言葉の文化

江戸では、食事の時、その日の出来事を、家族のみんなの前で互いに披露し合いながら、食べなくてはいけなかったそうです。

寺子屋に行ったときは、師匠の話を良く聞く、友達と仲良くお話しをしようとしています。人付き合いが自然とできます。

# 江戸っ子

---

案ずるより産むが易し（江戸っ子）

結果がどう出るかばかり考えず、やってみたら案外簡単だということです。

江戸っ子はどちらかといえば、陽気な行動派を好みました。

みんな、赤ちゃんを産んできた。大変ではあるけれど、「大丈夫、なんとかなる」こんな体験が下敷きになっています。

「手をつけたら、やりながら考えなさい。やってみれば、いいところも悪いところもわかる。改善点もみえてくる」と続けました。

いき

「おてんとうさまと米の飯はついてまわらあ」といったセルフの意味は、日照権と主食の分配権は、お上ではなくて「われわれがもってらあ」という江戸っ子の意気です。意気とは京の粋に対して、江戸では町民優位で「生き生きと生きて、意気を示す」の「意気」がもとでした。「江戸しぐさ」のイキは、生きた知識（おもき心）の事です。

人間集団になると、江戸のイキは生きと意気の投合の心意気だと、町衆は考えました。

お天道様と米の飯はついてまわらあ（江戸っ子言葉）

お天道様は太陽のこと、太陽の力でいろんな恵みを受けた。人々は太陽信仰につながり尊敬を込めて呼びました。

「嘘をついてはいけない。お天道さまは御見通しだよ」「お天道様に見られて恥ずかしいことをしてはいけないよ」何かにつけて、お天道様が引き合いにだされました。

生きの祝い

稚児が熱いものを口に入れかけて、思わず「熱い」と声を出すのも、イキの示し方の一つ。つまり、親の保護がなくとも火傷をしないというサインと考えたそうです。そこで「熱い」と声を出せるようになると「生きの祝い」をしたのだそうです。独り立ちの第一歩の祝いなのです。とって、稚児の舌を火傷させると、味覚音痴になるといわれ母親の責任になります。いたずらに過保護にならず、つまり、いつまでもふうふうって冷ましてやったりしないその見極めが大事なことだったのです。

いなせ

江戸っ子の威勢のいいさま

神輿を担ぐ若者の、いかにもキリッとしていて、ほれぼれする姿が思い浮かぶ。こんな姿を「いなせ」と形容した

里謡（りよう）の佃節に「いきな深川、いなせな神田、人の悪いは麴町」と出てくる。同じ江戸住まいでも、土地柄で人の気質がだいぶ違う事を強調した。

いなせは日本橋魚河岸の若い衆に流行した髪型「いなせ銀杏」に名を残し、鬻（まげ）の部分が手ぬぐいの柄にもなっている。

打てば響く

即反応、即行動すること。江戸っ子〔江戸児〕の対応の素早さ。

太鼓や鐘は叩けばすぐに音が出る。こうした反応の素早さにたとえて、キビキビとした動きで物事を処理していくことを、打てば響くといいました。

気配り、目配り、手配りの早さは江戸人たちの自慢でした。

## 江戸っ子式の考え方

いやなところならば、自分が飛び込んで、いやなところでないところにしようという考え方。

冷たければ、自分が行って、世の中には、こんなにも心の温かい人がいるものかと、人が感心するほどの人間になって見せるという考え方。

人任せでは気のすまない方、それでいて独善的でなくて和協前進！という考え方が出来る人。

## おいしいお茶をのむ

お茶なんか、どんなものだっていい。そういう人は、江戸しぐさには縁遠い人のようです。

江戸っ子は、自分がこれと決めた以外のお茶は飲まなかったそうです。たとえ、ただでもらったものでも。

ところで、江戸の頃、お茶は高価なものだったようです。そのため、ふつうは法事のように、大事な行事以外には、お茶を人にプレゼントするのは良くないという不文律があったそうです。お茶を人にあげるのは不祝儀のときだけと知っている人は、その名残だそうです。

## 穏やかなひと（江戸っ児）

江戸っ子と言うと、「気っ風のよさ」や「切れのある啖呵」「火事と喧嘩は江戸の華」「宵越しの金は持たない」などに象徴されることが多い。つまり「ちょっと短気でズバっとものを言うが情け深く、あまり後先考えることのない、怖いもの知らずである上に賑やかな事が大好き」なのが江戸っ子気質と思われてきましたが、しかしすべてはその逆であったのだとも言われていた。正義感が強く、優しい心の持ち主。

## 朝飯前（江戸っ子）

朝食前に一仕事（近所の掃除をしたり水撒きをしたり）してしまうほど、身のこなしが軽い状況、何事も手間を惜しまなく処理してしまうのが江戸っ子。

## 音読み・訓読み（江戸の物言いよう）

音（オン）は漢の国（中国）の発音。

音読みだとどんな言葉か区別がつかないが、訓読みなら意味が分かる。

訓（クン）は漢字を国語にあてて読む。江戸っ子はとても気位が高く、外国から伝わった文字でも、もとの外国のオンで読むのを大変嫌いました。一度自分たちのものにしてからでないと決して使いませんでした。

## 即実行

すぐ実行する、江戸っ子の心意気の象徴。

「善は急げ」「四の五の言う前にやってみろ」など、実際に行動に移すことが大事な場合、こうした言い方をした。気が付いたら自然に体が動いている。まずかったらやり直せばいい。こんなノリも必要です。

実際に行動してみれば、良かった点もわかるし、悪かった点の改善策もみえてくる。何ごとも頭の中だけでイメージしているだけでは分からないことも多い。

## 片目つぶり

ウインクの事で、了解の意味をしめすことです。

片目つぶりは、口約束と同じで必ず守らなければいけない江戸っ子の心意気の表現。

## ご隠居

歯が駄目になったら、人前で偉そうなことは言えませんでした。そして、第一線から退いたのです。

## はじめにおわび申し上げます

江戸っ子は、なんでも罪を自分にかぶせて、最初に謝ってしまわなければいけないという考えだった

そうです。

ひとまかせでは気がすまぬ

江戸っ子の生きがい。

二つ返事

何か頼まれごとをしたときに気持ちよく引き受ける事、そして即実行します。

江戸っ子とは(気質・根性)

江戸っ子とは、一般的には3代続いて江戸で生まれ育った生粋の江戸の住民を指す呼称。

江戸っ子の性格・慣習・気立て、考え方。

「白黒はっきりさせる」「小さいことは気にしない」のも江戸っ子。

世の為、人の為と言うように横の関係で物事をかんがえる。「ありがとう」に対して「礼にやあ及ばないよ」。

もし、巾着切りにやられたら、うちの親戚にも悪い奴がでたもんだ。でも、俺でよかった。なけなしの金を取られて、首をくくるような奴から取ったとなったら、俺の親戚の名折れになるとこだった式考えです。

# 江戸講

---

## 講・「江戸講」

講は社会でなく世の中のこと。平たく言えば、人間の生き方のでだて、講中全員が出席しなければ始まりませんでした。全員は一人をいたわり、一人は全員を気遣う江戸町衆独特の互助・協力の精神が培われました。

江戸講は、江戸町衆の生活の基盤であり、土台であり、基礎である。

また、学ぶだけではなく、よりよい地域をめざして話し合ったり、何か困っている人がいれば相談にのったりと、相互秩序をめざす町内会のような存在でもありました。

人口が増えると、人間同士の摩擦は多くなります。この物理的・精神的ないざこざを少なくするために、言葉づかい、しぐさ、つきあいかたの三点に工夫がこらされ、生活の知恵が生まれたのです。

## 講座

「お講」の座で、同士の「座」です。特定の人たちが座を組んで講を考えるのが講座の本来です。

自分たちの暮らし方について、人々が車座になって話す場所。

## 江戸の車座は上下関係がなく同格である

講は輪のように座ります。同等の立場である。

## 車座

胡座間に胡床をおいて、胡床居で開くのが正規でしょうが、平たく言えば、なんのことはない「胡床居」とはアグラのこと。

## 講師（講の長）

講中の代表。

## おひがかりさん（ぼったんさま）（お杼係り）

江戸講の世話役、幹事役。

機織りの緯糸を通すために杼（ひ、シャトル）が一気に通る隙間。ここを糸が通ることで縦糸とからみ織物が織りあがり生地が出来上がる。まとめ役として重要な立場の人の事。

機織りの音がぼったんぼったんと音を立てるので子供たちは「ぼったんさま」と表現をしました。

## 講中心構え（江戸町衆の生活は「講に始まり講に終わる」）

江戸講中になることは容易、誰でも気安く受け入れてくれる。だが、立派な講中になることは容易なことではない。（「江戸しぐさ」が出来なければ講中にはなれません）

江戸町衆たちは、講の日のために姿勢を正すのである。生活のあり方、やり方を考えるという事である。昨日までの自分の態度、挙動、物の考え方などを反省し、明日の自己の行動にフィードバックさせて、自己調節をすることである。

江戸講は、祈りの場であり、先祖との出会いの場であり、同時に生き仏（生きている人間）たちとのふれあいの場でもある。

講の当日は、朝風呂に入って身を清めなさい。雨が降ったって、雪が降ったって行きなさい。

商人たちがメンバーである講のテーマは町並みづくり、世の中の動き、人間関係を円満に。講中は実践、実学を大事にしていた。ものの考え方、言葉遣い、振る舞い、食事の時の作法とか。

## 講の御堂もしくは御講堂（おこど）「講堂」

会議室。

「講」は人を制すべからず

身分・立場の上下が無く平等の立場で意見交換をして町の発展の為に尽くした。

講に出る時

一期一会の精神で

「講」に出る時は、当日、全員が水を浴びて体を清めて出向いたそうです。「お互い、明日はあの世に行くかもしれない。だからこそ、今日集まったこの時を大切にしよう」と考えたのでした。これっきりの出会いになるかもしれないという覚悟があったから、事前に体を清め、身も心も正したのです。これぞ「一期一会」の精神であり、江戸の町衆たちが心がけたことでした。

①朝湯に入って身を清めます②女は化粧をおとします③男は、水杯をして家ですます④必ず意思表示します⑤見ず知らずの人に合いに行くと思っはなりません⑥二次会は江戸では「御法度」。

女は化粧を落とす

講に出席するときにはありのままで見てもらうこと。講には医者も出席していたので顔色を見て頂く。

講師のおもいやり

話しがつまらない時には、会場内で居眠りをしてもいいのです。居眠りが2割を超えた場合の講は中止か、お話を交えるしきたりです。

意構

人の頂点に立たねばならぬ者の「心がまえ」。

(心構え・考え方・生活の心得)

つきあい

人間関係の基本は対等な付き合い。

江戸時代は自分たちと違う意見や、異質に感じるものなどを差別、区別するどころか、むしろ尊んだのです。そして、進取の気性に富んだ人を高く評価しました。

江戸時代の付き合いといえば、講がありますが、この集まりでも、初参加の人に、年齢・職業・地位などを聞くことはせず、本名で呼ばず、最初から歓迎し、受け入れていました。

人と人が、しっかり手を取り合うこと。お講はお付き合いの場(世間)という事ができます。

大人付き合い(他人の良さ)

講に急用で出席できなかった場合に、身内で他の者を立てます。

お子たちも新しい人間関係がうまれたり、思いもよらない「他人の良さ」を発見したり見知らぬ大人の世界に入ることによって大人への一歩を歩き始めます。

心のまほろば(住みやすい場所・素晴らしいところ)

江戸講は、太平の永世を悠々と生きた江戸町衆たちが、期間をかけて磨き上げ、築いていった「心のまほろば」でした。

生活の知恵

人間が増えると、摩擦は大きくなります。この物理的・精神的ないざこざを少なくするために、言葉づかい、しぐさ、付き合い方の三点に工夫が凝らされました。そして、知恵を出し合い、助け合うために「講」というコミュニティが考え出されたわけです。

躰とは

身を美しくふるまうこと。

稚児は寺子屋・大人は講



子供は寺子屋で大人への道を学び、大人は講で、江戸町衆としての誇りと自覚を学ぶ。  
何もわからぬものですが

最初にそう伝えれば 講師は一から教えてくれる わかったふりをする人には  
それなりの対応となる。

見ず知らずの人に会いに行くとは考えない

講に出かけるときは お仲間に合うと考える。

糸口見付け

揺れる心を鎮め不安を少なくするために、講という小宇宙を考え出して、何かに付けて講を開いては、問題解決の糸口を見つけたり、手立てを立てていたようです。講中との交わりを「糸口見付け」などと言うのも、そのためと思われま

水さかずき

家を出て「講」に行くときは帰れないかもしれないと考え、水を飲んで出かけるしぐさ。

自分を知り他人を見る目を養う

講の目的。

師匠と寝食をともにする

講では、師とともに生活するという

仲間づくりを奨励した「江戸の知恵」

江戸講の心構え。

月にただ一度が良い

会合は回数が多いばかりが良いことではない。

めつむりのことば

講のはじめに心を整える言葉書き。

よりよく生きる工夫をする場

講。

新人の入会

講に新人がはいってきたら、新しい家族が増えたようなつもりで迎え入れる。

一人一人に一講（てだて）

何かをきわめるのであれば一講。講は「生涯学習の場」さまざまなことを学び、教養を身につける場所であり、文化や趣味を楽しむところでした。

江戸の講（一部を紹介）

八百八講

江戸にあった多くの講の表現。面白おかしい集いがありました。たとえば、入れ替え講（子供が増えたら一時的に住まいを取りかえる）孫添え講（孫と話したくても孫の無い老人と夫婦共働きで、子の面倒を見てくれる老人を探している夫婦が話し合っ

て子をあずける講）  
大八講（大八車に生活用品の中古をのせ歩き希望者に供する講）など。

隠居講（老入りとも）

戸主が家督を他の者に譲る。世間の立場なども他人に譲って悠々自適な生活をする。

その様な人たちが集まってできた講。

江戸稚児講

子供ばかりの講。いろいろな遊び方や子供同士の「つきあいかた」、大人と接する時の礼儀や話し方

などを学びました。稚児団子（山菜を入れた団子）や淡雪かんろ（シャーベット状のもの）のような江戸稚児の大好きな菓子づくりまで、すべて子供の手で作りました。この講の特色は、例えば父親が病気をして生活に困っている稚児がいれば、みんなで「しじみ取り」をしたりして助合講に委託して売却し、その売上の中から生活困窮児にカンパしたりして、互いに助け合ったということです。

#### 江戸問答講

何か問題がある場合、みんなで自分の事のように真剣に考えました。

あやかり講を開いて福を招く そのごとく人と講を愛す

他の人があやかりたいと思うほど幸せな人を招く。徳のある人などをみて自分にも分けて欲しいと願う。

#### 女講

春・秋の彼岸に主婦が集まり飲食をする。

#### 子持講

子供を持っている人たちとか子を身ごもっている人たちの講。

#### 助合講

困っている人を助ける事だけを目的に作られた大人だけの講。

#### 頼母子講

金銭の融通を目的とする民間互助組織。

一定の期日に構成員が掛け金をだし、クジや入札で決めた当選者に一定の金額を給付し、全構成員に行き渡ったとき解散する。鎌倉時代に始まり、江戸時代に流行。頼母 子。無尽講。

#### 出前講

講に向いてお話をする。

#### なまず講（地震講）

地震の科学的な予知のできなかった江戸時代に時刻・場所を選ばずに、突如、太平の江戸を襲う大地震は、台風や水害と同様に恐ろしい自然災害でした。人々は、鯰が地震に関与していると考え、神田用水や大川（隅田川）周辺に「御鯰番」をおいて鯰の顔色をうかがいました。この鯰番をリーダーに結成された。

#### なます講（なまずのことだけど、江戸っ子は濁らない）

万が一のときに結成された江戸っ子の組織。

#### なまずの天地がえし（避震小屋）

江戸の地震は上下動、いわば直下型地震とみきわめて、城普請も石づくりは土台だけにしたといいます。倒れた時の圧死を防ぎ、下敷きになった人の救出や後片付けを楽にするための配置だったそうです。

いざという時は、日頃の教えは無視しての「飛越ししぐさ」をしなければ間に合わない事を百も承知していたようです。万一の時は、「なます講」などの組織がすばやく結成されました。ただちに炊き出しや人命救助活動にあたった。

#### べからず講（するなかれ・してはおかしい）

「～してはいけない」という意味。公文所でつかわれていた「べからず」には強制的守らせようとする「上意下達（じょういかだつ）」の意味があった

江戸しぐさの中では、強制するのではなく、自分が「するなかれ」と律する心を養うというのが、会の「べからず講」のスタイルです。

「何故してはいけないのか」が分れば、行動の一つ一つや細かな振る舞いまでをいちいち「禁止」を

する必要はなくなります。そして頭ごなしに「してはいけない」と言われたところで、聴く耳をお持ちになる方はこの世の中そう多くはないということです。

「べからず講」は江戸講で当時盛んに開かれていたようです。商人を対象としたものは「儲けるコツ」から「大店の主人としての心得」まで。

#### 豆息災講（まめそくさいこう）

健康のもと食生活。健康サークル。この講に入ると、鶏は脚気にならぬというのでヌカ飯を食べさせられたり、ヤブツ蚊は夏負けしないといって、ヤブカラシやアマチャズルの干し草をせんじて飲まされたりしました。講にはそれぞれ信条や規則がありました。例えば、湯と水を同時に飲むべからず、飯まとめて食うべからず、腹八分にとめおくべし、食したる後小半時（約30分）歩すべからずなど、いろいろうるさいきまりがありました。

#### 宿替講

子供がふえたらウサギ小屋でがまんせず、家を一時的に交換する。

#### 立春講

「お日待」行事。講員全員が集まり、講中の規約や申し合わせ事項の審議をし、その後地元氏神様の神官をお迎えし、「天照皇大神」の掛け軸とお供え物の祭壇前で講中各家庭家内安全、五穀豊穰を祈念する。太陽を「お日さま」と呼び敬う心。

#### 夫婦円満講

この講に入講すれば、仲の悪い夫婦もたちまち大の仲よし夫婦に早変わりするという講です。

#### 浮き世だんぎ講

はかない世の中を浮かれて暮らそうとする話し合い。浮世絵・浮き世話などが出来た。

#### 木枯し講・常緑樹・わくらば

11月の講の別の呼び方、これは、自然の摂理（法則）や物事の節理（筋道）を理解するために、講師は、わざと講にいやげがさすようにすること。

・講に本気で残ろうとするものは、木枯しや北風をものともせずあつまってくる。そして何があっても、そんなことには平気で参集する講中を常緑樹（ときわぎ連中または、松の木さま、松の葉などとも）という。

・弊講は、そういう江戸のやりかたを伝えるためのお芝居をしているので、本気で昔講の講師のように木枯しを吹かすわけではないが、それでも講師の迫真の演技によって脱落してしまうおさない気持ちの会員もいる。そういうのを、江戸では「わくらば」と言った。「そんなのは講の役にも来春の役にも立たないようにみえるが、地に落ち、くちはてて世の中のコヤシにはなり得る」といわれていた。

#### 福歩き講

講中のお正月の行事。集まった人の一人が もっとも必要なところに 皆で同道してお参りなどすること。人を大切にし、人見が大切。

#### 立冬講は健康講

冬の講で健康を中心としたもの。

#### 若衆講

跡取り衆 同士の講。

#### 娘講

娘だけの講 花嫁修業。

花見講

お花見の為の講。

比岸講

お彼岸の為の講。

福神講

福の神を呼ぶ講。

珍事（耳）講

初耳のことばかりのような講。

ひな祭講

三月に開くひなまつり。

## 「三つ心」三つ子の魂百までも

江戸の人々は、人間は「心」と「身体」と「脳」の三つから成り立っていると考えていたようです。子供の心身の発達に合わせて、いくつかの段階に分けたうえで、最初に作りあげるべきは「心」と考えました。

心はある程度の年齢になると柔軟性がなくなり、いろいろなことを吸収しにくくなる。だから、まだ柔らかなうちに、温かい、甘い、心地よい、痛い、辛いなどの感情、季節の移ろいや美しい物を美しいと思える感受性、人への関心、自然への畏敬の念などを育てていきます。そして、何よりも親からの愛情など、「心の栄養」ともいえるものをどんどん与えるのです。

心が柔らかいうちなら、吸収していく量もスピードもちがいます。その年齢の境は、三歳までであると考え、この時期にこそ人間性を養い育てることが重要なのです。これが「三つ心」ということです。

## 「六つ」しつけ

「しつけ」とは、礼儀作法が身に着くように教え込むことです。

「しつけ」は「しつづける」が変化した言葉ともいいます。三歳までに心を作っておいて、六歳までに、身体の動かし方、身のこなし方など日常茶飯事な仕草を、癖になるまで何度も何度も繰り返させ、自然にそのしぐさが出るようにします。これらは親の行動をまねさせることで、身体に覚え込ませていきました。ですから、親のほうとしても、しっかりと礼儀作法をわきまえた大人でなければならなかったのです。

寺子屋に行く年齢は決まっていませんでしたが、六、七歳から通いはじめることが多かったといえます。また、模倣で様々なことを身につけていくのが六、七歳までという子供の特性に合わせ、六歳までにしつける「六つしつけ」となったようです。

(日常茶飯事のしぐさの例：人との挨拶、迷惑をかけないしぐさ、ご飯の食べ方、箸の使い方、履物の脱ぎ方)

## 「九つ」言葉

商家の子であれば、九歳になったら、あいさつはもとより、「さようございます」などの大人という言葉づかいが言えるように育てます。「よいお日とでございますね」など世辞の一つも言えて当然とされました。

挨拶、世辞ができるかどうかで、その子に商人としての才能があるかどうかが見極められたそうです。

## 「十二」文

十二歳になったらきちんとした文（文章）が書けなくてはいけないとされました。手紙なら、親や商家の主人の代筆ができたり、注文書や請求書など、商売に必要な文書も書けるように鍛錬したそうです。

商家には、主が亡くなっても跡取りがすぐに代行できるという用意周到さが求められたのです。江戸の子どもは十二歳のとき、親がいない万一の状況を考えて、自立に向けて準備怠りなかったのです。

## 「十五」理（ことわり）

江戸時代、十五歳は立派な大人です。

理（ことわり）とは、物事の道理、筋道のこと。十五歳ともなれば、日常生活のことだけでなく、世の中の万事に関して、その道理をわきまえていなければならない。頭で分かっているだけでなく、実

感として体得できていなければなりません。これが十五理なのです。

すべての子供が出来るような、優しいことではありません。子供の性格や個性を見極めつつ、その子に合った将来へ導いてやるのが、江戸の大人の役目であり、使命でした。

#### 一期一会

一生に一度しかないのだから、今を大切に、誠心誠意つくしていくことが大切だという事です。もともと茶道に由来する言葉でおもてなしの真髓をいう。お茶をたてる時に、毎回「これは一生に一度の機会」と言う思いで、お茶をたてる人も、いただく人も真剣に向き合うことをいいます。

#### 一見つき合い

初対面の人との付き合い、あるいは偶然出会った人との接し方。

心から接すると、再びお目にかかる機会に繋がるがよくある。

#### 一に仏のご縁、二に植物を通じてのご縁

江戸人はこのように考えていた。

#### お一人さま

「気楽」「独立」「自立」という良いイメージで使われることが多い。一人過ごすその先に「無縁社会」が待っていることの無いように、人は一人では生きていけない。

#### 一人暮らし最高

一人は人間の始まり、一人暮らしを大切にしたいそうです。

一人一人が集まって、世の中が出来上がっているという事で、一人一人の暮らしが良くならなくては、江戸は良くならないと考えたようです。一人でも具合の悪い人がいたら、みんなで心配したそうです。一人一人の人間を、大切にしたい気持ちがあったと思います。

#### 一人芝居

一人でしているように見えるが、たくさんの助っ人がいるものである。

#### 一人一人が、みんな仲間になるように心掛けるべし

みんなで、こころを許して話が出来た人たちを作りましょう。

#### 一事が万事

江戸しぐさ式、評価のしかた。一目みれば、すべてがわかってしまう。

人間の性格や人柄、ものの考え方はちょっとしたささいな言動にも現れてしまう。

人生経験が豊富な人物から見ると・・・この人は信用できるか、できないか。仕事をきちんとできるか、そうでないか。良い悪いは一瞬で見分けがつく。常日頃から、ほんのささいな事でもゆるがせにしないように心した。

#### 一両得

相手の認識の具合によっては、無駄な話や手間を省くことができ、お互いの得になる。

#### 鐘一つ売れぬ日はなく江戸の春

江戸の町は活気にあふれて男も女もいきいきしていた。一度買ったなら何百年ももつ寺の釣鐘でさえ、毎日売れるとは、という繁盛ぶりを語った。

#### 一声、二文、三こなし

人間は第一、声が良いこと 第二、文を書けること 第三、身振り手ぶりができる。

#### 一に平和、二に付き合い

平和のしぐさであり、共生のしぐさ。

#### 一を聞いて十を知る

論語から出た言葉で、懸命で一部分聞いただけで、他の万事を理解すること。

## 梅一輪の暖かさ

季節をめぐる言葉。

## 青二才はものあわれをしらない 「青くさい」

青二才は、何も出来ない癖に、偉そうな口を聞く若者のこと。

子を育てたことの無い「青年たち」は家庭の味をしらないから「女の迷惑」や「老人の困窮」などが分からないから乱暴狼藉が平気でできるといって、若者を戒めた。これは世の中を変えるのに暴力はいけないということ。

## 顔は二の次

しぐさに応じて、顔は良くも見え、悪くも見える。

「二の次」には「二番目」「あとまわし」という意味がありますが、江戸では「しぐさに応じて」というような意味合いで使われていたそうです。しぐさに応じて、顔は良くも見え、悪くも見える。人間という存在は「形」と「心」で成り立っている。形は人の顔、心はしぐさにあらわれます。

## 二昔になれば忙しい

過ぎ去った忙しさ

## 二分の一

もともと男と女は表裏一体という考え方。

男と女は、前世でも一緒に暮らしていて、この世でも一緒である。そしてあの世でもまた一緒と考える。

つまり、夫婦を例にとれば、互いに二分の一ずつの半人前、二人で合わせて一人前。男と女が協力し合っこそ、世の中が動くというわけである。

## まばらの二八

2月と8月は 商売が振るわないこと。

「三脱の教え」は先入観をなくす

その人の本質を見極めましょう。「三脱」の三は、年齢、家柄、肩書をさします。これを取り除くと相手の人そのものを見ることができます。話し合う時は、立場は同等です。

初対面の人に、この三つを聞いてはならないというルールがありました。

身分を超えた共生の世界。

## 三年付き合い

江戸の仲間入りをして3年たった者同士をいう。所帯を持って3年目の人や、挨拶を交しあつたもの同士もさす。

知り合って3年ぐらいしないと人柄が理解できないので、真の付き合いが出来ない。

江戸では、べんちゃら（お世辞）はご法度、三年付き合いの仲では、輪をかけてゆるされない。べんちゃらは許されない代わりに、自分の思っていること、考えていることを、相当なところまで仲間の前で発表する力も出てくる。発言内容は江戸人的発想の上にたったものでなくてはならないから3年付き合いになるまでに、頭の切り替えをしておかなくてはならないことになる。挨拶の仕方や文のかきかたも、責任のあるものになってくる。

## 三百六十五日の江戸しぐさ

毎日はおろか、朝、昼、晩それぞれ「江戸しぐさ」がある。

朝五つ半(9時)は「おはようございます」それを過ぎると「こんにちは」雪が降ったりすると「つめたいものが降りまして」といい、夜は「お晩になりました」と言った。

### 三方得（さんかたとく）（三方良し「近江商人」）

あることで得をした場合、相手方とこちら方の双方が、それぞれ少しずつ得をするわけですが、江戸では両方得とは決して言わず、むしろ言ってはならず、常に、もう一つ、江戸の町ということを考えて、三方得と呼んだわけです。

「売り手よし、買い手よし、世間よし」

江戸では相手方の方はカタと呼び、こちら方の方はガタと呼びました。

### お迎え三步・見送り七歩

もてなしの極意。

玄関から三步出てお迎えし、お帰りの際は、お客様がお名残惜しいと玄関から七歩、お客様の姿が消えるまでお見送りする。

### 盗人にも三分の理

どんなに悪いことをしても、それなりの事情があったのだろうと相手をおもんばかり。

### 南無三宝（なむさんぼう）

救いを求める。

### 桃栗三年

三年付き合いのこと。

### 向う三軒両隣

自分の家の向かい側の3軒と左右の2軒の家 親しくお付き合いをする。

### 三度目は定の目

三度目は確かかもしれない。

### 四方山話（よもやまばなし）

四方八方（あちこち・さまざま・世間等）からの話題のはなしを「よもやまばなし」という。

### 五根・五覚・五官

五根とは感覚をつかさどる五つの器官 眼根(げんこん)、耳根(にこん)、鼻根、舌根、身根。

五覚（五感）とは視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚

五官とは人間の持つ五つの感覚用器官 目、耳、鼻、口、舌

### 五常の教え

人間として身に付けておくべき五つの徳目

仁・義・礼・智・信。原典は孟子の「公孫丑上篇（こうそんちゆうじょうへん）」

惻隱の心「仁」羞惡の心「義」辞讓の心「礼」是非の心「智」に嘘をつかない「信」を加えた。

この五常、江戸時代の商人はこのほか大事に修養を積んだ。

仁（同情心）義（正しい行為）礼（社会秩序）智（正しい判断）信（忠実）

### 五つの要素

お料理の基本（水・材料・腕・品・お仲間）。

### 五人掛合

五人の会合でのやり取り。

### 六法根性

友だちを互いに立てあう。

### 六日の菖蒲 十日の菊

五日の菖蒲の日、九日の菊の日に一日遅れて間が抜けること。

「七三の道」を心がけて歩く



道路の幅を七対三に分け、七の方はあけといて自分たちは三の方を歩く。

急いでいる人、大きなものを運んでいる人は、七の道を通っていく。他人に気をつかわせることのないようにする歩き方といえます。

人の行き来はとてもスムーズに。

#### 七五三の祝い

子供の健やかな成長を祈る通過儀礼。

「七歳までは神のうち」「子供は国の宝」という発想があったから、江戸の子育ては家庭ぐるみ、地域ぐるみのものだった。

七五三の祝いが町方にも広がるにつれ、呉服商の商売も活気を増した。

#### 七福神

江戸の庶民に人気の、縁起の良い七人の神様。

大黒天（商業）恵比寿（商業、漁業、貿易）毘沙門天（財宝）弁財天（財産）福祿寿（子孫繁栄、財産、長寿）寿老人（長寿）布袋（堪忍、和合）

その役割を見ると、かなりダブリがある。江戸町民はかなり欲張りだったようだ。

正月には七福神を祀っている社寺へのお参りが流行した。この七福神が乗った宝船の絵を枕の下に敷くと、よい初夢を見ることが出来るとあって宝船の絵も大いに売れた。

#### 秋の七草

夏の暑さで弱った体を癒し、来る冬に向けて体調を整える薬として準備する。

・「女郎花」「尾花＝ススキ」「桔梗」「撫子」「藤袴」「葛」「萩」で、それぞれ頭文字をとって「おすきなふくは」と覚える事が出来ます。これらは一見たべられないように思え、実は古来から「生薬」として使われていました。。

春の七草は御粥に入れて楽しむ。

#### 七度探して、人を疑え

簡単に人を疑う事をするなかれ。

#### 難無くして七癖 有って四十八癖

人間は癖をたくさん持っている。

#### 八度の契り（やたびのちぎり）で慎重につきあう

「契り」とは約束の事。人づきあいは、慎重に慎重をかさねましょう。どんな相手でも最低八回は会い、約束を果たすかどうかを見極めなさいとの戒めです。そのくらい会ってからでないと、自分の事を軽々しく話してはいけないとされました。そして、ようやく本名を教えるほど、慎重な人づきあいをこころがけたのです。

一目惚れしても心気安く名乗り合わない。

#### 十年者

江戸の講の教えに「十年初心に帰る」という言葉があったそうです。講に入って十年ほどたつ人達は、後輩達のために、十年間の経験や感想などを書き残したり、説明したりする習慣があったそうです。

自分の十年間を振り返り、人に教える事で、十年前の自分が持っていた初心にもどり、あらためて気を引き締めたのでした。

#### 十年者は文化の伝承者

十年者が何も物を言わないと文化の伝承はとだえる。これが江戸の教えだったそうです。

## 十五夜の楽しい行事

中秋の名月。

お月見、月見団子やすすきを飾る。

十三夜・二十三夜・二十四夜・二十六夜もあった。

## 十五年たてば義務や義理は果たせる

充分と言える。

## 十五年付き合い

本物の付き合い。

## 弱冠（代）

20代 年の若いこと。

## 二十日正月

1月20日は正月の終わりとなる節目の日、正月の行事は終了。忙しい方には20日まで正月行事が許される。

## ひとめさきを見るひらめき

江戸では「ひらめき」は信からと伝えられてきました。信とは己の五感（目（視覚）、耳（聴覚）、鼻（臭覚）、舌（味覚）、皮膚（触覚）＋第六感（五感を総合して瞬間に判断する能力）を確かめ、他人に素直に接し、自然（じねん）に暮らす生活から生まれるものなのだそうです。

## 節気はじめ

2月は旧暦の正月、今日における2月はもう一つの「年初め」そして「節気初め」節目節目を生きる姿勢が人生における挫折や失敗を乗り越えやり直すチャンスになる。

## 知命（代）

50代にして天命を知る。

## 睦の月

一月、旧の呼び名で睦月。「二十日正月」「みそか正月」二十日とか三十日に、一息ついたところで、「仲間同士」で名残の正月を楽しんだようです。

## 何かの集まりを始めたら十五年は最小限続けるべし

講の理想。

## 桜の花が咲いたら1年先、3年先、5年先、そして15年先のツボミを数えろ

子供の成長を見守る楽しみ。（ものの考え方）

## 四十八茶百鼠（しじゅうはちちやくねずみ）

茶、鼠、藍の限られた色を巧みに使いこなした。

江戸時代、庶民が身に付ける着物の素材は「あさ」または「木綿」に、色は「茶」「鼠」「藍」に限定されていた。しかし、微妙な違いを作り出し、遊びにになってしまうのが江戸町民の才覚だった。

染職人たちは次々と微妙な色合いを生み出した。

特に茶系統は約八十種、鼠系統は約七十種にのぼり、その都度、新しい色名がついた。

四十八茶百鼠は、そんな素晴らしい色彩感覚を言い表したもので、リズム感よく話しやすいように語呂遊びにもなっている。

暮らしの中に、遊び心がたっぷりうかがえ、しかも「いき」とはどのようなものか実感できる。

## しぐさのつくもの

---

### あいづちしぐさ

対等な立場で生きたやりとり。相手の話に関心や理解をしめすしぐさ。

あいづちしぐさの基本は

- ①知ったかぶりをしない
- ②いいかげんなあいづちは打たない
- ③相手の話は丁寧に聞く

など、心の空間の広さを持つことが大事。

江戸商人たちは、お客へ損させないことを大事に、「あいづち」の打ち方で売れるものも売れなくなるということを、身に滲みてしっていた。なにしろ石の上にも三年で商人の基本を覚えたら、後の七年は「あいづち」の訓練をしたのだそうです。

例をあげますと、「知っている？じつはね」と話されたら、「初めて聞くよ、詳しく教えて」などと次の話しへと膨らませる会話術のことです。

### 相性しぐさ

良い相手を見つけるのには、相手のしぐさをもう一度見直したらよい。

しぐさには無意識な潜在的欲求が現れるものです。

### 遊び心で見るしぐさ

歩きながら学習する。

### 頭越ししぐさ

紹介者の恩義を忘れて相手と直接つきあうこと。

紹介を受けて一つの事が成就したら、「おかげさまで」の報告をしましょう。

そのあとのお付き合いが続いたときには、紹介者に迷惑の掛からないように行動し、たまには報告することが大事です。

「あと引きしぐさ」で名残を惜しむ

別れた後に、相手にまた会いたい、もう一度、話したいと思わせる行動のこと。

別れ際に、「さよなら」と言って別方向に歩き、お互いに振り向いたりすると「また、この人と会いたい」「もう一度、この人と話したい」と思える余韻が残るしぐさ。

風情ある人との別れが大切。

### 荒物しぐさ

お客様の御用を次々に並べ、お客様に選んでいただくこと。

### 暗黙しぐさ

江戸しぐさでは、口に出して言わなくても、母親の胎内に生命が宿ってから数えの十五歳まで、段階的に子供の成長に応じて養育してきた。

まず胎教から始まり、三つ心、六つ躰、九つ言葉、十二文、十五理で未決まるとした。

動植物に対する優しさを育み、人間として社会で暮らしていく知恵を教え、話し方や文章力を鍛え、さらには自然現象を通じて物事の道理を理解できてこそ、江戸社会のスタート台についたと、考えていた。

### 意気合いしぐさ

商売でも遊びでもみんなの気が合えばうまくいくもの。組織や集団が大きくなればなるほど、目的達

成に意気を合わせて結束することが必要になる。

重い神輿を担ぐにも、話一緒、あるいは我一緒という意味の掛け声、「わっしょい！わっしょい！」で意気を合わせ、一つの大きなエネルギーを作り出す意気合いしぐさ。

#### 一声しぐさ

一斎の唱和のことをいいます。老人たちの一声によってハツとして講師のお話に耳を傾け、他人に騙されない人間になるためのしぐさを、頭でなく体で覚えて、江戸者らしい身ごなしを身に付けていったそうです。

「韋駄天しぐさ」は緊急時のみ

「韋駄天」とは守護神のことです。お釈迦様の遺骨といわれる仏舎利を盗んだ鬼を追いかけて奪い返し、また、僧の危機を走って行って救ったとされ、足の早い神様だと言われています。このような伝説から足の速い人のたとえに使われます。

わけもなく町中を突っ走ることはよくない。

#### 田舎しぐさ

田舎しぐさの人とは、地方出身の人を言うものではありません。江戸しぐさが身につけていない、世間知らずの人を指すのです。

#### うかつしぐさ

騙されて品物を買ってしまった時、自分の物を見る目がなかったことを反省する。

#### うたかたしぐさ

心ここにあらずというような頼りない状態。

何をしても上の空の人。たった一度で終わる、続かないしぐさ。

#### 売れ残りしぐさ

婚期を過ぎても独身でいる女性をいう。見栄、強情、欲張り、朝寝坊、だらしない、勘の鈍い、無口、薄情、亭主を尊敬しない、苦勞を知らない人などは嫁に貰えないとされた。「女らしくあれ」という考えではなく、家や商売を切り盛りできる嫁を必要としたようです。

#### 往昔しぐさ（おうせき、おうじゃく）

過ぎた時、過ぎたことは口にしない。

#### 往来しぐさ

往来において気を付けなければならない気配り。往来しぐさを知らない者を「勝平」とか「ぼつと出」といい、無視する者を「狼藉者」と決めつけ、そぐわない（TPOを考えない）しぐさをする者を「在の人」と呼んだようです。

道路を清潔に保ち、御城への道を妨がないようにしたのが往来しぐさ。

#### お嬢さんのしないしぐさ

江戸時代の大人の女性のいろいろなたしなみをいいます。渡し船の中で食べ物を口にするとか。口に食べ物を入れたまましゃべる。汗を手でぬぐう。人の体をたたく。舌を出すなど。

#### おせっかいしぐさ

相手の自立心を削ぐような余計な親切はしないほうがいい。

#### おつとめしぐさ

長年の積み重ねで、一種の習慣化したしぐさ、お勤めが無意識に出来てしまうほど癖になっていること。おつとめしぐさは、義務感を超えた“そうしたい”とする自発的なしぐさをいう。

#### 大人のしぐさ

江戸しぐさは「大人のしぐさ」ですから、人の話は生一本に正面から聞くだけではいけません。頭の

中の畠をよく耕してやわらかくして、角度を変えて話を聞いてください。

さりげないしぐさです。

#### お披露目しぐさ

大人になったらできること。広く人々に知らせること。

#### お目見えしぐさ

人様にお目にかかるときは準備万端、謙虚にありのままを見てもらう心づかい。

お伺いする時は、先方のご都合もあるので、約束の刻の少し前位に伺う。

向かい入れる側は、お部屋のチェックをしておく。

初対面の時、人を引き合わせるときの挨拶や気配りは、その後の付き合いを決める重要な意味を持ちます。

江戸しぐさでは、感性で全体像をつかむから、第一印象を大切に、別れ際には相手側の対応に十分な謝意を表す心得も大事としています。

良い印象、あるいは余韻が残れば、また会いたくなります。

#### 思いやりしぐさ

相手の立場や心情を推し量り、適切に優しく対応する。

思いやりは、人間は仏様の前では誰でも平等、互角だとする考え方の上に確立している。特に惻隱（そくいん）の情とって、強者の弱者への思いやり、上に立つ人の下の者への思いやりが重視されました。

重い荷物を持って困っているお年寄りに手を貸したり、近所の一人暮らしの人に声をかけるなど、当たり前のように、さり気なく相手を思いやる気持ちを行動に出せることが重要です。

江戸では、江戸しぐさができているかどうかで、人物を判断した。しかし、すぐに仲間外れにはしなかった。江戸のことを知らないのだから教えてあげればよいと、逆に仲間に入れてあげようと思いました。

#### 女しぐさ、男しぐさ

女性は慎ましく、男性は思慮深く。江戸町衆が、寄り合いなどで集まる時、女は上がりがまちに近いところに、男はたとえ先に来てもそこから履物で1, 2列離れたところに履物を脱いだ。男は足をひろげてまたげるが、女の場合は、またぐのはたしなみがないとされた為です。

お寺や神社によくある女坂・男坂というのも、差別ではなく、体力にあわせた思いやりのネーミングのようです。江戸人は文字どおり紳士であったようです。

#### 鏡のしぐさで気づかせる

まずは小手調べ。ぼんやりと浮かない顔の人がいたとします。「どうしたの」と聞いて、簡単に心を開くでしょうか。そんなときは、その人の様子をそっくり、鏡を見ているように真似をして、浮かない顔をしていることを示してみましよう。これを「鏡のしぐさ」

と言います。真似られた側は自分がそんな顔でいたのかと気づいてハッとするはず。それから「どうしたの」と聞いてみるのも一案です。

#### かげり目しぐさ

うつむいた、くらい、どんよりとした目つき。

目つきは言葉以上に心の動きを伝えます。陰気な目つきは「かげり目」といって嫌われたそうです。

江戸っ子は陰気な事が嫌い、江戸では明るく、陽気な人が好かれたようです。

#### 駕籠止めしぐさ

「自宅の前から乗らない」「訪問先の家の前まで乗り付けない」「大声を出して呼ばない」というのが、駕籠を利用するときの江戸しぐさです。「駕籠止めしぐさ」は、江戸で成功し、駕籠に乗れる身分になっても、思い上がってはいけないと戒めたといいます。

#### 加勢しぐさ

「お礼参り」の同道をしてさしあげる。

#### 聞き耳しぐさ

うっかり耳に入ってしまったことは聞かなかったことにする。

他人の話を立ち聞きすることは、プライバシーを侵すことなので、最もいけない事とされた。

話し声に興味を持って聞き耳を立てるのは、はしたないとされた。つまり、盗み聴きになるからです。

#### 喫煙しぐさ

タバコは人を煙でいぶしたり、煙で巻くから失礼とされました。

講堂の中では常に禁煙でした。

#### けんかしぐさ

けんかにもルールがあります。喧嘩は必ず一対一で①先ず手を出す前に、何度も相手に警告をだす。

「殴るぞ、本当に殴るぞ」②いよいよ殴る時は頭や顔はねらわない。大事なところは狙わない。③どちらかが泣いてしまえばそれ以上殴るのはご法度「禁じ手」④喧嘩は外でするもの。当事者二人だけでも、外に出れば誰か仲裁に入ってくれる可能性があるから。⑤最後は、必ず周囲の人が仲裁に入ってけんかをとめる「仁義」。

#### ごけぶたづら（離婚しぐさ）

後家になる相をしていること。

#### 小僧っ子しぐさ（田吾作）

突然、一方的に「今日は休みます」「参加できません」と紋切りがたに言う人のこと。江戸時代には「賤民根性」とか「小僧っ子しぐさ」などといったそうです。雇われ者根性をいましめたものと、江戸では教えられていたようです。

目覚めなさいという激励の言葉です。

#### この際しぐさ（飛びこししぐさ）

地震や津波など災害に遭遇したときには臨機応変で、「この際だから」頭越しぐさを破っても仕方がない。江戸しぐさは暮らしの中で育んだ知恵だから柔軟に対応しました。より緊急性の高いとき、何かが起こった時に、多少無理強いをする場合、「この際だから、よろしく協力してほしい」といった具合に使ったようです。

#### 魚屋しぐさ

刃物をめぐるって事故につながるようなことをしない。

魚屋に包丁は必要だが、周りの人達を傷付ける恐れがあるので、細心の注意をしながら使った。稚児のみえる所で魚をさばかない気配りがあったとか。包丁を受け渡しする場合、刃先は絶対に相手に向けて渡さないのが基本でした。ハサミも同じ。

江戸では子供たちが一定の年齢に達してから、命取りにつながる包丁の種類、用途、扱う時の勘どころなどまできちんと教えました。

また、高い場所でする作業や、火を扱う作業等、子供たちが見ている場合も、決して子供が真似してはいけないことを教えました。

#### 逆らいしぐさ

やってもみないうちから、文句を言ったり逆らったりすること。人間として成長しないと戒め、年長者の言う事に素直に従って見るのが大切とした。

年長者からの言葉はそれなりの配慮があるか、本人の成長につながると判断して言ってくれていると思ひ、素直に従えとしたのです。

#### さしのべしぐさ

本当に困っている人や助けが必要と思われた時は、すぐに手をさしのべる。

特に子供の養育に関しては、自立を促すため、本当に必要なとき以外は手を貸さない。子供の自主性を育てる為、江戸町衆たちは子供が五歳になると、「片手になった」と称して、道で転んだ程度では手を貸さなかった。

子供達には大人たちを見習い積極的に学ぶように教えていた。

自立心や独立心を優先したのです。

#### 参観しぐさ

神社仏閣などを参観するときの心得。

人々の信仰の対象になっている場所には、おのずから風格や雰囲気がある。声高にしゃべりながらズカズカと入り込んだら、周囲の人に迷惑になります。心して息を整え、厳粛な気持ちで臨みましょう。

。

#### しぐさとふり

「しぐさ」は心がけが外に出たもの。つまり、しぐさは、考え方、育てられ方などが、顔の表情・くせなどになって体の表面に表れたもの。

「ふり」は心がけが中にはいったもの。つまり、ふりは、手・足・身体などの動きを自分で調整するものです。

最初は「ふり」から始まっても、思いやりの心で接するうちに自然と「しぐさ」になっていけばいい。そうして「しぐさ」を身に付けることが江戸町衆の理想でした。

#### しぐさを変える時

人のしぐさを見て、自分のしぐさを正せといわれた。

#### しぐさ変わりせぬ親の子は

江戸しぐさが出来ない親の少年は、非行にはしりやすく、親も離婚が増える(江戸経典)。

#### 自堕落しぐさ

場所をわきまえて、しても良いこと、してはいけないことを戒めた。

- ①作法をわきまえていないこと
- ②生き方がだらしない
- ③公共のルールが守れない

江戸時代、袴を直す時は、人目に触れないように屏風の陰で直しました。身なりを整えるには場所や時間をわきまえることが重要であるとされました。

#### 少々しぐさ

曖昧な約束はしない。

少々という言い方でなく、今なら「5分お待ち下さい」というように、あいまいでなく、はっきり具体的数字で示しました。

時間をぞんざいに使ってはいけなかったのです。

#### 食事のまえの手洗いとうがい

食事する時に手を清めてうがいをしていただく。食前に手を洗いうがいをすることは「江戸しぐさ」ではもっとも大事なことになります。料理屋で客が手を洗わないで料理に手をつけようとしたら、「ちょっとお待ちを」と手洗い場に案内したそうです。身分の高い人には手を洗う手水鉢を持ってきて、手を洗わせ、口をゆすがせたとか。そのことを見たり聞いたりして育った子供は、手を洗わないとご飯がのどに入らなくなる。食前に手を洗うことは誰でも知っていることですが、洗わないと気持ちが悪くて洗わずにいらえない。このような感性とその状態が「江戸しぐさ」癖です。マナーと違うところです。たれも見えていなくてもすることです。

#### 商人しぐさ（しょうにん・あきんど）

商人の基本となる心がけ、しつけ、身のこなし、人に対するしぐさの心得を教える。

#### 真剣しぐさ

生きている瞬間、瞬間が、真剣勝負という考え方。

#### 人生で一番大事なしぐさ変わり

しぐさの変わらない人はダメ。

#### そしり・妬み・やきの言葉（田舎女房しぐさ）

相手が成功したことを素直に喜ばずに、やきもちを焼いたりすることや、ケチをつけることは「根性が曲がっている」とうとまれた。

「根性」とは、本来は仏教用語で、その人が持って生まれた性質という意味。出世のためならばなりふりかまわず、ライバルの出世を妬(ねた)み、そしる根性の持ち主は人として恥ずかしいこととされた。

ニコニコ笑いながら人の悪口を言う人はいない。そしったり、妬みを言っているとき、その人の目はきつと、周囲の雰囲気は暗くなるような醜い表情になっているに違いない。だれでもそのような人とは付き合いたくないものです。

#### それでも「しぐさ」

「しぐさ」には団体や個人差があります。人間・動物それぞれ違うしぐさで生きています。

「夜、橋のたもとで少し時間をかけて酔っ払いが、突っ立っていました。いなくなった後は濡れていました」ワンちゃんが「おい、人ちゃん。俺のテリトリーを侵すなよ。そこは吾輩の犬益であるぞ」と。江戸では、こんなふうになんか人を笑わせながら、犬のしぐさをまねることは、犬の領分を侵すことにもなるうえに、人間の道にも外れていると説いたそうです。

#### 助け合いしぐさ

「遠くの親戚よりも近くの他人」という考え方で暮らす。つまり、遠く離れたところに住んでいる親や兄弟では、なにかあった時、例えば、病気などで倒れた場合などには間にあわない。だからふだんから、近所同士、仲良くし合ってお互いにイザという時、“助け合いましょう”というシグサです。

#### タバコしぐさ

相手が煙草を吸わなかったり、灰皿のおいてない場所では吸わない。

食べ物屋などで、他のお客の迷惑顔に気づかずに煙草を吸っていると、店の人が「煙草入れをお預かりしますよ」と言いに来たそうです。

#### 「稚児しぐさ」は半人前の証

大人にもかかわらず、子供っぽい振る舞いをする。

大人は大人らしく、毅然（きぜん）として判断を下し、適切な対応をとる。そして結果については責任をとる。本来はこれが当たり前です。

ところが、今、見渡すと、判断もしない、対応もしない、稚児戻りがありすぎる。江戸しぐさは、も



ともと人の上に立つ者なのに残念なことです。

#### 使われしぐさ

商店に入って、どんな仕事でも文句言わずにこなす。すべて人生勉強です。

#### 出かけしぐさ

外出をするときは、自分の子のうしろ姿を気にするような「しぐさ」をしなさい。

他人は、前からだけ人を見るものではない。世間は、母と子の後姿も見ていることを、子にわからせましょう。それが、江戸の出かけしぐさです。

#### 手紙しぐさ

季語をはぶき用事だけを簡単に書く。特に「お返事を頂きたいと申します」と書いてない限り、返事を出す必要がありません。

#### 手のしぐさ（手は口ほどにものをいう）

商人同士の符丁（仲間内だけに通じる言葉）や手のシグナル。

#### 飛越しぐさ（一目先を見るひらめきを身につける）

いざという時は日常のマニュアルは無視する。無視しなければ間に合わないことを百も承知していた。

#### 通せんぼしぐさ

人の通行の邪魔になるようなすべての行動。

人々が行きかう往来で、何人かが横に並んで歩いているため、後ろの人が前に進めないことがあります。また、道の真ん中で何人かが夢中になって話している場合など。

#### 眺めて飽きぬは「緑と人のしぐさ」

見ていて気持ちがいい江戸しぐさは、美しい自然と同様にずっと眺めていたいと思わせた人のしぐさでしょう。こうしたしぐさを確立した江戸人は、普通の暮らしをしている人達でありながら、じつは洞察力に優れた物知りの集まりだったのではないのでしょうか。自分達の暮らしをよりよくすることにかけては、熱く深く考えていたと言えるでしょう。

#### 涙もろい人

現在幸せでない人のしぐさ。昔は良かった人。

#### 「仁王立ちのしぐさ」は大迷惑

人の前で仁王立ちになって立ちふさがること。邪魔な行為。

「仁王」とは、仏法を守護するとして寺の門の両脇に置かれている像です。「何が何でも動かないぞ」とでも言うような表情をして、門番をしています。頼もしい行為でもあり、反面ドーンと立ちはだかっている邪魔な行為でもあります。

江戸では、小さくて狭い橋が多く、人が橋の中央にいたりすると、何となくこわくて渡りづらいです。そのような状況もいいます。

#### 人間のしぐさ

人には人のしぐさがあります。男と女、子供と大人によって違ってきます。

江戸人たちは、年齢や職業に応じて自然としぐさを分けたそうです。しかも、「美しく見えるようなしぐさ」を江戸しぐさといえます。

#### ねぎらいしぐさ

外出して戻ってきた際に「お帰りなさい」「お疲れ様」と声をかける

毎日食事が出来るのも、学校に行けるのも、たまには旅行に出かけられるのも、両親が働いている

から。貴方のために何かをしてくれる人がいる。そう思えば、両親に「ありがとう」と素直に感謝できるのでは。これが「ねぎらいしぐさ」です。また、江戸人は、感謝の心を物や自然にも感じました。まだ使える物は形を変えて使い直すなど、「もったいないから大事に使おう」といって物をねぎらい尊びました。

#### 「念入りしぐさ」で商売安泰

念には念を入れて確認すること。

優秀な番頭は、つり銭に間違いはないか、お客様の忘れ物はないか、在庫は適正か、と念には念を入れて確認した。非常に用心深いです。

この念入りしぐさが出来る番頭さんがいれば、お店は安泰と言われた。念入りしぐさが出来るという事は、気働きが出来るということでもあります。

#### 年代しぐさ

各世代が互いに元気で生活できるようにと、年代に応じた暮らししぐさもありました。

・たとえば15歳のころは駆けるように歩き、20歳のころは早足で、30歳のころは左右を見ながら注意深く、40歳になった人が若いつもりで足早に歩くと、腰をいためるとたしなめられたそうです。そして、60歳を超えたら、「おのれは氣息奄々（えんえん）」

・15歳で学問を志し、30歳でどのような人生を歩むか覚悟をし、40歳になったら、その歩みについて確信をもち、50歳になったら社会に対する自分の果たすべき使命を知る。そして、還暦になったら世間で起こるたいがいのことは、そのまま聞き流せるという。

#### 野良犬しぐさ

いきあたりばったりで計画性のないしぐさ。

#### 「呑気しぐさ」も大切なしぐさ

すぐに成果が得られなくても、いらいらせず、ゆったりとかまえる。物事を陽にとらえてあせらない考え方。

急ぐ事ばかりが商人道の奥義ではない。

#### 恥は掛けても絵も字にも書けないもの

しぐさである。

#### 繁盛しぐさ

商売繁盛のためになるお客様に接する心からのもてなしを教えた。

#### ひとりじめしぐさ

もつとも良くないしぐさ。

#### 人のしぐさを見て決めよ

身なりや持ち物ではなく、しぐさで判断する。

取引先として信用できるか。人生のパートナーとしてふさわしいか。そんな判断をせざるを得なくなったときは、「人のしぐさを見て決めよ」これが江戸しぐさ流の答えだった。

江戸しぐさは身体に癖になって染みついでいて、さまざまな状況の中で、その人の本質が反射的に出るもの。だから、江戸の町衆は身なりや持ち物でなく、しぐさで競った。身についたものだから、いつでもどこでも表現できるし、裸になってもメッキのように剥げることはない。しぐさにはその人物のすべてが反映します。

#### 不意打ちしぐさ

立ち寄るときは必ず前もって相談する。いきなり訪ねない。

人を訪ねる時は必ず予告すること。他家に嫁いだ娘のところでも、近くに来たからって言って、いき

なり訪ねることはしない。娘は商家のおかみさんなのだから商売の邪魔になる。

「不届きしぐさ」は自己中心

他人はどうなっても、俺は俺という考え。

人を押しつけてまで自分の意志を通す自己中心的な考え。

江戸町衆にとって、「不届きしぐさ」は罪に値するほど許しがたいしぐさだった。各地から集まった風俗や習慣の違う人たちが、大都市でうまくやっていくため、互いに助け合って仲良く生きていこうという精神を踏みにじるものだったからだ。

「不届き」とは、行き届かない事。周囲の人々への心配りが行き届かないという意味です。

みんなで力を合わせてやった仕事を自分だけの手柄にしたり、派手に世間に触れ回ったりする人を、

「目立ちたがりや」としてきらったのも、本音は「不届き千万」。

不惑しぐさ

又聞きして、判断を誤まらない。人を見る目を養う。

「本人に直接聞くべし、また聞きするべからず」

「へ」と「に」

～への場合は方向、～には場所を示すことを、正確に使い分ける。

「へりくだりしぐさ」は奥ゆかしい

商人たちは、どんな相手でも自分より優れていると考え、自らを「手前ども」「私ども」と謙遜していいました。これが「へりくだりしぐさ」です。相手が誰であろうと同じように振る舞いました。弱そうな相手には強気に出たり、文句を言った方が勝ちという最近の社会では見かけなくなったしぐさですが、相手には常に謙虚な気持ちを持って接したいものです。

芳名覚えのしぐさ

講などで直接名前は聞かないのが江戸のマナー（人の名前を覚えるのにもルールあり）。第一回目に両隣りの名前を覚える、次に正面の人とその両隣の名前を覚える。いつの間にか順次覚える。何回出席しても覚えられない人もいるが、それを馬鹿にしないのが江戸しぐさです。

訪問しぐさ

予告もなく訪ねたり、勝手に予定を変更するのは刻盗っ人です。

江戸町衆では、あらかじめ「いついつ伺います」という手紙を使いの者に持たせました。急用の時でも「これから伺います」という書付を持って走らせたほどです。

商家には、担当の小僧さんがいたそうです。

頬杖しぐさ

頬杖をつかない。病気の兆候。

町歩内畜生しぐさ（まちあるきのうち ちくしょうしぐさ）

動物と人間とは違うから人間は人間のしぐさをしなさいということです。

いぬ、ねこ、うしなどの真似をしてはいけません。

目引き鼻引き合点のしぐさ

江戸の町屋の人々には、武士以上に「二君にまみえず」という忠誠心といさぎよさがあつたそうです。

。

見下ろししぐさ

助けてやるぞといった態度で手を貸す。相手のプライドを傷つけてしまうしぐさ。

見越しのしぐさ

一人前の大人なら、つねにアンテナを立てて一目先を考えながら、仕事を進めるのが当たり前という考え方。

江戸商人は最低、一年先までの見通しを立てなければ商売をする資格がないとまでいわれていました。

願望の強さで道が開ける、運命は心の中にあるという姿勢が原動力になって、自らの目標が達成できると考えたのです。

望まなければ何事も起こらない。心が変われば行動も変わる。

水のみ百姓しぐさ

集団を意識する。

見通しのしぐさ

世の中で一、二年以内に起こることを予測、対応する。

見舞いしぐさ（陣中見舞い）

責任者不在の中日にさしあげる陣中見舞い。留守を預かる者への慰労。

椋鳥しぐさと水母しぐさ

自分の言いたいことだけをしゃべりまくり、周りの気配が読めず、道理をわきまえない人を椋鳥という。椋鳥は人間より「金や物」を大事にするので、江戸人の「人間優先」の考えと違い受け入れられないとした。

水母はわっと押し寄せてきて海の水が引くように去って行くことです。

無悲鳴のしぐさ

思いがけないことに遭遇してもあわてないこと。

いざという時の対応で、人物の器は自ずとわかる。慌てふためくか、眉一つ動かさず沈着冷静でいられるか。器量とは器にどれだけの量が入るか、と書く。人物の器の大きさを試される。

巡り合いしぐさ

人から人へと伝言をしていく。そのときに、理解をして後任の人に伝わらなければそれは終わってしまいます。人が巡り合って伝えていくことをいいます。

もったい大事しぐさ

もったいないからすべてを大事にしよう。

江戸では現在で言う「リサイクル」「リユース」が発達していました。たとえば、使えなくなった古い傘を安く買い、傘の骨は再利用し、貼られていた油紙は包装紙にしました。古着は表、裏、中綿の三つに裁ち、必要な部分だけ売りました。物が古びれば修理に出してとことんまで使い込む、そしてそれをさらに別の商品に再生する。江戸はめったに物を捨てない高度な社会でした。

融合のしぐさ

お付き合いは、自分がちょっと下出にできれば上手くいく。

用心しぐさ（片目だし）

屋内から道路へ出る時の用心しぐさです。

広い道に出る際、まず右、そして左と、様子を伺う用心を

江戸の町では、十字路では狭い道より広い道が優先、どちらともつかないときは、先に来た方が優先という暗黙のルールがあり、用心深くでありながら、非常に合理的でもありました。

どこにいても、つねに周囲に気を配り、犯罪や事故を寄せ付けない。

陽のしぐさ

物事を常に前向きにとらえて生きる。現在で言うプラス思考。

「横切りしぐさ」は無礼者

大名行列の前を横切るとはもちろん、相手が普通の人であっても、人前をなんの気遣いもなく横切る「横切りしぐさ」は、大変無礼な行為とされていました。

ただし、出産に立ち会うために道を急ぐお産婆さんだけは、大名行列の前を横切ることが許されていたそうです。

嫁取り、婿選びのしぐさ

嫁は江戸では愛嬌、田舎では年齢。

婿は江戸では利発さ、田舎では病身でないこと。

「寒いって」、一回でも口に出した女は嫁にもらうな。

凜として入れる「半畳のしぐさ」(半畳入れるべからず)

注意するのは年長者の義務。

半畳とは、一畳たたみの半分の物。江戸時代、芝居を見る時は、座布団の代わりに、半畳の大きさのゴザなどを敷いていました。

「半畳を入れる」とは、役者の演技が下手だったりして、芝居に不満があるときに、観客がそのゴザを舞台に投げつけて、批判や非難を表すことです。ここから人をちゃかしたり、話しをまぜかえすという意味にもつかわれます。

江戸では、年上の人から教をこうときに、半畳を入れることは厳禁でした。

年を重ねた人からの教は、自分の人生や生き方そのものを変え、豊かにしてくれるものでしたから、決して反論したり、批判したりすることは許されなかったのです。年を重ねて世間で「お年寄り」と呼ばれる人だけが、半畳を入れることができました。

「六感しぐさ」が身を救う

視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚以外による、直観的に何かを感じ取る心働き。六感が働かないと江戸では生きられないと言われた。

・言葉の調子が心を放射する。

見えないものが見える。どうしてだろうか。語調によってである。

話す時、仕方なく、外交辞令で言うのであれば、言葉の調子や表情、態度などで必ずその真意が伝わるものです。黙っていても、笑顔や物腰の柔らかさが心の豊かさを放射する。うそは必ず判るこわいものです。

わがまましぐさ

自分勝手に協調性がない

# 心得

---

## 挨拶言葉

江戸しぐさの基本は挨拶に始まります。年の初めに、ご不幸の方ご自身、または関係の方に対しましては「寒になりました」と言葉进行かわし、普通のかた同士は「お初でございます」と挨拶进行かわすなど、それぞれ最初の挨拶言葉だけを使い分けてくだされば結構です。物の言いようだけはかたにはまっています。

年の初めの挨拶以降は「お目にかかれて嬉しい」「お変わりありませんか」「御達者で何よりです」。

常にお会いする方には、朝なら「おはようございます」昼なら「こんにちは」夜なら「こんばんは」の言葉をそえましょう。

## あい澄みません（済みません）

お役に立てなくて申し訳ございません。

お客様が、わざわざ足を運んでいらっしやっただのにお探しの品物がなく、大変申し訳有りませんと言う済まない気持ち。

お客様に対してより丁寧にする言葉。

## すみません（澄みません）

「すみません（済みません）」という言葉は、本来は「澄みません」と書いたそうです。「会う人はみな仏様の化身」と考えたのが江戸人。

目の前の人、つまり仏様に対して澄んだ気持ちになれないような事をしてしまったという思いを伝える言葉でした。心が澄まないことをお詫びしようと、心から「すみません」と言えた時は、相手にもしっかりと伝わるものです。個人的にする言葉。

## 会う人はみな仏様の化身

江戸人の付き合いは、「会う人は、みな仏様の化身」の考え方が基本でした。町ですれ違う沢山の人は、今の世ではお互いに知らぬ身ですが、ご先祖様をたどっていけば、じつはつながっていたかも知れないと考えるなど、いつも仏様のご縁の元で生かされていると感じていたのです。江戸でご縁と言えば、第一がこの仏様を通じてのご縁、次が植物（自然）を通じてのご縁とされたそうです。また、「人間」は「じんかん」と読んでいたともいわれ、人と人との間合いを上手にはかって付き合う事が、特に商人にとっては欠かせませんでした。

## 当たり前

いちいち疑問をはさむ余地がないほど当然のこと

常識的な行為、誰がみても気持ちのいい行為、賛成できる、真似る行為

常識の基準が、現在は普通と言う人が多い。善悪の基準が、みんながやっているからと言う意味に変化しつつある大変なことです。

## あてこすり

ほかの話しにことよせて、遠回しに、相手の気分を害するとげとげしい言い方やチクリチクリと嫌味をいうこと、マイナス志向。江戸人の考え方の特長はプラス志向。物事はなんでも「陽」にとらえ、わざわざ人の揚げ足をとるような野暮なことはしませんでした。

## ありがとう（ありがとうございます）

「有り難し」が変化した言葉です。「有り難く存じます」はめったにあることでは無いので感謝する

という意味です。

些細なことでも、「ありがとう」と言える人は素晴らしい。

「ありがとうございます」という言葉は、人間関係を円滑にする基本中の基本といえるでしょう。

「ありがとう」には「おたがいさま」

手助けをして、「有難うございます」と言われた時に「お互いさまです」とかえした。嵐と煮え湯の中はじっと我慢するが良い

身に覚えのないことで、バッシングされたり煮え湯を飲まされたりすることがあっても時期が来るまでじっと辛抱した方が良い、必ず理解者が現れます。

あらたま

「新玉」「粗玉」「荒玉」「璞」とも書かれ、「年」「月」「日」「夜」「春」の枕詞としても使われた。

「掘り出したままで磨いていない玉」とあるように、いろいろな意味を持つ言葉であることがわかります。

一年の初めに「新たまる」ことの大切さを伝えたい言葉です。

正月の「正」は「一」を「止」めると、書きます。「一」度「止」まって考えてみると「正」しい在りようが見えてくるという事から新年を迎えると同時に一度立ち止まってみてはいかがでしょうか。

立ち止まって初めて見える事もあります。

あらたま寿ぎ（ことほぎ）

あらたまの寿ぎには、長老に盃をすすめ、健康を祝福します。

あらたま茶

江戸のころ、お茶は高価なものでした。そのために、法事のように大事な行事以外には、お茶を人にプレゼントしない不文律があったそうです。現在でも、不祝儀の時にお茶をお返しするのはその名残のようです。

いい笑顔

笑顔には相手の心に橋を架ける機能がある。

商家を繁盛させるので縁談の条件にもなります。

どんな人にもいい笑顔で接すること、これも大切な江戸しぐさです。「なあんだ、そんなこと」と思うかもしれませんが、笑顔こそ、心に響くコミュニケーションを生み出すもっとも大きな力となるのです。声をかけられたり、かけたときに、ニコッと笑って接してみてください。たとえ知らない人と出会っても、笑顔を交わすことで場がなごみ、気持ちよく過ごせるものです。鏡の前で笑顔の練習をしてみて、笑顔になれば相手がどんな気持ちになるかを感じたり、研究しておくのもよいことです。

いきは得、野暮は損

気の利いた言葉の使い方、今流に言えば「品格」のある言葉のやりとりが商売繁盛です。素早く察して即行動するのが「いき」というものです。反対に指図されなければ動かないのは野暮天です。

いきいき（生き生き）

生気の満ちているさま。江戸町衆の日常のあいさつ言葉にもよく使われていたようです。町中で知人とバッタリ会ったようなときに、「いきいきしておいででなによりでございます」というような調子で使われていたようです。

粋なはからい（意気、生き）

場所が終わると負けた力士を招いて宴会を開き落ち込んでいる力士が、次の場所で頑張るぞと言う気

持ちになるように士気をあげた。

老若男女すべてが身に付けた平和にいきるためのはからい。

生き生きと働き、生き生きと人助けをし、生き生きと人のためにすっ飛んで行けた。

意地っ張り（お一人さま）

自分の考え、生きざまを変えようとしなない、人の世話にならない。でも、命が亡くなったとき、人の世話にならなければならない。

他人との繋がり、実は切っても切れるものではございません。だからこそ、その繋がりを一つの縁と考えて、細くても薄くても、悪い縁にだけはしたくないと思いながら日々生活して欲しいです。

「忙しい」「忘れる」は禁句

「忙しい」の字を分解すると、心を亡ぼすとなることから江戸人は口にしなかった。心を失った人はデクの棒と呼ばれた。

同じ理由で、商人が大切な用件を忘れるようなことがあっては商売人として失格なのです。

言ってはならぬ言葉

なぐる、ける、殺すなど精神的にドスを持つ言葉や「ウソ、ホント？」と問うように、他人を疑う言葉は、口に出してはいけない言葉でした。また、「ごぞんじですか？」は相手が自分よりも常に博識と考え、その人に向かって聞くのは、とんだ非常識という理由で禁句でした。

上からの信望、下からの人望

商人の手代（中間管理職）の心得。

上の立場の者は、常に下の者から注目を浴びています。そして、真似ようともしています。責任ある行動をとりましょう。

上司から見ると、多少難しい問題が生じてても十分にこなせるだろうと安心してまかせられる。これが信望である。一方、部下から見ると、この人の言うことなら、あるいは、やることなら付いていくと思われている。つまり、人望がある。

世の中、結局は人柄が仕事の成果を決める。

「うかつあやまり」で気分よく

「うっかり、ぼんやり、不注意」という意味。

うっかり路上で人にぶつけられたり、足を踏まれた時に相手があやまって来たときに「こちらこそうっかりしていました」とあやまります。

ぶつかった方もぶつけられた方も、互いへの思いやりが通じれば、喧嘩にもなりません。

腕組み・足組

江戸しぐさでは、人前でしないものとされています。人と会っているとき、特に相手が目上の人の場合には、礼を欠くしぐさであると同時に、江戸では、腕組み・足組みは運びを悪くする（運を傾ける）と言われています。

人と会う時は、きちんとひざの上に手を置いて話すのがよいでしょう。

笑顔が一番

笑顔は心の架け橋。

満面から出てくる笑顔は心をホッとさせてくれる。

けがれの無い赤ちゃんの笑顔は千両万両に匹敵する。

会釈の眼差し

すれ違う際に、さりげなく交わすあいさつ。



道を譲ってくれた人と通り過ぎるときとか、よそ見していてちょっとぶつかりそうになった時などに、心の中で「ありがとうございます」「ごめんなさい」の気持ちで軽い会釈を。

#### おあいにく目つき

心からの「申し訳ございません」の目つき。

お客さんの求める商品を扱っていなかったり、在庫を切らしてしまっていたなどという時に、よくします。店の落ち度でないようなときでも、「あいにくとご用意しておらず、申し訳ありません」という気持ちを目つきであらわします。

#### おかげさまで

感謝の言葉。

おかげさまとは、あらゆる物事が形になるためには、目に見えない陰の働き、すなわち神仏の加護があったことに対する感謝の言葉。もちろん、いろいろ仕事の成功や旅行の無事を祈ってくれている人たちへの感謝の言葉でもある。

「皆様お元気ですか」に対し、「おかげさまで、皆、元気に暮らしております」と答える。あるいは、相手に何かをしてもらった時も「おかげさまで・・・」と対応すると、うまくいきます。

私達人間は人智を超えた何かの力、たくさんの祈りによっていかされている。「おかげさまで」の心を大切にしたい。

#### 贈りものあれこれ

江戸では1月1日に一つ歳を取ると考えられていたので、元旦は全ての人の誕生日の考え方があって、お正月を盛大に祝ったそうです。武士では組合のようなものがあり、その組頭への年末の贈りものが習慣として根付いて歳暮となり、世の中に広まったといわれています。

#### お互いさま

助けたり、助けられたりする。

何かをしてあげてお礼を言われた時に「お互いさま」と言ってみる。不思議と誰もがつながっているような気持よさがあります。

人間は一人では生きていけないもの、生かされている。

「お互いさま!」自分だけでもなく他人だけでもないのです。

#### お茶は濃い目でよろしいですか

初めてのお客さんにはお茶の好みを聞いた。二度目からは何も聞かずにおだししました。

#### 大人らしい挨拶をする

世辞が言える（心にもないことを言う事とは違う）、外交辞令がいえる。大人が出会った時「こんにちは」「お初にお会いします」とか言ってから、何か一言喋ることを世辞と言います。

「おはようございます」には「おはようございます」

自分の心がまえ、言葉遣い次第で相手もそのように応じる。

「おはよう」と言えば「おはよう」と返されます。。

山のこだまと同じで、自分の心構え、言葉づかい次第で相手もそのように応じるから注意が必要という戒めなのです。

江戸しぐさでは、たとえこちらが目上でも、相手から「おはようございます」と言われたら「おはようございます」と互角で返すのが当たり前でした。

あいさつは人間関係を円滑にするためにとても大切なもので、江戸しぐさの基本中の基本であります。

## 親孝行

自分をこの世に産んでくれた両親に感謝、恩返しをする。

この言葉と行為が日本に根付くきっかけになったのは、八代将軍吉宗が江戸市中の寺子屋の師匠宛に配らせた「六諭衍義大意」（りくゆえんぎたいい）である。

その内容は「父母に孝養を尽くせ」「年長者を尊敬せよ」「地域の人々と親しく交われ」「子孫に人間として大切なことを教え、論せ」「各々が自分の職分を尽くせ」「不正なことをするな」です。

親孝行が、この教えの最初に登場していることに注目です。この世に産んでくれた両親にまず感謝することから始め、人生を全うせよという事です。

「親孝行したいときには親はなし」というのでは、あまりに悔いが残る。

親が死んでも食休み（じきやすみ）

食事のあと、消化の妨げになることはしない。

日頃、親孝行の大切さを説いているのに失礼な言い方ですが、その真意は、食べ物をお口に含んだ後、一定の時間、無理な運動をしてはいけないということにある。

人間の身体は、食後の休憩時間を十分取らないと、消化不良を起こし、病気のもとになる。そこで、この重要性を認識させるために、誰よりも大切な親が死んだときでも、食後休憩を取れとしました。

。

## お迎え言葉・見送り言葉

お客様をお迎えしたり、お見送りするときの心づかいや言動。

玄関先はきれいに掃除が行き届いて、水が打ってある。玄関の戸が開いたら「いらっしゃいませ」の声でお出迎えする。お客様はこのひと声で気分良く、お店あるいはその家の人々と一体化できるのです。

お帰りの際は、お客様が、戸に手をかけた瞬間、「ありがとうございました。またどうぞお越しください」と声をかけます。

## お役ごめん

役目・仕事から解放されること。自分から言う場合は、「後進に道を譲る」として使う事が多いです。へりくだりの意味。しかし本来は「やめさせられること」や「不要になる」「お払い箱」といった意味を持つ「お役御免」。手斧言葉でもあり、できれば使いたくない言葉の一つでもあります。江戸しぐさを語る上で「引き際」は非常に大きな意味をもちます。

- 「会社や家庭でお役御免をした後に、何か自分に残っているものはあるのでしょうか」その様な考えが頭をよぎった時こそ、どうぞ江戸しぐさを実践してみてください。

職場に行かなくても、一人暮らしでも、町内で、電車の中で、散歩中に、買い物中に・・・「意気」をアピールし、皆に伝えるチャンスはあらゆる場所に溢れています。そう考えると人生の「お役御免」は皆に平等、一度きりしかありません。

「か」は付けない

年上の人に対する手紙の作法。

江戸しぐさでは、年上の人に限って「か？」をつける表現、「いかがおすごしですか」、「お元気ですか」のような「返事を要求する書き方」は禁じられていました。

「つつがなくお過ごしのことと存じます」「お元気と拝察いたします」こんな具合に書くのが作法です。

## 肩書きを気にしない人

昔から日本は、血縁や地縁を何よりも大切にしましたが、江戸の人々の間には、誰とでも対等につきあうという気風がありました。そのため、江戸人は家柄や、職業といった肩書きは気にしなかったといえます。誰もが平等という意識をもって、江戸の人たちは暮らしていたそうです。

### 借りは作るな・貸し作れ

負い目があると、いざという時に勝負出来ないという戒め。

借りが出来ると相手に対して言いたいことでも言えない。言いたいのであれば貸しを作れ。貸し借りをすることでお互いがぎくしゃくすることを防ぎなさい。

そこで、「借りは作るな・貸はつくれ」が志を大きく持った商人の心構えとされました。

### 感謝の目つき

感謝の気持ちを目で表す。

誰かに世話になった時に、感謝の言葉以上に効果があるのが感謝の目つき。

特に目下の者や使用人に何かをしてもらった時などに、「ありがとう」と言葉にださなくても、感謝の気持ちを目で表すといい。

どんな偉い人でも何かをしてもらったときに、横柄（おうへい）な態度のまま、感謝の目つきが出来ない人は最低とされた。

初めての町に行ったときは「皆様の道を通らせて頂く」といった気持ちで、すれ違う人に、「感謝の目つき」をする。これが力のある商人ほど心していたことでした。

この心構えがあれば気持ちの良い人間関係を築けます。

### 感性

センスのこと「江戸しぐさは」江戸人の感性の象徴だった。

江戸しぐさは、自然と身体が動いてしまう「癖」のようなものだった。

身体を動かすものは、江戸人に染みついた共生のための「感性」だった。知性は一代限りだが、感性は遺伝子を通じて循環する。

ゴミが落ちていたら自然と拾ってしまう。拾わないと気持ちが悪いと言った感性が育つよう、小さい頃から教えられた。目の前で小さな子供が転んだら思わず助けておこそうとする、水に落ちたら救い出そうとする原動力こそ惻隠（そくいん）の情と呼ばれる感性である。

「惻隠の情」とは、他人の事を痛ましく思って同情する心は、やがては人の最高の徳である仁に通じるとのこと。

### 決め手

何か事を成し遂げようとする場合、どのような心がけが大切か。気配り、目配り、手配りの「三つの決め手」が出来るとかが大事とされました。

「気配り」。事前に、スタートからゴールまでのプロセスを想定する。棒手振りの魚屋だったら、お得意先にとって、その日がどんな日か、お祝いごとがあるかどうか、特別な事があるなら作戦を練る。その日の相場を考慮に入れ、お得意先の好みや人数に応じて仕入れ、調理方法までアドバイスして売り切ることが必要になるからです。細かく心を使う。配慮する。

「目配り」。実際に、市場に行ったら、鮮度や値段をチェック、あらかじめ想定した魚を扱えばいいのか、それとも別の魚に切り替えたほうがいいのか、判断がいる。現場で事前に立てた計画の微調整をします。注意をゆきとどかせる。

「手配り」。実際に仕入れた後、どのように想定したお得意先に売り込むか。声のかけ方、説明の仕方・・・いろいろ具体的な対応がいります。必要な連絡や段取りをする。

### 口約束（死んだらごめん）

江戸商人の真骨頂。証文がなくても、いったん約束した以上は、必ず守る。

「指切りげんまん、ウソついたら針千本飲ます。指切った。死んだらごめん」子供達の遊びに残っている唯一の江戸しぐさのフレーズである。

約束を守らないことがいかに人の道に外れているのかを、遊びの中で具体的に悟らせる江戸人の知恵でした。

「死んだら後免」という意味は「約束を守れないのは死んだときだけ」という江戸人の決意表明を示す言葉です。

#### 見当をつける

物事を手掛ける際に、あらかじめ出来上がり状況がある程度、想定すること。

「見当違い」はこの逆で、まったく方向性が違う、着地点がずれていることになり、損害につながりました。商人にとって、見当をつける能力は大変重要でした。

稚児は予測がつかないから慌てるが、大人は予測が出来るから慌てないという教訓です。版画（錦絵・浮世絵）の版板に印をつけることから、この言葉が生まれたとかききます。

#### 互角の付き合い

人はみな仏の化身と考え、対等の付き合いをする。

人間は一人では生きていけない。お互いに助け合うしかない。だから日頃の暮らしで、みな仏の化身と考えて、大切に接した。商売でも、商人はお客様と対等の付き合いを基本としていました。

この考え方は武士に対しても変わっていない。武士の中には商人から多額の借金をしながら、幕府による徳政令で、たびたび踏み倒している。かといって、表だって抗議をすれば仕返しが待っていた。

ではどうするか。真正面からの衝突は避け、外柔内剛の姿勢を貫くしかなかった。しかし、耐える中で独自の哲学が生まれた。

それが「江戸しぐさ」であります。

#### 子供に対する親の言葉

子供相手の場合は、子供の年齢によって言葉を使い分けました。五歳までの子供に対して、親は「～はどうかい」と言いました。六歳から九歳なら「～はどうぞだい」十歳以上の子供には「～はどうぞだ」となります。親が子どもの成長を認識するとともに、子供も親の接し方が変わっていくことで、少しずつ大人へ近づいていることを自覚できるというわけです。しかし、こうしたあつかいも十四歳まで。江戸時代、十五歳と言えども立派な大人とみなされたからです。

#### 木の葉沈んで小石浮く（石は流れて木の葉が沈む）

沈むべきはずの石が流れ、浮いて流れるはずの木の葉が沈んでしまうという意味で、物事のありようが道理とは逆になっていることをいう喩え。

「道理」とは、物事の正しいすじみち。また、人として行うべき正しい道、筋が通っていること。正論であること。また、その「さま」を言います。

#### この世に要らぬ人間はいません

人はみな仏の化身なので、誰も粗末に扱ってはいけない。

人間はこの世に生まただけで価値がある。みな、それぞれ個性や才能が違う。算数が得意な子もいれば、かけっこが得意な子もいる。それぞれの良さを伸ばし、上手に組み合わせることによって、より社会に役立つことが可能になります。

#### ごろ

人との約束は曖昧（あいまい）にしない。

今も、昔も時間を守れない人は信頼されない。時間を守る人には「～刻」と正確に、ルーズな人には「～刻ごろ」と曖昧につたえるなど、相手を見て使い分けた。

江戸時代は、遅刻連絡は難しかったから、約束の日は念入りに身支度を整えながらも、早目早目に行動、時間をまもっていました。

#### こんなはずではなかった

商人にとって「予測ができなかった」という言い訳は許されない。

江戸は「まさかの町」何が起きるか分からないから、住人達は危機管理が出来なければならないとされていた。「うかつ」な行為をしないよう、子供の頃から教えられたのです。

特に商人は、一目先を見ることが大切だった。番頭は「こんなはずではなかった」「まさかこんなことが起こるとは」という言葉は言ってはならないとされた。

常に少し先を予測して、それを避けたり、それに備えたりすることを癖とし、瞬時に対応するのが江戸しぐさです。

#### ざるべからず

しなければいけないことを強調するときに使った言葉。

「べからず」という場合は、してほしくないといった戒めの意味があります。

「ざるべからず」「べからざる」と言った場合は、二重否定の形で「しなければいけない」という強い意味です。

通常の仕入れではなく、緊急の仕入れに関して「仕入は早きに手打たざるべからず」といった使い方をした。また、病気、火事など、対応に一刻を争う場合は、「早く手を打つべし」というように、「べし」という命令形を使って指示を与えました。

#### 死んだらごめん

約束は必ず守るという、江戸人の決意表明

約束をしたときに交わす「指切りげんまん嘘ついたら針千本飲ます、指切った」と続きますが、江戸ではこのあとに「死んだらごめん」と言いました。約束を破るのは針を千本飲んでも詫びなければならないひどいことでした。でも、死んでしまったら、約束を果たせないのでも謝っておきますとの意味を込めました。死なない限り約束は守ると相手に誓いを立てる、大事な言葉です。

#### 世辞が言えて一人前

会話につながる一言が言えるようになって一人前。

「こんにちは」「こんばんは」挨拶の語尾が「は」で終わるのは、その後一言、相手の様子を気遣ったり、天気の話をしたり、次の会話につながる言葉、つまり世辞をつけた名残です。

通りすがりで、ただ挨拶を交わすだけでは会話につながらない。「寒くなりました」「暑くなりました」何げない言葉を差し挟むことで、お互いに立ち止まり、会話がはじまる。こんな、きっかけづくりの言葉を世辞といった。「お」がついて「お世辞」となると、心にもない話しになってしまうが、本来はちがいます。「いらっしゃいませ、本日はお日和もよくて何よりでございますね」「このところ冷え込んでまいりました。風邪をお召しにならないよう気をおつけなさいまし」。

商人は、お客様に機嫌よく買い物をして頂けるのが一番である。お客様も機嫌よく買い物ができること、またのご来店につながる。

#### 生涯つきあい

生涯学習ではなく、生涯付き合いができる人を見つけることです。

#### 処世訓

自分の目指す生き方、理想とするスタイルを持つことです。

人生の暖簾をおろす

やる気が亡くなった時。

生活にも仕事にも節度があること

手抜きをしないこと。

災害は、時なし・場所なし・予告なし

天災は何時、何処であるか分からない。いざという時の準備はしておく。

知行合一（ちこうごういつ）

知識があっても行動がともなわなくては意味がない。人間は心を養い、いつでも必要な行動が出来るようにありたい。

江戸の人達は、お腹を押さえて苦しんでいる人に向かって「お腹が痛そうですね」とは言わないし、重いものを運んでびっしょり汗をかいている人に「重そうですね」とも言わない。

状況を察して「医者を呼ぶ」「手伝う」「冷たいおしぼりを差し出す」要は相手の立場を察した一歩先の行動がともなってこそ、江戸しぐさです。

友にはなりやすし されど 仲間にはなりがたし

友達イコール仲間と思っている現代っ子には、この意味は理解しづらいでしょうが、江戸では、はっきり使い分けていたそうです。

一人一人がみんな仲間になるように心がけるべしと躰られたそうです。

仲間とは人と人との間に立って仲立ちをする人を指したようです。

友達とは人生の贅沢品であり、仲間は必需品であります。

はじめまして 「初めておめにかかります」

江戸では初対面の人に、「はじめまして」という挨拶はしなかったようです。

目の前にいる人とは初めてでも、先祖は付き合いがあったかもしれません。だからそんな挨拶をしては、ご先祖様に失礼と考えました。そこで「先祖がお世話になりました」といったそうです。

ほほえみがえし

狭い道などでよけてすれ違う時に、「ありがとうございます」と笑顔であいさつ。

現代では違和感もあるでしょうけど、「お初におめにかかります」「初めておめにかかります」と笑顔で挨拶しては如何でしょうか。出会いにも必ず何かの縁があります。

年季奉公

一人前の職人になるために一定の修業期間を務め上げる

江戸時代には年季奉公が義務付けられていました。期間は、当初、10年でしたが、業者仲間で期間を定めることになり5～7年程度になりました。

修業中は親方から食事や衣料品は支給されるが、給料は出ない。しかも一人前になったと認定されると、一年間の御礼奉公が慣習としてあり、これを終了すると晴れて鑑札を得て、同業者と認められました。

もちろん、この修業に耐え切れず脱落すると、仲間内に回状が回り、出入りは許されませんでした。

年齢を尋ねない

江戸の人々は「三脱の教え」に従い、年齢を尋ねない。相手の目つきや表情、話し方、身のこなし方を見て、どのような人かを判断したのです。つまり自身の人間洞察力を信じました。

身分の上下にこだわることなく、互角の付き合いが出来る人かどうか、自分の感性と経験で察しました。

「はい」は一度きり

「はい」は一回「物事を頼まれた時の返事」。

「はい、はい」は傲慢さや知ったかぶりを下劣な態度とみなす。

「はい」の返事の仕方で美人へ変貌する。

「はい」という返事は、相手を認める拝の心、相手に対する配慮の心、必ずやりますという背負う心

。

若い人の素直さや、やさしさが返事一つでわかります。

雪の雫と安穩は安々と手に入らない（安穩と雪の雫はタダでは得られない）

江戸人の火事や地震、流行病にさらされて、現代以上にいつ死ぬか分からない時代だからこそ、日々

お互い気持ち良く生きようと心がける彼らの生き。雪の雫は水、安穩（あんのん）は平穩無事のこと

。

初耳

自分が知らなかったことなどは、初耳ですとあいづちをうちます。

伏魔殿のさとり

何が起こるかわからない、魔物がすむ館のようなところ。わざわいのおおもと。

馬子にも衣装

どんな人間でも身なりを整えれば立派に見えることのたとえ。

人に会う時、きちんと身づくろいをする必要があります。

「目立ちたがり屋」はみっともない

みんなで力を合わせて得た成果を、自分一人の手柄として触れ回るなという戒めのこと。話は相手のある行為である。自分だけが勝手にしゃべっていたら、それにつきあわせる人は大変迷惑する。思いつきり喋った人はそれで満足するが、相手は満たされない。聞き手の不愉快な態度がみえる。相手の顔色の変化に気づかない人は最初から沈黙を心得なくてはならない。

ものごとを陽にとらえましょう

プラス思考で考えましょう。

物を見る目をやしないなさい

大人が騙されたとなると、お前の目は、くさっていたのかといわれました。

物を見る目は重要だということ。

早寝早起き

子育てのコツ。

日の出とともに起き、一日の活動を始める。精一杯働いた後は、明日備、そして日没とともに寝る、これが江戸の人々の平均的な暮らしのリズムでした。

おかげで生きる力につながる「視る」「聴く」「嗅ぐ」「味わう」「触る」といった五感が磨かれ、いざというときに第六感が働く人間ができあがりしました。

子供達の枕元に「おめざ」を置いたのも規則正しく早起きする習慣をつけるためでした。早寝早起きは人間らしい暮らしを楽しむ第一歩。

今でも実践すべきだし、子供の為になる《早寝早起き朝ごはん》。

人あれど、人ある中に、人はなし

たくさん人はいるが頼りになる人はなかなかいない。

人柄だけに惚れるな

商売は人柄だけで転がるものではない。

人柄に惚れることは人間として大事なことだ。しかし、一流の商人を目指すなら、それだけではいけない。商品そのものの品質、競争力、あるいは取引条件などに対するシビアさを失う事になりかねない。そこで、「人柄だけに惚れるな」と釘を刺しました。それでいて「悪い人格でも、良い商品を持ってくる商人もいる」とも言っています。江戸商人のしたたかさと、人間洞察力の深さ、鋭さを感じさせる警句であります。

#### 人の意見は素直に聞く

相手の発言や助言をきちんと受け止める

相手が感想や意見をしゃべっているときは、まず素直に聴く。途中で水を差したり、話しの腰を折ったり、茶々を入れないことが話す人への礼儀です。

人間一人が自分だけの力で、あらゆることに精通しているなどということはありません。長い人生を過ごしてきた人には、それだけの経験と思いがあります。若い人でも、自分と職場環境が違ったり、ライフスタイルが違えば、やはり興味深い話題を持っているに違いありません。

「周りにいる人は、すべて自分の先生だ」こう考えて謙虚になると、思いもよらなかった話が耳に入ってきます。

#### 人の気持ちも十当たり

人はそれぞれ違う個性の持ち主。感じ方も考え方も違う。

「人の気持ちも十当たり」は、日常生活でも同様にさまざまな個性や意見があって当たり前という意味。人を評価する場合は、たとえ自分の主義主張と異なっても、幅広い視点から判断する心のゆとりが欲しいものです。

#### 人の振り見てわが振り直せ

他人の性行の善悪を見て、自分の性格、行動、気持ちを改めよ。

良い行いは誰の心にも響く。他人の「良い振り」は、自分も見習って素直に実践することだ。心を形にしていくことは、何よりも気持ちに張りを作ることです。

「人の振り見てわが振り直せ」この言葉には、うわべだけを見るのではなく、行いの出所を見なさい。その人の心まで推し量ってご覧なさいという意味が潜んでいる。そうして、納得できたら素直に真似ればよい。当然、反対のケースもある。あまりにも下品だったり、優しくなかったりする相手のしぐさを反面教師にして、自分の振る舞いを点検、改めることも大切であります。

#### 人のよい面だけを特筆する

悪い面は知っていても、人の良いところを前向きにとらえていきます。

#### 人みな仏の化身

目の前にいる人は仏の化身と思えば、優しく接することができる

高価な服を着ていようが、ボロをまとっていようが差別をしてはいけない。ひょっとして仏様が姿を変えて自分を試しているのかもしれない。そう思えば、誰にでも親切に接することが出来るはずだ。

#### 間は魔

ちょっとした時間的間隔のことを、「間（ま）」といいます。「間の取り方がうまい」などというふうに使いますが、要するに、間合い、呼吸、タイミングといった意味。

何事も間が必要、うまくいってこそ、世間・人間・時間の関係がいきます。

江戸の人々は、日常生活で「間」の大切さを口が酸っぱくなるほど、注意し、自分自身も心に留めていました。

時間、空間、いずれも「間」という字が入っている。社会生活を意識できる生物としての人間、世間



を意味する人間（じんかん）これもそうです。

江戸の人々は「一流を目指すなら、間は魔と心得よ」と自分にいいきかせました。扱い方を間違えれば、本来、良くなるはずのものも、悪くなってしまいます。

「間違い」は、間を取り違えたことを意味します。

実るほど頭の下がる稲穂かな（実るほど頭を垂れる稲穂かな）

地位が上がれば上がるほど謙虚さを忘れるな。

人間としての振る舞いを子供たちに教える時、動物や植物になぞられて、その本質を教えるのが上手でした。

稲は日本人にとって主食だからなじみが深い。田植えから次第に実って刈取りをするシーンまでが容易に想像できます。その稲、はじめのうちは天を目指してスクスク伸びていく。ところが稲穂が実ってくると、自然とその重みで下がってきます。

人間も、子供の頃は、多少の脱線があっても、伸び盛りはそのくらいの勢いがあっていいと許されます。ところが、ある程度、歳をとってくると、この稲を引き合いに、自分を控える心がけの大切さを教えられるようになります。

上野東照宮にある左甚五郎の上を向いている龍の彫り物と下を向いている龍の彫り物があります。どちらが昇り竜ですかという質問がありました。答えは下を向いている龍だそうです。家康は「実るほど頭を垂れる稲穂かな」と言ったそうです。

企業で役職につくようになるころまでに、この「実るほど頭の下がる稲穂かな」の意味の深さが実感できるようになっていたら、羨は大成功とっていいでしょう。

ゆかしい（江戸美人の条件）

品の良さ、なるべく目立たないように控えめで、奥深さがあって心がひきつけられる美しさ。

美しい女性の条件の第一は、生まれつきの見目形だけでなく、後天的に自分の努力で身に付けた「ゆかしい」雰囲気をもっていること。周囲から見たら、なんとなくかしくて、慕わしく、心がひかれる。江戸のおしゃれな女性は、しぐさを磨くのはもちろん、着物の裏地や襟、足袋やコハゼなどに凝ったりしました。

若いものにはさせず、老人が先頭にたて

動けて知識のあるお年寄り、先頭に立って若者をひっぱりなさい。行動で尊敬されなさい。そうすれば若者は相談にきますよ。

## 遊び・楽しみ

---

### 遊び心

常に楽しむ余裕を持っていた。浄瑠璃、川柳など、また、衣類の裏地に凝って見たり江戸人は、一見無駄に思えることにも想像力を働かせたり、たとえお金にならないことであっても、簡単にあきらめず、我慢強く実行する人達でした。一時珍しい朝顔を作ることがブームになりましたが、それも江戸人が遊び心にあふれていたから。暮らしをいきいきと楽しむ能力が高かったといえるでしょう。

### 遊び言葉（言葉遣い）

名前はあだ名で呼び合い、パールで美しく包む人情豊かな江戸町衆の心遣い。言葉遣いも同様に、弱冠（20歳代）なら「まだ、なにもわからぬ者ですが」と、また、而立（30歳代）なら「やっと判りかけた者ですが」式に話を切りだします。遊びを入れて答えているのにしつこく聞くのは野暮天といわれ笑い者になりました。

### 明日備（あすび）

「あすび」がなまって「あそび」、此処で言う遊びは知恵比べや言葉遊び、何々と賭けて何々と解く。俳句、川柳、狂歌づくりなど。あたまを柔軟にさせる遊びは大切でありました。

### 新しい文字

過去にあった文字では表現できないものを江戸町民たちはどんどん創りました。たとえば、山の上と下の境という意味の「峠」、紋服の上に肩衣、下に袴をつけた状態の武家の礼服という意味の「袴」（かみしも）など実によく考えたものとおもいます。

### あやめ（文目）の御節句

5月5日の端午の節句。 菖蒲の節句とは言わなかったそうです。尚武と区別したそうです。

### 有卦絵（うけえ）

幸運・有卦に入った人が飾ったり、また贈られたりした縁起絵。

### 梅見月

陰暦2月の異称。 梅を見て楽しむ。

### 大家と店子は親子も同然

住人達は、長屋の管理人である大家ときわめて近い関係にありました。日頃の店賃の支払い、婚姻届の処理、夫婦げんかの仲裁、旅行の際の届出など、大家が仕切っていたためです。江戸の町は南北二つの奉行所→三人の町年寄→町名主→大家という縦系列で行政が行われ、その大半が町方の自治という形で運用されていた。このため大家の影響力は思いのほか強かったそうです。大家は長屋の持ち主ではなく、雇われ者が多かった。しかし、裁量権を持っていたから、その人物の出来不出来で、長屋の暮らしは大きくかわりました。長屋に住む住人の糞尿の販売権は大家が持っていたので、暮れになると、大家が店子たちに餅を振る舞うのが恒例でした。

### 大山詣り

六月末から七月中旬の盆まで江戸っ子は、年中行事として大山（現在の神奈川県伊勢原市）に参拝しました。

江戸の人々からすると、同じ信仰の対象である富士山までは距離があるし、箱根の関所も通らなければならぬ。これに比べ大山は近い。早ければ一昼夜で戻ってこられる。途中で一泊、精進落としもできる。

そこで、隅田川は両国橋の東側のたもとで水垢離(みずごり)をとり、「大願成就」と記した木太刀を持参、社殿に奉納し、下山の時は代わりの木太刀を持って帰るといった風習が一般化しました。

#### 恵方詣り（えほうまいり）

恵方は吉方、つまり縁起の良い方角のこと

陰陽道の歳神、歳徳神が一年の冒頭に現れ、幸運を与えてくれる方角を言います。

正月の初詣は、もともとは自分たちが居住している土地の守護神である産土神（うぶすながみ）に行くのが普通でした。

恵方詣りは初詣の一環で、その年の縁起の良い方角にある寺や神社にお詣りしました。

#### おかげ参り

ほぼ六十年おきに起きた伊勢参りブーム。

伊勢神宮は古来、国の祖神とされてきたが、江戸時代に入ると一時に多勢の人が群れをなしておしかける現象が起きました。

信仰を理由にした旅である。お上の御咎めもない。伊勢講を組織、旅費を工面し合うケースも多かった。次いで物見湯遊山も組み込んで、江戸の人々は大いに旅を楽しんだそうです。

#### お彼岸

春分の日・秋分の日前後各3日を合わせた7日間のことです。百済や中国から伝わった仏教が日本独自の習俗と結びつく事で、墓参りなどを行う仏事へと変化したといわれています。

その仏事になくしてはならない「ぼたもち」と「おはぎ」同じ和菓子を、牡丹が咲く春には「牡丹もち」でぼたもち、秋には秋の七草「御萩」でおはぎとよびます。また、

仏事とは関係なく一年中食される「ぼたもち/おはぎ」ですが、夏には「夜舟」、冬には「北窓」という呼び方をします。見た目ポテツとした菓子に、このような風雅な名前をつける日本人の想像力とその機知こそ、決してなくてはならない特性の一つだと思います。何故お供えにこの「ぼたもち/おはぎ」かと言いますと、一説には「あずきの赤色には、災難が身に降りかからない効果があると信じられ、古くから邪気を払う食べ物とされていた。これが江戸の頃より先祖の供養と結びつき、以来先祖捧げて功德を積むという風習が普及した」とあります。

お彼岸は仏事とは言え、そこには「祖先への祈り」という宗教を超えた「感謝」と「思いやり」の気持ちがあります。一年に二度もそういった行事を続けてきた日本人、我々ももっと日本の文化に誇りを持って良いのではないのでしょうか。

#### お天の気持ち（目くじら立てず）

お天は広い、広いは大きい、大きいは包む、包むは暖かい、暖かいはねむい、ねむいはボーとする、ボーとするはぼんやり、ぼんやりはお馬鹿さんというような意味で使われていたようです。

#### お年玉

お金ではなく、お餅をもらっていた。

お金を頂くのは卑しいと考えられていた。

上役から下役に贈るのが本当だそうです。

#### 落とし噺（江戸噺・江戸落語）

伝統話芸の雄

・江戸時代（1781年頃から）の江戸に成立し、現在まで傳承されている伝統的な話芸の一種。一人で

何役も演じ、語りの他は身振り、手振りのみで物語を進め、扇子やてぬぐいを使ってあらゆるものを表現する独特の演芸であり高度な技芸を要する伝統芸能です。

落語は庶民の文化です。その中にも江戸しぐさが多くでできます。

・三題噺は、三笑亭可楽が創始です。この噺の言葉は江戸噺用の江戸っ子の考えた新しい文字です。

落語という呼び名になったのは明治に入ってからのことです。

#### お酉さま

浅草・鷲神社の祭礼としてしられる。

縁起物の熊手は「幸福」を搔き込めるというわけで競って買われました。

#### お福分け

自分が手に入れたものを皆に分けて一緒に楽しむこと。

自分で買ってきたものや、実際に頂いたものなどを、「頂き物をしたので召し上がってください」といって、ご近所の人とか、親しい人に分けました。

そんな時に、「お福分けです」と、一言添えられると、さらに嬉しくなるそうです。

#### お福まき歩き

お福歩きでのお土産を、行けなかった人に配って福が来るように祈りました。

#### 回文

上から呼んでも下から読んでも同じ文。

江戸時代では初夢は、事始めの2日～3日にかけてみる夢を言われていたそうです。

七福神が乗り込んだ船の絵を枕の下に置き、いい夢を見て新年の行く末を占ったことは間違いないそうです。

この七福神の絵に必ず書かれていた文章がある。「長き夜のとおの眠りの皆目覚め波乗り船の音のよきかな」五・七・五・七・七の和歌の体裁(ていさい)になっている。眠りは「ねふり」と詠みました。

ひらがなで書き起こしてみるとお分かりのように、江戸の人々が好んだ言葉遊びのひとつ、回文であります。

#### 風が口笛を吹く五月

端午の節句。こいのぼり。鯉は子供の立身出世を夢見る親たちの願いです。

#### 懸想文(けそうぶみ)

恋文、江戸時代、正月に、京都などで懸想文売りが売り歩いたお札の文のこと。

#### 講談

軍記物を名調子で語ったのがはじまり。

講釈師、見てきたようなウソをつき。講談について語る時、必ずこんなコメントがつく。語り口がさわやかで、ついつい引き込まれてしまう聴衆の気分とでも史実とは違う微妙な境界線を評したものです。

講談の始まりは、関ヶ原の合戦や大阪城落城の模様を語ったのがきっかけとされる。釈台を据え、張り扇でパンパンと間合いをつかみ、名調子で話を進めていく。

#### 午睡

昼寝の事。

江戸しぐさでは心であれ、身体であれ、自己管理をする事を重要視しています。

昼休みには身体を休める為に昼寝をしていました。特に夏場はミンミン蝉が鳴き出すと、一刻が冬場

より長いこともあり、冬よりも30分くらい長い午睡を取って、身体がばてないようにしていました。

江戸中期になると、食事の面から健康管理をするというテーマで「江戸食事仕様書」という本が出されました。当時の江戸では健康に関する意識が高かったそうです。

#### 好きこそものの上手なれ

どんなことがあっても好きなことは一生懸命になるので上手くなりました。

#### 銭湯つきあい

早朝の銭湯で情報交換。普段聞けない話が飛び交う、社交の場でもありました。

お風呂は裸のつきあいが出来る場所。「銭湯つきあい」は、持ち物も先入観も全く持たない裸の状態です。相手と対等に向き合うという意味で、「つかの間つきあい」よりも一歩、相手に踏み込んだ付き合いということになります。

知らない人ともなごやかにあいさつし、風呂に入るマナーをご隠居さんが子供におしえたようです。親しみを深めるとともに、いまでいう公共マナーも銭湯で身につけたのです。

武士がお風呂に入る時には、当然、刀を置きましたから、銭湯は身分の上下もない場所でした。

#### 川柳

柄井川柳が考案したのでそれ以後「川柳」と名付けられました。

時流をよみ、優秀作品に賞金が出たので大流行しました。

俳諧のように季語がいらぬし、厳しいルールもない。それでいて、自分の考えを打ち出せるし、ご褒美も出るとあっては、川柳は江戸町民にとってたまらなく楽しい遊びでした。

#### 通

遊びの道の達人。

吉原など、通常とはかけ離れた世界で遊び方の上手な人を「通」と称した。物事に執着せず、臨機応変の振る舞いが出来、嫌味がなく、下品でなく、高慢でもない。

とりわけ、金遣いがさっぱりしているといった条件を備えている人を指します。

逆に中途半端な振る舞いしか出来ない人は「反可通」といわれました。

しかし、過ぎたるは及ばざるがごとし「大通」といって大がつくと、通常とかけはなれているといわれました。札差を中心に呆れた行状を繰り返した人々を指しました。

#### 富くじ

寺社が興行主になって行った江戸の宝くじ。

いつの時代も一攫千金を願うのは人情です。江戸時代の富くじはその典型であります。

当初は年に数回の興行でしたが、やがて毎月に、また発行枚数も千枚単位だったのが万単位になりました。当たりくじの賞金も100両から次第にふくらみ1000両に上ったこともあります。売値は四分の一両、つまり一分です。

#### 菜種御供（なたねごく）「採種御供（さいしゅごく）季節を楽しむ」

菅原道真公の命日に、道真公の御心をお慰めする神事。この神事は、江戸時代後期から始まり、神前に菜の花を供えるのは、菜の花の菜種が「宥め（なだめ）」に通じるからと考えられました。

#### 初午（ハツウマ）

稲作を司る稲荷神社の祭礼日、縁起をかつぎ寺子屋の入門日にも。

お稲荷さんは稲の守り神だから大切に扱いました。とりわけ、二月の初午の日は祭礼日で縁日がたちました。

この時期は、そろそろ稲作の準備に入るぞ、今年も豊作を祈ろうというタイミングでした。初午はき

わめて重要な祭礼日で、「事始めの行事」にあたりました。

寺子屋の入門日がこの翌日に集中したのは、こうした伝統的な稲作文化にもとづく慣行から来ているものだろうと思われまます。

### 噺（はなし）

ここに登場する「噺」は口新しいハナシです。昔の江戸っ子のおはなしは、まったく独創的でありましたので、中国からいただいた咄、話、譚などの文字では、十分表現できないと考えたのでしょう。確かに三題ばなしなどは、噺という字でなければ、ぴったりきません。なにしろ、お客さんに任意に三つの題を出してもらい、それを即座におもしろおかしく綴りあわせて、一席の落語にするのですから咄でも話でも譚でもなく、まさに噺です。たいした知恵です。口から即座に新しいことをハナスというので、口へんに新と書く新しい邦字を考えだしたのでしょう。（新しい文字）

### 話しっぷり

話し方を見ていると、その人物の人柄も教養もすべてわかります。江戸の人たちは身振り手振りを含めて、言葉をつかう面白さを大切にしました。駄洒落などを楽しんだり、身体にしみついた洒落の楽しみ方や、話しっぷりの面白さを見て、その人の教養や人柄を判断しました。

### ひな祭り

お墓の前で手を合わせ「ご先祖様、子も孫もこんなに元気で大きくなりましたからご安心ください。これから楽しいひな祭りをしますので、あの世で見守ってやってください」子も孫も、親や祖父母たちの言葉を肩越しに聞いて「もっと元気で大きくなるといけない」と小さな胸をふくませたり自覚をしたりしたものです。

この世に生きている人間は、みんな御仏様やご先祖様に見取られながら生きているのだから、おたがいに教え合い助け合って、顔を赤らめたりしたりしないですむように、楽しくいたわり合って暮らしていける江戸人の癖。江戸人のしぐさです。

### 目くじら立てず

一語一語に目くじらを立てず、こしをすえて、じっくり江戸の雰囲気浸ってください。現在でも、下町に古くからいる職人さんに、「いいお天気ですね」なんて言ったら「なんだと、もう一度言ってみろ」といわれます。江戸では「いいお日とでございますね」「日と、結構でござるな」などと言った事でしょう。

江戸の町衆言葉では、お天は（広い、暖かい、ねむい、ぼんやり、おばかさん）という意味でつかわれていたそうです。

### 物見遊山

気晴らしに見物や遊びに出かける。季節ごとに変化する自然の恵みを得ようと、海や川、そして野山へかけて行きます。春の花見、潮干狩りはその最たるものです。

### 遊び心

常に楽しむ余裕を持っていた。浄瑠璃、川柳など、また、衣類の裏地に凝って見たり江戸人は、一見無駄に思えることにも想像力を働かせたり、たとえお金にならないことであっても、簡単にあきらめず、我慢強く実行する人達でした。一時珍しい朝顔を作ることがブームになりましたが、それも江戸人が遊び心にあふれていたから。暮らしをいきいきと楽しむ能力が高かったといえるでしょう。

### 遊び言葉（言葉遣い）

名前はあだ名で呼び合い、パールで美しく包む人情豊かな江戸町衆の心遣い。

言葉遣いも同様に、弱冠（20歳代）なら「まだ、なにもわからぬ者ですが」と、また、而立（30歳代）なら「やっと判りかけた者ですが」式に話を切りだします。遊びを入れて答えているのにしつこく聞くのは野暮天といわれ笑い者になりました。

#### 明日備（あすび）

「あすび」がなまって「あそび」、此处で言う遊びは知恵比べや言葉遊び、何々と賭けて何々と解く。俳句、川柳、狂歌づくりなど。

あたまを柔軟にさせる遊びは大切でありました。

#### 新しい文字

過去にあった文字では表現できないものを江戸町民たちはどんどん創りました。

たとえば、山の上と下の境という意味の「峠」、紋服の上に肩衣、下に袴をつけた状態の武家の礼服という意味の「袴」（かみしも）など実によく考えたものとおもいます。

#### あやめ（文目）の御節句

5月5日の端午の節句。 菖蒲の節句とは言わなかったそうです。尚武と区別したそうです。

#### 有卦絵（うけえ）

幸運・有卦に入った人が飾ったり、また贈られたりした縁起絵。

#### 梅見月

陰暦2月の異称。 梅を見て楽しむ。

#### 大家と店子は親子も同然

住人達は、長屋の管理人である大家ときわめて近い関係にありました。

日頃の店賃の支払い、婚姻届の処理、夫婦げんかの仲裁、旅行の際の届出など、大家が仕切っていたためです。

江戸の町は南北二つの奉行所→三人の町年寄→町名主→大家という縦系列で行政が行われ、その大半が町方の自治という形で運用されていた。このため大家の影響力は思いのほか強かったそうです。

大家は長屋の持ち主ではなく、雇われ者が多かった。しかし、裁量権を持っていたから、その人物の出来不出来で、長屋の暮らしは大きくかわりました。

長屋に住む住人の糞尿の販売権は大家が持っていたので、暮れになると、大家が店子たちに餅を振る舞うのが恒例でした。

#### 大山詣り

六月末から七月中旬の盆まで江戸っ子は、年中行事として大山（現在の神奈川県伊勢原市）に参拝しました。

江戸の人々からすると、同じ信仰の対象である富士山までは距離があるし、箱根の関所も通らなければならない。これに比べ大山は近い。早ければ一昼夜で戻ってこられる。途中で一泊、精進落としもできる。

そこで、隅田川は両国橋の東側のたもとで水垢離（みずごり）をとり、「大願成就」と記した木太刀を持参、社殿に奉納し、下山の時は代わりの木太刀を持って帰るといった風習が一般化しました。

#### 恵方詣り（えほうまいり）

恵方は吉方、つまり縁起の良い方角のこと

陰陽道の歳神、歳徳神が一年の冒頭に現れ、幸運を与えてくれる方角を言います。

正月の初詣は、もともとは自分たちが居住している土地の守護神である産土神（うぶすながみ）に行くのが普通でした。

恵方詣りは初詣の一環で、その年の縁起の良い方角にある寺や神社にお詣りしました。

## おかげ参り

ほぼ六十年おきに起きた伊勢参りブーム。

伊勢神宮は古来、国の祖神とされてきたが、江戸時代に入ると一時に多勢の人が群れをなしておしかける現象が起きました。

信仰を理由にした旅である。お上の御咎めもない。伊勢講を組織、旅費を工面し合うケースも多かった。次いで物見湯遊山も組み込んで、江戸の人々は大いに旅を楽しんだそうです。

## お彼岸

春分の日・秋分の日の前後各3日を合わせた7日間のことです。百済や中国から伝わった仏教が日本独自の習俗と結びつく事で、墓参りなどを行う仏事へと変化したといわれています。

その仏事になくてはならない「ぼたもち」と「おはぎ」同じ和菓子を、牡丹が咲く春には「牡丹もち」でぼたもち、秋には秋の七草「御萩」でおはぎとよびます。また、

仏事とは関係なく一年中食される「ぼたもち/おはぎ」ですが、夏には「夜舟」、冬には「北窓」という呼び方をします。見た目ポテツとした菓子に、このような風雅な名前をつける日本人の想像力とその機知こそ、決してなくてはならない特性の一つだと思います。何故お供えにこの「ぼたもち/おはぎ」かと言いますと、一説には「あずきの赤色には、災難が身に降りかからない効果があると信じられ、古くから邪気を払う食べ物とされていた。これが江戸の頃より先祖の供養と結びつき、以来先祖捧げて功德を積むという風習が普及した」とあります。

お彼岸は仏事とは言え、そこには「祖先への祈り」という宗教を超えた「感謝」と「思いやり」の気持ちがあります。一年に二度もそういった行事を続けてきた日本人、我々ももっと日本の文化に誇りを持って良いのではないのでしょうか。

## お天の気持ち（目くじら立てず）

お天は広い、広いは大きい、大きいは包む、包むは暖かい、暖かいはねむい、ねむいはボーとする、ボーとするはぼんやり、ぼんやりはお馬鹿さんというような意味で使われていたようです。

## お年玉

お金ではなく、お餅をもらっていた。

お金を頂くのは卑しいと考えられていた。

上役から下役に贈るのが本当だそうです。

## 落とし噺（江戸噺・江戸落語）

伝統話芸の雄

・江戸時代（1781年頃から）の江戸に成立し、現在まで伝承されている伝統的な話芸の一種。一人で何役も演じ、語りの他は身振り、手振りのみで物語を進め、扇子やてぬぐいを使ってあらゆるものを表現する独特の演芸であり高度な技芸を要する伝統芸能です。

落語は庶民の文化です。その中でも江戸しぐさが多くでできます。

・三題噺は、三笑亭可楽が創始です。この噺の言葉は江戸噺用の江戸っ子の考えた新しい文字です。

落語という呼び名になったのは明治に入ってからのことです。

## お酉さま

浅草・鷲神社の祭礼としてしられる。

縁起物の熊手は「幸福」を搔き込めるというわけで競って買われました。

## お福分け

自分が手に入れたものを皆に分けて一緒に楽しむこと。



自分で買ってきたものや、実際に頂いたものなどを、「頂き物をしたので召し上がってください」といって、ご近所の人とか、親しい人に分けました。

そんな時に、「お福分けです」と、一言添えられると、さらに嬉しくなるそうです。

#### お福まき歩き

お福歩きでのお土産を、行けなかった人に配って福が来るように祈りました。

#### 回文

上から呼んでも下から読んでも同じ文。

江戸時代では初夢は、事始めの2日～3日にかけてみる夢を言われていたそうです。

七福神が乗り込んだ船の絵を枕の下に置き、いい夢を見て新年の行く末を占ったことは間違いないそうです。

この七福神の絵に必ず書かれていた文章がある。「長き夜のとおの眠りの皆目覚め波乗り船の音のよきかな」五・七・五・七・七の和歌の体裁（ていさい）になっている。眠りは「ねふり」と詠みました。

ひらがなで書き起こしてみるとお分かりのように、江戸の人々が好んだ言葉遊びのひとつ、回文であります。

#### 風が口笛を吹く五月

端午の節句。こいのぼり。鯉は子供の立身出世を夢見る親たちの願いです。

#### 懸想文(けそうぶみ)

恋文、江戸時代、正月に、京都などで懸想文売りが売り歩いたお札の文のこと。

#### 講談

軍記物を名調子で語ったのがはじまり。

講釈師、見てきたようなウソをつき。講談について語る時、必ずこんなコメントがつく。語り口がさわやかで、つつい引き込まれてしまう聴衆の気分とでも史実とは違う微妙な境界線を評したものです。

講談の始まりは、関ヶ原の合戦や大阪城落城の模様を語ったのがきっかけとされる。釈台を据え、張り扇でパンパンと間合いをつかみ、名調子で話を進めていく。

#### 午睡

昼寝の事。

江戸しぐさでは心であれ、身体であれ、自己管理をする事を重要視しています。

昼休みには身体を休める為に昼寝をしていました。特に夏場はミンミン蝉が鳴き出すと、一刻が冬場より長いこともあり、冬よりも30分くらい長い午睡を取って、身体がばてないようにしていました。

江戸中期になると、食事の面から健康管理をするというテーマで「江戸食事仕様書」という本が出されました。当時の江戸では健康に関する意識が高かったそうです。

#### 好きこそものの上手なれ

どんなことがあっても好きなことは一生懸命になるので上手くなりました。

#### 銭湯つきあい

早朝の銭湯で情報交換。普段聞けない話が飛び交う、社交の場でもありました。

お風呂は裸のつきあいが出来る場所。「銭湯つきあい」は、持ち物も先入観も全く持たない裸の状態です。相手と対等に向き合うという意味で、「つかの間つきあい」よりも一歩、相手に踏み込んだ付き合いということになります。

知らない人ともなごやかにあいさつし、風呂に入るマナーをご隠居さんが子供におしえたようです。親しみを深めるとともに、いまでいう公共マナーも銭湯で身につけたのです。

武士がお風呂に入る時には、当然、刀を置きましたから、銭湯は身分の上下もない場所でした。

## 川柳

柄井川柳が考案したのでそれ以後「川柳」と名付けられました。

時流をよみ、優秀作品に賞金が出たので大流行しました。

俳諧のように季語がいらぬし、厳しいルールもない。それでいて、自分の考えを打ち出せるし、ご褒美も出るとあっては、川柳は江戸町民にとってたまたま楽しく遊びでした。

## 通

遊びの道の達人。

吉原など、通常とはかけ離れた世界で遊び方の上手な人を「通」と称した。物事に執着せず、臨機応変の振る舞いが出来、嫌味がなく、下品でなく、高慢でもない。

とりわけ、金遣いがさっぱりしているといった条件を備えている人を指します。

逆に中途半端な振る舞いしか出来ない人は「反可通」といわれました。

しかし、過ぎたるは及ばざるがごとし「大通」といって大がつくと、通常とかけはなれているといわれました。札差を中心に呆れた行状を繰り返した人々を指しました。

## 富くじ

寺社が興行主になって行った江戸の宝くじ。

いつの時代も一攫千金を願うのは人情です。江戸時代の富くじはその典型であります。

当初は年に数回の興行でしたが、やがて毎月に、また発行枚数も千枚単位だったのが万単位になりました。当たりくじの賞金も100両から次第にふくらみ1000両に上ったこともあります。売値は四分の一両、つまり一分です。

## 菜種御供（なたねごく）「採種御供（さいしゅごく）季節を楽しむ」

菅原道真公の命日に、道真公の御心をお慰めする神事。この神事は、江戸時代後期から始まり、神前に菜の花を供えるのは、菜の花の菜種が「宥め（なだめ）」に通じるからと考えられました。

## 初午（ハツウマ）

稲作を司る稲荷神社の祭礼日、縁起をかつぎ寺子屋の入門日にも。

お稲荷さんは稲の守り神だから大切に扱いました。とりわけ、二月の初午の日は祭礼日で縁日がたちました。

この時期は、そろそろ稲作の準備に入るぞ、今年も豊作を祈ろうというタイミングでした。初午はきわめて重要な祭礼日で、「事始めの行事」にあたりました。

寺子屋の入門日がこの翌日に集中したのは、こうした伝統的な稲作文化にもとづく慣行から来ているものだろうと思われまふ。

## 噺（はなし）

ここに登場する「噺」は口新しいハナシです。昔の江戸っ子のおはなしは、まったく独創的でありましたので、中国からいただいた咄、話、譚などの文字では、十分表現できないと考えたのでしょう。

確かに三題ばなしなどは、噺という字でなければ、ぴったりきません。なにしろ、お客さんに任意に三つの題を出してもらい、それを即座におもしろおかしく綴りあわせて、一席の落語にするのですから咄でも話でも譚でもなく、まさに噺です。たいした知恵です。口から即座に新しいことをハナスというので、口へんに新と書く新しい邦字を考えだしたのでしょう。（新しい文字）

## 話しっぷり

話し方を見ていると、その人物の人柄も教養もすべてわかります。江戸の人たちは身振り手振りを含めて、言葉をつかう面白さを大切にしました。駄洒落などを楽しんだり、身体にしみついた洒落の楽しみ方や、話しっぷりの面白さを見て、その人の教養や人柄を判断しました。

## ひな祭り

お墓の前で手を合わせ「ご先祖様、子も孫もこんなに元気で大きくなりましたからご安心ください。これから楽しいひな祭りをしますので、あの世で見守ってやってください」子も孫も、親や祖父母たちの言葉を肩越しに聞いて「もっと元気で大きくなれないといけない」と小さな胸をふくませたり自覚をしたりしたものです。

この世に生きている人間は、みんな御仏様やご先祖様に見取られながら生きているのだから、おたがいに教え合い助け合って、顔を赤らめたりしたりしないですむように、楽しくいたわり合って暮らしていける江戸人の癖。江戸人のしぐさです。

## 目くじら立てず

一語一語に目くじらを立てず、こしをすえて、じっくり江戸の雰囲気浸ってください。現在でも、下町に古くからいる職人さんに、「いいお天気ですね」なんて言ったら「なんだと、もう一度言ってみろ」といわれます。江戸では「いいお日和でございますね」「日和、結構でござるな」などと言った事でしょう。

江戸の町衆言葉では、お天は（広い、暖かい、ねむい、ぼんやり、おばかさん）という意味でつかわれていたそうです。

## 物見遊山

気晴らしに見物や遊びに出かける。季節ごとに変化する自然の恵みを得ようと、海や川、そして野山へかけて行きます。春の花見、潮干狩りはその最たるものです。

# 学問

---

## 頭に神・のどに仏・胸に儒学

頭にある髪の毛と神、のどのところにあるのど仏、そして胸には儒学と身体の部位にたとえて江戸人には神も仏も儒学も宿っているとしました。

神道、仏教、儒学と年を追うごとに江戸人はさまざまな知恵の良いところ取りをして人間を磨いてきました。

## 乳母代（うばがわり）「養育」「鍛育」

お説教の最中に、お菓子を与えたり、乳を飲ませてごまかすのではなくて、講師様のお話を子守唄にして、スヤスヤ眠ることができるような癖をつけたのです。この癖は眠り癖にならず、いかなる人の話でも、すんなり受容できる素直さを身につけるのに、大いに役立ったと言われていました。

・芝講師が、0歳から2～3歳までは、お講の座で乳母代の手のなかで、スヤスヤ眠る良い子であったと、後年、母から聞かされた事があるそうです。

4～5歳では、大人の中で静かに我慢していなくてはならないことを学び、6～7歳でお講師さまの目を見つめることを教えられました。

8～9歳になると、講師の話し方を真似るようになり、10歳になるとお説教の内容が少しは判るようになりました。

芝講師が、曲がりなりにも、最後の江戸講の雰囲気身を身に付けられたのは、現代式保育ではなくて、大人に交じって鍛育をする江戸式の保育をうけたからだといわれています。

## 江戸寺子屋と田舎寺子屋

首の教育と手足の教育に分かれていました。

江戸寺子屋の教育目的は、人間を養成すること。「見る、聞く、話す、考える」

田舎寺子屋の教育目的は、従順に働く人間を養成する。「読み、書き、そろばん」

## 大学（おおいにまなぶ）

大はまさる、学はまねぶこと。まねぶとは、良いものを真似して自分のものとし、その後まねんだ（学んだ）ものより、優（まさ）ったもの、もっと優れたものにすること。そういうことを書いた本、そういう場所、そういう考えの人々が集まっている社会の集団、団体です。

## 御菓子司（おんかしつかさ）

お菓子を作るには厳重な審査や許可が必要で、免許をいただくのは至難のわざだったそうです。なにしろ、江戸百万人の命にかかわる大問題ですから、毒物などが、間違っても混入しないように一人一人が身を清め、お菓子作りと真剣に取り組んでいたそうです。食べる人も、むやみには食べなかったそうです。

## おかどちがい（お門違い）

家の門を間違って飛び込んだ。門を確かめてくぐってください。（考え方）

## 教えることは学ぶこと

教えているつもりが逆に教え子から学ぶことがあります。

教え子にいかに理解してもらうか、あるいは上達してもらうか工夫しているうちに、自分自身が成長していることに気がつきます。

他人に教えているつもりだったのに、自分自身も知らず知らず、学んでいたおかげで、新しい境地に

立つことができるのです。

「お心肥」で人の道を心がける

「心」に肥料を与え、豊かにすること。自分で考えられる頭をもつこと。

・高い教養を身に付ける。

常にアンテナを高く張ってあらゆるものに興味や関心を持ち、敏感に物事に反応していく力を上げなければ、なかなかむずかしいことです。

・気力を失えばすべてを失う、人格を磨く。

物を失えば、それだけは確実になくなる。名誉を失えば、多くのものを失う。

気力を失えばすべてを失う。その人の生きる力は、気力や願望の強さに支えられている。実際に手や足を動かし、見て、聞いて、話して、頭を働かせ、自分で考えて行動し、さまざまなことを体験することで成長するということです。

このような言葉は、江戸しぐさのもっとも根幹をなす考え方。最近では、「IQ（知能指数）」より「EQ（心の知能指数）」を高めようという考えも出てきました。

お手紙拝見

必要な事、知識は大人が子供に伝える義務があります。美しい文字は心を豊かにしてくれます。

親の顔が見たい

子供の躰ぶりが悪いと、こう言って親の責任を問うたそうです。

三つ心、六つ躰、九つ言葉、十二文、十五理で未決まる。江戸の子育ての基本である。

ところが、挨拶ができない、言葉づかいが乱暴である、わがままで自己中心的な行動が目立つ、いたずらがすぎるなど問題児が時折出てくる。

「十五歳までは母親の責任、十五歳からは父親の責任」と言われるように、親が適切に養育してこそ、子供は上手に成長していく。それができていないのは・・・ということで、「親の顔が・・・」となった。

子供同士の喧嘩には、親は介入してはいけないとされた。「子供の喧嘩に親が出る」といって、周囲から馬鹿にされました。

温故知新

前に学んだことや昔の事柄をもう一度調べたり考えたりして、そこから新しい知識や見解をえること。

おん芽、出たくございます

木の芽、草の芽、人の才能の芽も出ますようにという願いをこめて乾杯したそうです。

学習

学ぶは、まねぶ、まなび、真似をすること。ならい、習うは慣れるということです。

貸本屋

一件の貸本屋の得意先は平均170軒位だったそうです。

制作コストが高いから、折角、内容のいい本でも買い手が限られる。いわゆるベストセラーでも一万部がいいところだったようです。その代り、貸本屋のおかげで廻し読みをするから、実質的な読者数は多かったそうです。

1808年のデータによると、江戸府内には656軒の貸本屋があったといわれています。

貸本屋を利用している人は、約11万人いたそうです。。

亀の甲より年の功

経験豊かな年長者を尊びなさい、という諺。

江戸はこの諺どおりの社会で、年長者の経験値を大事にしました。職人の世界を見れば一目瞭然。経験が生み出す技には、こまやかな心配りがきいています。こうして尊んできたからこそ、「半畳を入れるべからず」というしぐさも生まれたのです。

#### 川向こうの学者より江戸の小僧

川向こうの学者「学問というものは、机の上に本を置いて読むだけでは駄目」、江戸の小僧は「文化環境の良いところに身を置いて、手、足、体を動かし、頭を働かせてはじめて自分のものになる」ということです。

#### 諫言（かんげん）

上司に対し、臆せず正論を説く事 「貞観政要に出てくる言葉」。

「優れたリーダーはその言動を諫めてくれる助言役を持っていないといけない。

リーダーは助言役の諫言を素直に聞き、対応しなければならない」とあります。

「諫鼓鳥」→太鼓の上に飾った鳳凰。お祝いとして贈る風習がありました。

ある中国の王が自分の政治に間違いがあったら、民に太鼓を打ち鳴らして欲しいと呼び掛けました。一度も鳴らされることが無かったことから、いつの頃からか「閑古鳥」と呼ばれるようになったということ。

「閑古鳥が鳴く」というのは、人っ子一人寄り付かなかったことで、この故事にならっています。

#### 利き書き（ききがき）

「聴き書き」とせず、「利き書き」と書きます。

相手の話を聴き取り、十分吟味して文章化する作業。

江戸では文章の重要な書き方の一つ。正確さや真意のほどよりも、むしろ少しでも多く詳しくということに比重が置かれていた。利き書きさえあれば、それを元に後年いくらでも研究することができるということ。

利き酒の利に通じる。

#### 聴き上手

相手の話しやすい雰囲気話を聞き出す。

江戸しぐさでは、相手が話しているときにメモを取ったりするのは、相手を緊張させてしまうので、洗練されていない行為だとして嫌われた。

人の話を聴くときは、少し身体を傾けて、乗り出す格好で聴く。出来るだけ自然体で、あいづちを打つなど相手の話しやすい雰囲気を作る。時には知っている話しでも知らないふりをして、謙虚な態度で聴く。

そうすることで、相手は気分良く話し、思わぬエピソードを引き出すことができます。聴き上手になって相手を立てるのも江戸しぐさです。

#### 食い様（よう）

食べ方は文字で覚えるものではなく、体で覚えるもの、文字で覚えると、しぐさがぎこちなくなって川向こうの学者に…なると言われ、いっさい書かないことになっていたようでございます。

#### 下品・中品・上品（げぼん・ちゅうぼん・じょうぼん）

仏教では、人間の生き方を下品・中品・上品に分け上品を目指した。

人は、生まれてくるときは丸裸である。つまり「下品」。親から躰けられ、寺子屋で学び、ひと通りの常識を身につけて、社会に出たら「中品」だ。「中品」で終わってしまう人も勿論いるが、社会や人の役に立ちたいと徳を磨き「上品」になる人もいます。

実際には、これら三つの段階がそれぞれ、さらに三つに細分されている。下生・中生・上生（げしょう・ちゅうしょう・じょうしょう）したがって、トップの「上品上生」には九段階目でようやくたどり着けることになる。

「中品」は親や周囲の手助けと自身の努力でなんとかなる。しかし「上品」は周囲の助けは期待できない。自己努力なくして達成はありません。ハードルの高い目標であるからこそ、「上品」の人は、世間に認められ輝きを放つ。

#### 子は親の鏡

子供を見ればどのような親か想像がつく。

子供は親の背中を見て育つ。親が几帳面で態度・物腰が穏やかなら、そのように育つ。逆に、乱暴で、態度が横柄、言葉も汚いとなれば、子供もその程度にしかならない。小さなころからの躰の大切さを示した言葉です。

#### 地震雷火事親父

世の中で特に怖いと言われている順。江戸しぐさでは、この言葉の本来の意味での筆頭は親父。つまり、戸主の意味。災害の中で一番怖いのは火事でした。木造家屋なので広がったときの被害が大きくなるので気を付けろという意味です。

江戸の町は、火事には細心の注意をした気配りがなされています。火事対策として、道路を広くいわゆる広小路を設けて火伏（防火）の道路として、延焼、類焼を防ぐような手当をしました。また、家にはうだつをあげ防火壁としました。

火の用心は、当番で頻繁に夜回りもしています。同じあやまちを繰り返さないのが「江戸しぐさ」です。

#### 師匠

見習いのお手本、見取るための模範、学び習う為の心のよりどころになる人。

寺子屋の先生。

#### 世間様

～様を付けるほど、世間では大事な社会空間。

「理屈はそうでも世間様は許さない」

「あのお方のしぐさをお見習いなさい」とよくいわれました。

江戸の町は人口密度が高く、人がひしめき合って暮らしていました。そこで、少しでもトラブルを減らすために、人々は周囲への気づかいを怠らずに、仲良く平和で暮らせるよう心がけました。

たとえば、銭湯で子供が騒いで迷惑をかけていると、親はもちろん、近所の大人たちも叱り、子供に世の中のルールを教えました。

子供だけではない、大人も同様である。世間様は道徳を教える先生でもあります。世間様に笑われないう、しかられないよう、いろいろ気配りをしながら暮らすことで平和な町を維持していました。

#### 師を煩（わずら）わさず

師匠には研究に励んでもらい、雑ごとで疲れさせてはいけない。

江戸講では、「論語」をはじめとする四書五経などから引用した人の上に立つ者の心得を、講師から耳学問の形で教えてもらっていました。そんな講師を雑事でわずらわせることはもってのほかでした。下の者は、それなりの役割があります。雑用をすることで、師の勉学に対する時間を作るお手伝いをする事が出来るのです。それがいずれ師になるための肥しになります。

#### 写経の精神

一字一字心をこめて、学習すること。

## 上水道（水道）

江戸の町は、規則正しく上水道が整備。（拝島から3メートルの落差を利用して江戸まで水を引き込んでいた）

上水道には、汚物は流さない清潔な町でした。

「水清く入り江のありて真魚豊四方見渡せ商（まかな）いの町」といわれました。

## 真贋分別の目

物事にはすべて「真」か「偽」がある。人間も同じく「真偽」を見抜く目を持ちたい。

観察する相手が人間となると少々厄介だ。相手の表情や話し方などから判断するしかありません。先入観のために判断が狂う事もあります。

周囲の意見に惑わされることなく、自身で相手が信用できるかどうか判断できる目（力）を育てたい。

## 身体知（しんたいち）

訓練によって獲得できる身体感覚。

江戸の人達は、武道、文化、芸能であれ、幼少のころから、この身体知を育んできたし、その実際を表す言葉が沢山のこっています。江戸しぐさの中にも見られます。

たとえば、「ツボを外さない」という。このツボは漢方で言う経路を指す。経路をしっかりと押さえて指圧をする、あるいは灸をすることが肝心だったためです。それが転じて、稽古事では会得すべきポイントの意味で使います。

「コツをつかむ」これは骨に関係がある。骨は人間の体の動きを制約する構造物。この骨の動きに逆らわず身体を動かすことが、物事の上達につながったからであります。

## すこし屈して大いに伸び

少しの挫折ぐらいではへこたれない子はどんどん伸びていきます。

尺取り虫の動き（姿）を連想しました。

## 井蛙大海を知らず＝井蛙っぺ（せいあっぺ）

小さな井戸の中の蛙は大きな海の世界のあることを知らず。

世間知らずな人。井戸の中の蛙は世間知らずで何でも自分が一番と思いがち。

狭い世界に閉じこもって、広い世界の有ることを知らない。狭い知識にとらわれて大局的な判断が出来ない。他人を無視して生きる、現在の都会人の生き方です。

## 誠実

一番大切なのは、頭の良し悪しではなく、心の良し悪しである。

## 稚児への親の言葉

「どこで何をしてもいいが、お上から本名で呼び出されるようなことだけはしないでくれ」これが江戸中の親の願いであり、言葉でありました。

稚児に対して年齢別に言葉を使い分けた。

お菓子を持って帰って

「お菓子をどうかい」（2～5才）

「お菓子どうだい」（6～9才）

「お菓子どうだ」（10～14才）

父親の言葉の使い分けで、優越感と責任感、父の威厳や愛情を肌で感じて成長し、15才になるまでに世辞を覚えていきました。



## 稚児問答

寺子屋の卒業試験のようなもの。この稚児問答に受ければそのまま社会で通用しました。江戸町衆の80%は商人。父親がいつ死んでも跡取りが出来るように、長男長女を養育(教育)しました。末っ子でも稚児問答をクリアすれば長男扱いになります。

子供がクリアできなければ養子をして優秀な跡継ぎを選びました。そうしないと商家がつぶれてしまうからです。

## 付き合い学

おつきあいの方法を学び合うことです。

## 手取り・足取り・口伝え

大人は子供に、手本を示し、模倣させ、繰り返すことで身につけさせました。

子供は、知識を理解するだけではなんの行動にもつながらない。大人や先輩のする事を見よう見まねで学び取り、体で覚えるようにしたらしい。

たとえば食事の片づけをするときには、子供は親の隣で食器の洗い方や拭き方、しまい方を見たり、手伝ったりして学ぶ。時には、注意されたり、褒められたりして、上手に出来るようになっていきます。

## 手習指南所(手習所)「江戸寺子屋」

1690年頃から手習指南所(寺子屋)が出来、学問が広まりました。

男あるじ・女あるじの養成所、合否の決め手は忍耐力。

町衆の子供達にとっての学校が手習所でした。「読み書きそろばん」などの他に、おつきあいの作法「如何に見、町の声聞き、話すべき」かを養育したそうです。世辞の訓練も手習所でなされたとか。子供の適正に合った道を指し示すのも、手習所の師匠の役目でした。(吉宗は1720年に学問の奨励をし、この時代に多くの手習所が出来ました)

## 年男・年女の役割

お祭りなどに参加して大人になる準備をします。

## 恥・恥じよ

恥を知ることで人生はかわる。恥を知ることで人の気持ちがわかる。上に立つ人間として大切なことである。

- ・出来ない人を助けない自分を恥じよ
- ・いじめる自分を恥じよ
- ・一人になれない自分を恥じよ
- ・己のない自分を恥じよ
- ・否定する自分を恥じよ

江戸しぐさで言う恥とは、自分自身に対する戒めの心。自責の念にかられる程のものであり、他人にどう思われるかを憂うものではないのです。

## 恥の感じ方・心得

目だって他人の目を気にする。肝に命じ過ぎたことは忘れ、前に進む。

恥ずかしがると「恥」とは別物です。

「恥ずかしい」と感じる状況を想像してみましょう。恥ずかしさのあまり「穴があつたらはいりたい」などとおっしゃってしまうのは、

- ・間違えてしまった

- ・失敗してしまった
- ・非常識なことをしてしまった
- ・目立ってしまった

ような状況におかれた時です。これらで感じる恥の多くは、「他人と比較した自分」の言動や存在を他人目線で想像し、「自分が人より下に見られている」と感じ取った結果生じたものといえるでしょう。

同様に、私たちが一生の中で何度か感じることもあるかもしれない「恥ずかしくて死んでしまいたい」という激情も、「他人にどうみられるか」という虚栄心による一過性のもの、自分が思っているほどのことを他人は感じていない。そう思えるかどうかで現代の恥の受け止め方は違ってきます。

### 恥っさらし

人間性を問われるような事態を生じると恥っさらし。

特に恥っさらしな行いの一つに水母があげられます。これに比べれば刻泥棒は可愛いもの、何故なら、遅れたり無駄に時間を延ばして迷惑をかけた相手の態度から、自分がしたことの申し訳なさを感じとることで、非礼をその場で反省することができるからです。一方、水母はその場に来ないのでから恥をかく機会がありません。後日会ったとしても、その頃には申し訳なさも薄れ、効果は半減してしまいます。

今であれ昔であれ、恥とっていないことも多くあります

- ・おとし入れること
- ・盗むこと
- ・傷つけること
- ・約束を守らないこと
- ・法を犯すこと

これらは法や社会から罰せられるものではありませんが、だからといって自らの過ちを恥と思わなければ誰も救われません。それこそが最悪の罪ではないでしょうか。

### 人恥さらすは自分の恥

口に出してはならない言葉

下のような言葉を使うのは恥であると心得よ

- ・「お忙しいでしょう」「お忙しい方ですから」「お忙しいらしいわよ」
- ・「お疲れでしょう」「お疲れになりませんか」「お疲れのようでした」
- ・「お忘れですか」「お忘れになりましたね」「あの方の忘れ物」
- ・「くさやはお好きですか」「ひかりものはお嫌いですか」「あの人は嫌い」
- ・「ペンを忘れましたね」と伝えたら講師にひどく怒られました。これは自分の恥と気づくのに時間がかかったからです。

### はなし（咄、話、譚）

江戸の本に良く出てきます。江戸っ子が使い分けをしていたそうです。

咄をハナシと読ませる時は、人を叱ってお説教をするハナシや、本を読んで驚いて思わず声を上げてしまいそうな内容のハナシです。

話をハナシと読ませる時は、相手の登場するハナシ、たとえば、掛合漫才とか、今風なら会話や対話の本の事、稚児にきかせたい善いお話も「話」の字を使ったそうです。

譚をハナシと読ませる時は、長いハナシ、今風だと大河ドラマや歴史小説などを指したそうです。

## 話し言葉

九つか十くらいまでに母親と祖父から口伝で教えてもらうものです。

## 変換読

外国人たちが驚いたのは外国語をマスターする江戸っ子の素早さであった。江戸の寺子屋だけでしていた「言い換え読み」のコヤシが聞いていたことを忘れる事はできません。

## 勉強したいものにはいくらでも手をかしてくれる人

講師はこれを実践していました。見習いたいものであります。

## 学ぶは真似ぶ

学ぶことの第一歩は、名人、達人を真似ることです。

## 廻し弟子

両親は最初の師匠であり、次に自分の目指す道の師匠を見つけて弟子にして頂く、更にその道を極めんとして第三、第四の師匠の弟子となります。しかし、それぞれの師匠を超えることが出来ても、最初の師匠である両親を超えることは難しい。最後は両親のもとへ戻り、人生という修行を続けます。相撲や柔道、空手、剣道等の出稽古では、いつもと違う練習相手と取り組んで技を磨きます。強いものが更に強くなりたいと、強い者の胸を借りに行く。「胸をかりる」とは、元々相撲用語であったようです。

自分の師匠以外の人から教えを請うという事は、新しい発見はもちろん、今まで正しいと信じて疑わなかったことを場合によっては否定されてしまう事もあるでしょう。「それはそれ、これはこれ」と割り切ってしまうことの出来ない真っ直ぐな人ほど、そこで悩んでしまい、悪くすると挫折することもあります。

## 見取り学

「見取り学」とは読み取ることは勿論、聞く、触る等五感をフルに使って感じ取る力を養う為の学習であります。

「パッと見」は難しく見えるかもしれないが、順を追って規則通りに読み解いていけば必ず理解できます。

「みとる」は「見取り」や「看取り」や「身取り」 unnecessaryなものが無いと憂うより、必要な物だけで満足する。更には、必要な物が無いと嘆くより、それを補う術や知恵を身に付ける（身取る）幸せを実感することが出来るように江戸しぐさは知って得する「実穫り学」です。

## 見習う

人のしぐさを見て習う。

## 耳学問

人の話からも知識を得たり、知恵を磨く事ができます。

江戸時代末期の日本人の識字率は江戸で八割、地方で六割ぐらいに達していたとされます。寺子屋が全国的に普及していたためです。

しかし、書籍を読んで勉強にいそしむだけが能ではありませんでした。人の話を聴いて要領よく学ぶことも、江戸の人達は上手でした。

寺に行って僧侶から話を聴く、講談や落語など耳から知識を入れたり、それだけ物事に対する好奇心が強く、知識欲があったのが江戸人ともいえます。

## 養育法「三つ心六つ躰九つ言葉十二文十五理で未決まる」

このことわざは江戸の稚児の段階的養育法だそうです。

江戸では一方的に教え育てる教育という言葉より「養育」とか「鍛育」（たんいく）という言葉がつかわ

れていました。この成育段階に取り違えた躰をすると変な事が起こったようです。神童といわれる子供も二十歳すぎればただの人になりかねない。

普通の三つの子に天才教育として理をつめこんだり、人間としての躰を大人になってからしても効果は期待出来ないのみか、せつかくの個性は死んでしまいます。

このことわざは、真の人間形成のためには一見、迂遠(うえん)に見える方法でも成長に併せての養育こそ大切なことを示唆しているのではないかと思われまます。

江戸町衆たちの賢者たちは、人間は脳と身体と心の三つから成ると考えたようです。

つまり三つ心というのは、数え年三才までに、この目に見えない心の糸をしっかりと張り込まなければいけないということでした。

蜘蛛の巣が緻密なほど良いように、心の糸も綿密な用意周到さではりめぐらさなければならなかったのです。一日一本としても3年間で365本×3=約1000本の糸が張れるように心がけたといいます。これが片親だと500本しか張れないからよほど心して育てなければいけないとされました。言葉も身のこなしも心の糸によってコントロールされるもので、心がなければ、デク(木偶)と同じで人間ではないという認識があったようです。

「心としぐさ」の仕組みを親は、3才児にどのように理解させたのでしょうか。おそらく知識として教えたのではなく、親のしぐさを、みずみずしい稚児の感性に訴え見取らせ見習わせたのではないのでしょうか。

現代の育児や教育にもっとも欠けている要素のような気がいたします。

六つまでにはこの心の糸でスムーズに手足が動くよう、つまり傘傾げや肩引きができるようにトレーニングをしたのです。

九つ言葉とは九歳までには大人の言葉「作用でございます」などきちんとした大人の言葉で挨拶や世辞がいえるようにしました。12歳までには注文書や請求書など主の代行がまがりなりにも出来るようにしました。15歳までには経済、科学などが分かるように、段階的に仕込んだようです。

江戸の寺子屋(手習い所)では、ほとんどが商家の子弟たちですから、いつ、親に万一のことがあってもあとが継げるように仕込んだようです。読み書きそろばんのさらに上に行く、見る・聞く・話すに重点を置いたそうです。そして、究極は人間観察力、人を見る目を養うことにつきるようです。

「養育」・「鍛育」(たんいく) ・ (乳母替わり)

発育ざかりの子供は、雲や水のように、心も一瞬一瞬形を変えて成長していきます。保ち育てる「保育」では困ります。養い育む「養育」あるいは鍛(きた)え育(はぐく)む「鍛育」でないといけません。

## 遊学

教えてもらいたい人にも、教えてあげたい人にも、門戸を開いていて、自由に、お互いに人生勉強をしながら遊ぼうというわけです。

## 遊習

成人教育・生涯教育などと力まずに、折に触れ、人に触れては自然を愛(め)で、お互いに助け合っ

て織った心の綾錦を着飾って、人生を謳歌しましょう。

## 良いものをみること

- ・本物の味を知ること
- ・偉い人の話をじかに耳で聞くこと
- ・自分でも実際にためしてみる

## 和算

日本で発達した数学。

和算が一般に普及するのは吉田光由がまとめた「塵劫記」（じんごうき）がきっかけです。関孝和が円周率を解いていたそうです。

寺子屋とは別に和算の塾が各地にでき、神社に問題を書いた絵馬が掲げられるほどのブームが起きました。

## もったいない

---

### 灯りのありがたさ

灯りに使う油が高価だったので無駄な使い方をしないように心掛けました。

「早起きは三文の得」朝は早くから起き食事などの準備をし、夜もくれる前に食事を済ませ早く休むことに心がけました。

### 暑さ対策

「打ち水」「すだれ」「行水」など。敢えて熱いお茶を飲むことで汗をコントロールすることもあったようです。

### 稲藁（いなわら）

リサイクルの象徴的存在。

稲わらは、燃料、肥料、工芸品、帽子、壁塗りのつなぎ、たたみ、ゴザなどにもつかわれました。

江戸では生活の中で重要な商材でした。

### 失せもの探し

整理整頓の奨め。

何時も肝心な時に、必要なものが見当たらない。片付けが下手で、整理整頓が出来ていないためです。

探し回って見つけると「失せ物探しの名人」といわれ恥ずかしい行為です。

### 紙屑買い

再生紙を作る素材収集人。

紙は貴重品である。

寺子屋では裏表が真っ黒になるまで使って、そのあとは回収して再生しました。

紙屑買いが、れっきとした商売として成立するほど需要が高かったそうです。

回収した紙屑は浅草に集められ、大きな釜で煮てどろどろの状態にした後、枠に入れて薄く引き延ばしました。この形成方法を学んで出来たのが浅草海苔です。

再生紙を作るのに時間がかかるので、暇つぶしに吉原に出かけ、遊女を買いもしないのに覗き歩いていました。

冷めるまで待つことから「冷やかし」はここから出た言葉だそうです。

### けちとしみったれ

ケチは「粗末なさま」や「卑しい」などの意味。現在では「金品を惜しがって出さないこと。卑しいさま、事、人」

しみったれはけちくさいさま、考えや気持ちが狭い、見栄えがしない、貧弱なさま。

ケチやしみったれを褒め言葉に変える魔法の呪文が「もったいない」。

「もったいない」も万能ではありません。それを邪魔するもう一つの呪文「みっともない」があるからです。「みっともない」は、人目に対して体裁が悪いという自分が感じる気持ちのこと。他人の行為に対しては「見苦しい」が適切なのだとか。

もったいないと見苦しいは常に隣り合わせの関係なのかもしれません。常に正しい状況判断と相手を思いやる気持ちがあつて、初めてもったいないの魔法は成功します。

残ったものをもったいないからと親が食べてはいけません。

生ものなら火を通し、水っぽくなってしまふものなら煮詰めて次のご飯で本人にたべさせましょう。

そもそも食事とは命を頂く行為。残すことは命を粗末にすることです。自分は「生かしてもらっている」と実感出来るからです。それが理解できれば、多少口に合わなくても残すことは良くないという気持ちが生まれてきます。無理に食べさせるのではなく本人が自発的に残さず食べるように促すことが正しい躰です。

「武士の嫁たる者、その家計を預かりながら日々の食事に無駄をだすなどは言語道断、みっともないことこの上無しと思うべし」。

#### 下肥(しもごえ)

人間の排泄物は近郊農家にとって格好の肥料になりました。

江戸は急速に人口が拡大したから、近郊の農家は地の利を生かし、売れ筋の野菜作りにこぞって精を出しました。このとき、抜群の効果を発揮したのが、下肥でした。農家の人々は人参や大根、葉菜類などを手土産に、汲み取りに歩きました。もちろん代金も払いました。評判の良い下肥は、長屋の住人たちのものでした。長屋の住人たちは日銭が入ると、お互いに見栄っ張りで食事には贅沢をしていたことから、成分が優れていたみたいです。

長屋の場合、下肥の処分権限は大家が持っていました。つまり、下肥代の実入りがありました。そこで年の瀬を迎えると、大家も住人達に気をつかいました。

#### 死んでから使えるのは、イワシの頭だけ

人間の頭は、生きていうちに使わなければ意味がない。

頭は使って使って使い抜け。

鰯は頭ごと食べられる。

#### 生活の心得

生活に大事な物を共有し「共生」するという暮らしかたです。

#### 灰買い屋

灰の用途は幅広く、専門の商売が成立していました。

ご飯を炊いたり、煮炊きをしたり、各家にあるかまどは小規模とはいえ、大切な灰の生産プラントでした。この灰を買い集めて歩くのが灰買い屋。元締めがいて、さまざまな用途に販売していました。身近なところでいえば、灰はアルカリ性だから水に溶けば洗剤になりました。酒造りの際、麴にまけば雑菌が死に、美味しい酒につながりました。大切な染料である藍の染め上げ効果を引き出すのも灰でした。そして、根っこに撒けばアルカリ肥料として根にいい。まさにリサイクルビジネスの雄でした。

#### 夜型は田舎っぺ

江戸っ子は油の貴重さが分かっているのです、日が暮れたらなるべく早く寝て、朝早起きをして行動を始めていました。

## 感謝・思いやり

---

「いいお日和でございます」

お天気のいい日の言葉です。

### お菓子まわしの儀式

このお菓子を与えてくださる神仏への感謝をのべ、持ってきた人に礼をつくす儀式。

お菓子を持ってきた人は、能書きをのべて楽しむ。

江戸の庶民は大のお菓子好き、江戸の町はお菓子で溢れていたそうです。

### 老入り(おいしい)

隠居して若い人を育て引き立てる役目のことをいいました。

隠居後、年長者ならではの見識を期待されました。人生五十年の時代、四十歳をすぎると、そろそろ世代交代の準備に入るのが江戸の習わしでした。

周りを笑わせるユーモア精神を持ち、若い人を引き立てる事が老入り後のつとめでした。隠居後は我が家、あるいは地域の相談役に徹しました。周りの者も、そうした価値を認め、尊敬の念で接しました。

### お愛想目つき

「目は口ほどにものをいう」といいます。

「いらっしゃいませ」の目の表情にも感謝の気持ちを込める。

お店に入ってきたお客様に「数ある店の中から、よくぞ当店を選んでくださいました」と言う気持ちを込めた目つき。江戸しぐさは癖ですから、条件反射のようにできたのです。

### お日和目つき

目つきで表すしぐさの一つです。道を譲ってもらったら、まず感謝の気持ちを言葉と目つきで伝えます。さらに「今日はよいお日和ですね」と笑顔で続けられたら、これ以上ないほど気持ちのよい挨拶になります。

### お礼参り

何か新しいことをして一年が無事に過ぎたならば、地元の社寺にお礼に行っていたようです。

「傘かしげ」してすれ違う（傘おとし・傘かたげ）

雨の日に、傘を差してすれ違う時、相手の方に雨のしずくがしたたり落ちないように、傘を相手の反対側にかたむけるしぐさです。

無用なトラブルを未然に防ぐ「あいさつ」の意味もなします。

立ち止まって、相手に道をゆずるのも、一案です。

傘は高級だったので町民の中で傘を持っていたのは江戸町衆位だったそうです。

貸し傘は、三井越後屋が1693年（綱吉の時代）から始めました。

### 肩引き 《腕引き》

狭い道で人が行きかう時に、肩がふれたりしないように、お互いに肩を後ろに引き体を斜めにしてすれちがいます。敵意のないことを示す役目もはたしました。

荷物を持ってすれちがう場合は、相手の邪魔にならないように、荷物を自分の体の前にかかえるのも肩引きと同じ行為です。

### 共生



互いに助け合う相互扶助の精神。共生の原点は互角の発想にあります。

## 契約兄弟

一人っ子同士が契約をして、家族同然の付き合いをしました。

江戸では、一人っ子が多かった。その手立てとして、一人っ子同士の家庭が契約兄弟を結び、血縁関係がなくても兄弟のように接することで、子供の社会性を育てました。

契約兄弟は江戸の相互秩序の一つ。隣近所との付き合いも、男手でのない家庭には力仕事があるときは近所の男性が助け、女手がいるときは女性が手を貸したりするコミュニティが成立していました。

## ご馳走さま

心のこもった、美味しい食事へのお礼です。

馳走という言葉は、文字通り、走り回ることを示しています。

お客様を接待するためには、数や量の確保はもちろん、山海の珍味を取り寄せて、料理に腕を振りました。これが「馳走」です。当然、招かれ、もてなしを受けた方からすれば「御馳走」になります。というわけで、もてなしを受けた方は、最大限の感謝を込めて「ご馳走様」と言いました。

まずは「いただきます」終わったら「ご馳走様」が食事の際の決まった挨拶になった理由です。

## ご飯のことは

食事の前には家族そろって、「おかげさまで、今日も一日、心と体にぬくもりの糧の頂けることを有り難く思い、よく噛みしめて頂きます」と述べました。

食卓に並んだ食べ物は、お田作りさん(農家の人)が精魂込めてつくったもの。感謝を心に刻み、米一粒たりとも無駄にせず食べたのでした。

## ご臍員(ごひいき)

繰り返しご利用いただき、ありがたいお客様。

全国各地から江戸に集まった商人たちの多くは、天秤棒一つの行商人が多かった。

早く店を持ち、暖簾を出すのが夢だったから早朝から夜遅くまで、懸命に働き、ご臍員客を得るよう努力しました。

商売で成功するためには、このご臍員客を一人でも多くつかむことです。商人が人間観察に力を入れ、対応しようとしたのもそのためです。

## こぶし(腰)うかし

となりと、こぶしひとつぶんぐらいちよつと腰をうごかせて席をつくる。芝居を見る時に、混んで来たら腰を浮かせて詰めたことからこのようによばれました。

## こんなにも心温かい人がいるもんか

なかなかお目にかかれない人。

## 紺屋の白袴

他人の為にばかり働いて、自分自身のことには手がまわらないこと。

## 座仲間目つき

寄席などで座を暗黙で詰めあうこと。

## すれ違いのまなざし

道を歩いているときに、ふと行きかう人と目があうことがあります。そんなときは、たとえ知らない者同士でも、感謝の気持ちを目であらわしながら、ほんの少しだけ頭を下げて会釈する。他人の存在を認め合い、互いを尊重する心と思いやりにあふれた江戸しぐさの一つです。

「清濁併せ呑む」の気概をもつこと(せいだくあわせのむ)

善人でも悪人でも来る者はすべて受け入れる度量の大きさを表すたとえ。

大海が清流も濁流も隔てなく受け入れることから心の広い人のことを言います。

清濁とは、善と悪・善人と悪人・賢者と愚か者。

口（入口）が大きいと、良いもの、悪いものも一緒に食べてしまうが、決して悪いことではない、良いことの方が多い。度胸があるという意味もあります。

#### 察すること

生活が苦しいのでは？ 親が病気などでは、と気を使うことです。

#### サッとさりげなく

なにも言わないで 手伝いをします。

#### 地震・火災の心構え

隣同士隣接しないで 空き地を意図的に残すこと。

上野広小路はなごりです。

#### 草主人従（そうしゅじんじゅう）

自然の偉大な営みに畏敬の念を持ち、その偉大さにしたがって生きる。

草は、自然の代表として主、人間はその自然の代表である草の従者。

人間は自然の中の一員として生かされているという謙虚な考え方を凝縮した言葉です。

#### 備えと供え

いざという時に備えておけば安心なもの。

「備える」「自分の為に備える」「供える」は「神仏等にととのえ捧げる」

お供えについて、宗教・宗派は違えど、その信仰における尊い方へ何かを「お供えする」という行為は決して特殊な事ではありません。そしてお供えしたものを下げて自分らで頂くとする行為もまた、特別な事ではありません。

鏡餅が現代のように丸くて厚ぼったい複数段になったのには理由があります。それは元来平たい円形だったものが「備えの豊かさ」を誇示するために厚く、高く、多くなっていったというものです。江戸の町では個人個人が備えるものはそう多くありませんでした。殆どの物は共有され、無駄なく効率よく使い回されていたのです。

#### 他人へのおもいやり

自分のことばかり考えないで、相手の気持ちを察しなさい。

#### 旅は道づれ世は情け

お互いに助けあいましょう。

#### 手当て

江戸の魔法の子育て術。

「ちちんぷいぷい、飛んでけ、飛んでけ」幼子が道端で転んで、膝小僧などをすりむいたりしたとき、母親が言うおまじない。

急な腹痛や腰、肩の痛みも同様で、母親が自分の手を痛い場所に充ててくれる。すると手のひらからじんわり体温が伝わってきて、痛みがなんとなく治まるような気がしてきます。

手当て、つまり対応ないし治療は文字通り、親が自分の手をわが子に当てるところから始まりました。

。

#### どうぞお楽に

相手の気持ちを思いやる。

#### 傍を楽にする（働く）

働くという事を、単に「仕事をしてお金を稼ぐこと」と思っていないですか。江戸人のとらえ方は違いました。「はたらく」とは、「傍」を「楽」にすること。頭を働かせて動き、まわりの人々を楽にさせてあげなさいという気持ちから生まれた言葉でした。ここに、江戸人の思いやりの深さを感じることができます。

### びっくり汁

遠方から訪ねてきた人があったとします。そんな時江戸では、訪れた人に風邪などひかせないようにと気遣って温かい汁物などを用意しました。お客は、このもてなしにびっくりしたため「びっくり汁」と呼ばれるようになったとか。江戸の昔の礼儀であったようです。他に「江戸しるこ」などもふるまわれました。

中身は、こんにゃくが主体、しいたけ、ながねぎ、しょうが、ごぼう、にらのみじん切り、黒ゴマのすりおろしたものを入れた味噌汁に片栗粉をいれたものです。

### 人が健康に生きること

病気にならないように お互いに生きることです。

### 文攻め(ふぜめ)

人を訪ねたいときは「いつ日何時に参上したいが・・・」という文を送ること。

また それに対応する文を出し合うこと。

手紙によって培われるものでした。

### 仏の顔も三度まで

いつまでも本人に自覚が出来ないときは厳しい処分もやむなし。

人間、誰も完璧な人はいない。間違いも起こす。だから、よほどのことでない限り、周囲の人は寛容で、立ち直りを期待しました。

ところが、その寛容さをいいことに、また間違いを起こしても反省の色がない輩がたまに出てきます。そんなときに、年長者から雷が落ちました。

「仏の顔も三度まで。甘ったれているんじゃない。いい加減に心を入れ替えろ」

### 「負け」も受け入れる

最近はどんなことでも、「勝った」「負けた」ばかりを問題にしがちです。江戸時代は相撲観戦が盛んでしたが、負けた力士同士は集まってにぎやかに食事をし、明日に備えたといえます。お互い今日を精一杯頑張ったのだから、負けてもくよくよせず、明日はもっと頑張ろうと考えたのでした。勝っても負けても、それをどう受け止め、次につなげるかが大切。それに、負けて良いこともあります。勝負に負けた時、どんな思いを味わうかを知れば、他者を思いやることにつながっていくからです。

### 見て見ぬふり

いったんは見えていないふりで状況をうかがう。

他人のプライバシーには踏み込まない。実際は、どんな状態かを知っていても、見て見ぬふりをしてあげる思いやりが大切な場合があります。

放任とか無関心という意味ではない。事情を見極めないうちは手を貸さないという事。子どもが転んでも安全を見極めたら、すぐに助け起こさず、自分の力で立ち上がるまで様子を見る。部下が仕事の上で失敗を犯しても、大勢に影響がなく、むしろ次のステップに役立つと判断したら、自力による再起を待つ懐の深さが必要です。

### 目つき

目つきや目の動きで、さりげなく気持ちを表すしぐさが、江戸しぐさにはたくさんあります。「目は口ほどに物を言う」という諺があります。だからこそ、陰気な雰囲気になによりも嫌った江戸人は「

目つき」を大切にしました。

感謝の気持ちをこめて「いただきます」のあいさつで食事をはじめ、互いが目を合わせ、話しをしながら楽しくいただく。これが江戸しぐさの食事の作法。ふだんから目つきは江戸人の得意としたしぐさだったのです。

睦は敬意を表す

むつまじい、目で相手を見上げる。お互いに相手の良さをみなおし、仲の良さを確認し合う月。

文字の大きさ

寺子屋では、ご老体や目の悪い人のまえでは、常に大きな字を書くように指導していたそうです。

渡る世間に鬼はない

世の中には無慈悲な人ばかりではなく、困ったときに助けてくれる慈悲深い人もいます。

## してはいけない

---

### 空巢同様

空巢とは空巢狙いの略で、留守を狙って人の家に入り込む窃盗のことです。お訪ねしたときに「お留守のため」などと言ったら「約束もしねえで来たのなら空巢同様じゃねえか」と、どなられたそうです。

### あとつつき

竹のように長い物をもつ時は、後ろに要注意。非常に危険です。

### あとで・あしたは

すぐに行動出来ないこと「あとでしておく、明日する」ということでしたためしがない。面倒くさがる行為、物事を後回しにすることです。

### いい人

江戸では「いい人」は褒め言葉ではありません。どうでもいい人、商売を進めるうえでこれといった取り柄の無い人を指しました。

人柄に惚れて商売をするなど江戸商人は冷静でした。

### 医者の不養生

口では立派なことを説いているが、実行が伴わないことのたとえです。

### 田舎っぺ根性

国の為、天皇の為というように上下関係でみるもの。

おかみに弱く、おしもに強い発想、友達を互いに非難しあう（ドレイ根性）、集団を意識する。（水のみ百姓しぐさ）

### いぬ・ねこ・うし

犬は、犬のような食べ方をしたり、立小便をしたりする人。猫は、食べ物をくわえたまま歩いている人。牛は、ぼろぼろと食べ物をこぼしながら食べる人のことです。

### いばる

必要以上に偉そうな様子をしてみせるのは、品が無いと嫌われました。

自分に自信がない人ほど自分を大きく見せようとしします。

特に誰から見ても弱者である立場の人に、偉そうに振る舞うのは最も、下等のことです。

弱い人をいたわること、出来るだけへりくだることが大事とされてきた江戸では軽蔑されても当然でした。

### 噂話をするな（うわさばなし）

本来は、あくまでも本人の発言の内容をニュースとして伝えることです。

発言以外の内容を付け加えるのはいけないことです。

自分が直接、見たり聞いたりしていないことは言わない。

最近では、根も葉もないのに、無責任に言い交わす話があたかも事実であるように伝わるのが、当たり前になってしまいました。

他人のうわさ話をするのは人間の性ではあるが、それで良いのでしょうか、もっと、実のある話、本物の話をしましょう。

### 「うん」と言うな

返事ではなく自分で納得するもの。

返事は必ず一度の元気のよい「はい」。

現在では、元気がない「うん」という返事をする人がふえています。

#### 大声でどなるな

大声を出すことは相手を恫喝し、恐怖を与える、してはならない行為です。

#### 同じ過ちを繰り返さない

同じ原因の火事はなかったとか、江戸では火の用心は当番で頻繁に夜回りをしていました。

#### かたておちはダメ

犬の事を書いたら猫の事も書きなさい。

かたておちはいけなくってよ一、それが江戸小町のしぐさの元になっていた考え方だそうです。

#### 聞き盗人（泥棒）

話を最後まで聞いておいて後日「あの講師の話はつまらなかった」と言ったり、手紙を書いてくる  
とか、面白くないときは寝るか寝たふりをする。講義のあいだは外にでてはいけません。

#### 仰仰しく言わない（ぎょうぎょう）

実際よりも大げさな言い方をしないようにする。

ある出来事に直面した時に、的確に、慎重にものを言った方が奥ゆかしいし、信用も高まります。

自分が遭遇した事件や出来事を大げさに言うと、皆が事実を知った時にがっかりされてしまうし、自分の信用力も落ちてしまいます。事実をそのまま話すか、むしろ抑え目に話をしたほうが相手に信用されるという戒めです。

#### 禁句

本音や真実でも、時と場合によっては言わないほうがよいです。

人にはそれぞれ立場があり、本音と建前があります。本音が真実であっても、修復できないようなダメージを相手に与えてしまう場合は言わないほうがいい。見て分かることは言わない。読んで分かることは聞かないことです。

#### 口に出してはならない言葉

他人の事をとやかく話することは失礼なことです。

#### 「結界わきまえ」を心がける

己を知り、身の程をわきまえましょう。自分の力量、技量をきちんと把握し、見せかけのことはしてはならない。専門外のことにくちをださない。

専門以外のことを知らないのは「当たり前」とされ、知らないことは恥ずかしいことではありませんでした。

・「結界」とはもともと仏教用語で、領域を区切ることを指します。境界線

自分の身の程をわきまえよ「～の分際で」と馬鹿にされるようなことはするなということです。専門外のことに口を出さないで、専門家にまかせることです。

#### 餅は餅屋（結界わきまえ）

相手を立てる言葉。専門家の力量を信頼、まかせる

自分の専門分野でないのに、得意そうに知識を披露し、知ったかぶりをすると、「でまかせ」と軽蔑される。他人の領分を侵してはいけない。

自分の専門について知識や見識がなければ軽蔑されました。人間、何か得意技を持ちたいという教えでもあります。

#### 根性が曲がっている

相手が成功したことを素直に喜ばずに、ヤキモチをやいたり、けちをつけること。

## 言の葉

言ってはならぬ言葉→ 脅す言葉・疑う言葉・人を馬鹿にしている言葉です。

## 刺し言葉

人の神経を逆なでするような言葉。

会話を断ち切る言葉、「で」「だから」「は一」など。

刺し言葉は、その場の雰囲気悪くするばかりか、場合によっては人間関係そのものをこわしかねません。

「あなたが悪い」などの断言的な言葉もこれに入ります。

## 知っていますかは禁句

尋ねて良いこと、悪いこと。

親しい関係になると、相手に何を尋ねてもいい気になりがち。深入りは禁物であります。特に相手の知識を試すような言動は失礼とされました。いかにも自分は知っているが、という傲慢さが感じられ、相手を不愉快にさせるからです。「知っていますか」と言えるのは子どもにだけです。

## しっと、やきもち、ねたみは女の敵

これらがなくなれば 争いは無くなります。

## 弱者のいたわり

弱いものいじめはダメです。

## じろじろ見るな

指さしのような視線を使ってはいけません。

## 人名を大切にす

承諾なしに他人の名前を口にするのは悪いし、人名などを間違えたり、間違った文字を書くのは失礼なこと。ただし、他人が自分の名前を間違ったことに腹をたてないのも「江戸しぐさ」です。

## 過ぎたるは なんとやら

何事もほどほどが肝心。やり過ぎることは、やり足りないことと同じように良いことではありません。

## 咳とクシャミはいけない

咳とクシャミはうつると嫌われたそうです。

## 咳払いするなかれ

反対意思表示なので わざとしないように。

## せっぱつまり

余裕のない行き詰った状況、その結果してしまう野暮な行動。

江戸では自己の敗退を意味するので、縁起の悪い「しぐさ」といわれていたそうです。

普段から、そうならないように心構えやゆとりが必要です。

商家は、季節の変化に対応して、必要なことを段取りよくこなせば、良い結果が約束される。余裕を持って仕事をしなさい。不慮の事故があっても対応しやすい。

## 素っ気ないのは

良い人と良くない人のたとえがあります。

## そんな偉い方とは知らず失礼しました

江戸で一番失礼な言い方と言われていたそうです。

これほど悪いあいさつ言葉は、まず、ないようです。江戸人には、「目の前にいる他人は、天人さま

よりも偉い人と思いなさい」という教えがあったそうです。

#### ちどりもどき

ジグザグに向きを変えながら歩く習性、お酒を飲みすぎた時に、足がもつれるさまを「千鳥足」と言います。江戸時代、しらふでも道を右に寄ったり左に寄ったりして歩く人には、「ちどりもどきをするな」と注意したそうです。

#### 手斧言葉（ちょうなことば）

言葉の凶器。江戸しぐさでは、してはならないことと同じように、言ってはならないことがいくつもあります。「戸閉め言葉」や「刺し言葉」もそうですが、たとえば、「なぐる」「ける」「殺す」などの乱暴な言葉を「手斧言葉」といって使いませんでした。

ただし、江戸の人達は、手斧言葉は言われた方にも責任があると考えていました。つまり、そんな乱暴な返答されるようなことを、自分が言ったり、したりしたツケだととらえたのです。

#### 出来損ないにカラクリを無理強いすると、小僧が目をはらす

出来の悪い管理職は、下へ下へと責任をなすりつけ、一番下の部下が泣く。

#### 伝承の禁句

人の話に「古い」と水をさすことは、伝承を阻害するのでしてはいけません。

「温故知新」という言葉があります。先人のしたことを振り返って、ものの考え方や、やり方を現在に活かすことが大切という意味です。一見古く見えることの中に、実は今に通じる人間の知恵を見ることができる。最初から年上の人の言葉に自分勝手な物差しで対応してはいけません。

#### とおoryんせ

商家の人間は、道に出る時、急いでも決して慌てて飛び出したりせず、まず左右を見て、近づいてくる通行人が通り過ぎるのを待ってから出るようにしていました。用心深いこのしぐさを「とおoryんせ」といい、わらべ歌にもうたわれています。

#### 刻盗人（時泥棒）は大罪人

突然訪ねたり、一方的に時間を変更したりする行為は、相手の時間を奪うとして、もっとも恥ずべき行為としていました。会議なども遅刻して始まりの時間を遅らせると他の皆さんの時間を盗んだことになります。

「弁済不能の十両の罪」とたとえられるほど、してはいけないしぐさでした。

江戸町衆は、約束事を大事にしましたので、連絡専門の小僧さんがいました。ある大手商店の古記録に載っています。

#### 戸閉め言葉

刺し言葉と同様に、会話のキャッチボールを中断させるような言葉の事をいいます。どのような言葉かというと「でも」「だって」「しかし」などのことです。

人の話を最後まで聞かないことも失礼にあたりますし、謙虚さを大切にする江戸しぐさでは、自己中心的な人間とみなされました。

#### 年寄りの冷や水

年を取ると体力が落ちるので、分相応の行動を。

真夏ならともかく、冷たい水を急に飲めば、誰でも腹痛を起こす可能性が高い。ましてや体力が衰えてきた年寄りがそんなことをすればなおさらである。

健康で長生きするためには、日頃、食事は腹八分目に抑え、あまり無理をせず、休養を十分にとりて過ごすのがよいというのが、一般的な江戸人の考え方だそうです。

#### どちらへお出かけ（外出する人へかける言葉）



出かけようとしている人に、やたらと行先を訪ねるのは江戸しぐさでは禁句とされました。そんなことを言ったら「どこへ行こうと大きなお世話だ」という言葉がかえってきました。

「おでかけでございますか」「おでかけ？」と短く、スマートに敬意を含む平等な立場でのやりとりがよしとされました。

#### ドレイ根性

友達を互いに非難しあうこと。

#### 仲間外れするな

三人一緒のとき、二人で話をして、もう一人の方を無視してはいけない。

#### 人を本名で呼ばない

町衆社会では、他人をたやすく本名で呼ぶことはしなかったといえます。

名前は、その人の本質、その人の体そのものをあらわしており、本名で呼べたのは、親や習い事の師匠、お上くらいでした。普段はあだ名や愛称、芸名などで呼びあっていました。

仲の良い夫婦のどちらかが亡くなったときに、はじめて夫や妻の本名を知ったというような、今では考えられない話しも、実際にあったそうです。

#### 病人の見舞いに、びわ・大きなスイカはいけない

仏様に備えるもの。

「ほんと？」「ほんとですか？」は禁句

人を疑う言葉。「ご存知ですか」相手は自分よりも常に博識と考え、その人に向かって「知っていますか」と聞くのは、とんだ非常識という理由で禁句。「知っている？」と聞いたのは稚児に対してだけです。

#### 水かけことば

話しの腰を折るなど、その雰囲気をつぶ壊しにする人を「外様の門番」という。

江戸時代は、一人で暮らせる環境ではなく互いに助け合う必要がありました。水かけ言葉を言い続けることは、互いに助け合う人間関係を壊すことになるので、慎むのが当然でした。

外様の門番と言うのは誰も相手にしないという洒落言葉です。

#### 見て分かることは言わない、読んで分かることは聞かない

顔の表情からその人が今どんな状態か、何を考えているかが推察できるときは、分かっていることをあえて口にはせず、言葉を選んで思いやって会話するというしぐさがあります。くたくたに疲れ果てて帰宅したお父さんを見て、「どうしたの、疲れている」と聞くのは野暮な事。それより、いたわりの言葉をかけたほうが、お父さんの疲れも少しは解消され、笑顔がでるといえるものです。「目は口ほどにものを言う」を逆手に取ったしぐさともいえます。

#### ミミズにおしっこかけちゃダメ

昔の人は、ミミズを虫と見立てたこと、丘を引くほどの力持ちで、農民の味方である虫に唾や小便をかけることは、自然に対するぼうとくであることを知っていました。

#### 無理押し

早く行けと言わんばかりに、前を歩いている人の背中を手の平や指で押すことを言います。わけもなく、人の体をさわったり、押したりすることはいけないことです。これは、大変失礼なこととされていたそうです。

「無理は禁物」人が壊れる

無理をすれば必ずひずむ。ひずめば必ず壊れる。人間は病気になる。

物事には総て限度があります。

いくら美味しいからといって、食べ過ぎればお腹をこわす。江戸の人々は健康の為に「腹八分目に医者いらす」「腹も身の内」といって、大食いを戒めました。

この考えは健康だけでなく、お付き合いの仕方などにも応用されていました。無理をすると心がひずみ、身体が疲れて病気になってしまうと言われました。

目上の人には繰り返さない

大人に向かって繰り返して言わない→「はい」を「はいはい」。

繰り返して言うことは、してはいけない失礼なこととされました。

他の例としては、「念のため復唱させていただきます」とお断りして言います。

もってのほか

お届け物を隣家をお願いするのは、「もってのほか」の無礼だそうです。

そういう時は、預かって頂いたお宅に少なくとも半分はさしあげたそうです。それでも、迷惑をかけたつぐないに、後日、預かって頂いたお宅に「お礼の品物」をお届けしたそうです。

許す心

寛容とやさしさ、哀れみ。

相手の不始末だとわかっていても、それなりの事情があったのだろうと察して、頭ごなしに怒らずに「許す」心を残しました。次に同じ不始末をしなければよいという懐の深さがありました。

しかし「仏の顔も三度」まで。同じ過ちを三回犯せば、改善が見込めず、ご縁がないものとあっさり切り離しました。

老者（ろうしゃ）に手紙を出さない

80歳をすぎた多用なひとに手紙をだしてはいけません。

「わかりません」と言わぬ江戸商人

自分の専門のことなのに分からないことがあるのは、非常に恥ずかしいとされました。勉強が足りないから、精進が足りないから分からないのだと、江戸の商人たちは考えたのです。だから、本当に分からないときは、素直に「お尋ねします」と教を請うたのでした。「わかりません」という事が許されたのは、小さな子供だけだったそうです。

悪口いうな

人の悪口を言っても、自分がみじめになるだけ、その人と同レベルになります。

## 雑学

---

あかちゃんは母親に請求して生まれるものではない

神様からの預かり者。

会ったときの正月の礼

年賀の挨拶状を差し上げなかった人へ、チャンスがあったら渡して礼をつくす。

異国人への配慮（ゐじん）

考え方が違うので十分注意しよう。

衣食たりて礼節を知る

人は生活に余裕ができて、初めて礼儀や節度をわきまえられるようになる。

田舎はひなびたところ

現在の田舎の意味は不便なところ、江戸では、自然が多く残っているところを指す。

命（動物・自然の保護）

江戸は動植物にも庇護した。

鱸の頭も信心から

イワシの頭のようなつまらない物でも信心すれば尊いものにみえる。

うだつがあがらない

俗に「うだつがあがらない」というのは、防火壁（うだち）のほどこせない人間という意味で一人前でないことを指したそうです。

えびす

七福神の一員。日本古来唯一の福の神。

仰高禄聞書き（おおたかろくききがき）

役人の書付も聞き書きで作成したという。

千代田（江戸城）大表・大奥

男が集まる場所「大表」女の会議を「大奥」会議。大表と言うのは男の文化、大奥は女の文化です。

お金の催促、請求は江戸では放火と同じくらい悪い行為である

買い物はお互い信用貸しなので、催促は考えられない。

おくびなしさま

ある物事をしていてもそれを素知らぬ顔で振る舞う。

和尚学

住職が読み書きソロバンを教えていた。

お嬢さんの天下

女のひとは子どもを産むので一番上との考え方。

おそまつ

お粗末 たいしたことではないこと。

恐れ入谷の鬼子母神（母と子の守り神）

江戸は世界一の都であっただけに、人をコントロールする知恵はたいしたものでした。こんにち調べなおしてみると、分かったものだけでも、おそれいってしまいます。

こういうことを言うためにあるのではないかと、感心させられます。

お田づくりさん

百姓への敬語 呼び名。

お般若の薬水、新玉の志素かけ、千代のスズシロ、お涙おさえの京都のユズ  
もてなしの例。

おめざ

子供が機嫌よく目覚めるように用意した甘い物。

枕元に金平糖や甘納豆を置く。

重荷に小付

大変な手間の上に、全く余計な仕事が出来てしまったこと。

お料理を嫌がる人は心か体に病気がある

味覚障害などバランスが偏った人。

終わりの始まり

一人のかたの人生が終わり、そして、それを引き継がなければならない新たな人の人生がはじまる。

おんまいた

御真は、御真魚（おんまな）のことです。マナというのは、人間様の食べる御魚のことです。真とい  
うのは、美しいもの、おいしいものという意味の言葉です。

それで、美しいおさかなをお料理する時に使う木の台が、真魚板（まないた）です。江戸人はそれを  
丁寧語にしたから御真魚板といい、稚児たちは、それが言いにくいので、オンマイタといったそう  
です。

カエル

町を歩くときには、前だけではなく、後ろにも注意を払って歩く事。

後ろからやって来る人のことを考えて歩きなさいということ。

江戸しぐさのカエルは、往来を歩くときの心得としては、もっとも大事なものともいえます。カエルの  
目は前についていて後ろは見えないことから、この名がついたようです。

江戸しぐさには、動物の習性から名づけられたしぐさもあります。

イヌ、ウシ、ネコなど。

蛙女房

蛙は、目が上についています。「女が上」というので、年上女房のことです。

彼女を、自分の親や友人などに紹介しようと思って話し出す時など、小指を二回ほど動かして「蛙」  
というだけで通じたそうです。

駆け出し露座小僧

雨の中を傘なしで走る小僧 品がないこと。

がけのぞき

あぶないことと分かっているながら、覗く事。

過去8年間、信用の出来る人

人との付き合い方で、何年付き合えば信用できるのかという基準を設けた。

風邪は馬鹿がひく

用心が足りない事。

賀の祝い

正月の祝い。（町衆は、江戸城にご挨拶することが最高の誉れである）

白扇をいただくこと。

教養とゆとりをもつと人のシグサを気にしだす

下賤な考え方では身につかないということ。

食って遊んでまた残る

つつましく暮らせばゆとりが出るということ。

事あらば こんぶ・あたりめ・かつおぶし

非常食、これさえあれば生きられる。

勝平といわれておこる井蛙っぺい

「しぐさ」を知らない者を「かっぺい」とか「ぼっと出」といい、無視するものを「ろうぜき者」と決めつけ、そぐわないしぐさをする者を「在の人」とよびました。

今日、地方から出てきた人を指して田舎ッ平とか勝平とか言うのは、とんでもないあやまりと言うべきかもしれません。

蚊蜻蛉（かとんぼ）

忘れたところにフラフラ顔を出すもの。

カニ歩き

駕籠屋がお寺、神社などでお客さまを乗せ、駕籠を横にして階段を上り下りするさま。

江戸時代は、宿などの階段が急だったため着物を着た仲居さんが、食事を二階に運ぶ際に、一段ずつ足をそろえて横向きで上がっていく姿。

果報は寝て待て

あせって取りに行くと逃げられる。

物事は面白いもので、何かを手に入れたい、手に入れたい、と気持ちが先走っていると、なかなかうまくいかない。逆に開き直って、「そのうちに手に入ればよい」と考えるようになると、ひょっこり縁ができる。

「焦るな」「あきらめるな」という、相矛盾した微妙さが残るなかなか難しい教えである。

髪結床

男たちの暇つぶしの場所でもありました。

江戸時代、武士と町人・農民の髪型は厳格に分かれていました。

店を張って来店をまつ「内床」、橋のたもとなどだと「出床」、出張していくのは「出髪」と言った。

「出床」は不審者の見張りをする役目をおっていました。

店内では、順番を待つ客たちが将棋をさしたり、ときの話話を語ったりしていました。

勘当

親子の縁を切る。

勘当は正式に、親類、五人組、町役人が証人となって作成した勘当届を名主から奉行所に提出することで成立した。この結果、該当者は家督、財産の相続が出来なくなりました。

落語に登場する道楽息子の多くは、正式に奉行所に届け出をされたわけではない。懲らしめのために一定期間、出入りの職人や知り合いのところに居候させ、反省の跡が見えれば、戻す例が多かったそ

うです。

厳しい原則はあるものの、できれば柔軟な対応で本人の自覚を促すというのが子育ての根本にありました。しかし、それも、「仏の顔も三度まで」という縛り付きだったところに、何とも言えない味を感じます。

#### 還暦（代）

60代。熟年として世の中で認められる。それだけ恥じない行動をとりましょう。

#### 還暦を過ぎたならフトンの上で死のうとは思ってはならぬ

老人に勇気を強要しました。やむにやまれぬことがあれば、若者にさせず、「老人」が先頭にたてとの教えです。

#### 気のきく女はどうして生産される

1) 厳格な父・慈愛の母 2) 博学な祖父・器用な祖母 3) 頓知の叔父・柔和な叔母という家庭環境の中でのみ育成できるものです。

#### 気の薬

気を病みそうな人に対する優しい気遣い。

過度のストレスで、ノイローゼになりそうな人に対して、それとなく助言をしたり、安心させたりする思いやりのしぐさを「気の薬」といいました。

病気は気の病から始まるというのが江戸時代の認識でした。しかし、悪の道に染まることも気の病にかかっていると考え対応しました。本人のプライドを傷付けないように、あたかも自分が気づいてやめるよう、さりげなく善導してあげることも「気の薬をあげる」と称しました。

ここでいう「気の薬」とは精神状態を正常にしてあげる手助けという意味をもっていました。

#### 気の毒

ストレスや不安など、病気になる原因やその結果。

病は気からというように、病気の原因の多くはストレスによる。身体が持つ本来の機能がうまく働かなくなるためです。

その原因、状態を称して「気の毒」と言いました。気の毒に侵されているは手の施しようがありません。これが転じて、何か災難に遭った人に対して同情の言葉をかけるとき、「お気の毒」という言い方をしました。もっとも、口先で同情するだけで、何も行動を起こさないのは相手にされなかったそうです。

#### 擬宝珠（ぎぼうしゅ、ぎぼし）

橋や寺社の欄干に取り付けられた飾り。

ネギの花（ねぎぼうず）独特の臭いが魔除けになると信じられていました。

#### 位附（くらいづけ）

役者の技芸に依る等級、昔は「上々吉」「上々」「中の上々」「中の上」「中」等に別けられていました。

#### くらげ野郎

水母に似たような、来たり来なかったり、だらしない人間のことです。

#### 景色はみんなのもの

景色は身分の上下、お金の有無に関係なく、みんな平等に見えるもの。みんなの財産です。

#### げどう

心のひねくれた者、道から外れた者のことをいいます。

#### けむにまく

講座は禁煙でした。タバコは相手を「けむにまく」というので「無礼」とされたそうです。ちなみにほうひ（オナラ）はいいが、咳きとくしゃみは許されませんでした。理由は、咳きやくしゃみで、風邪や労咳は伝染するからです。

けんかしても賀状は書く

賀状は、一度出したら一生続けるもの。途中でやめてはいけないといわれていたそうです。

声の仏法僧（現在の呼び名・コノハズク）

ブッポウソウと言う鳥。渡り鳥→夏鳥・冬は南アジア

鳴き声がブッポウソウという事からついたそうです。

姿の仏法僧

仏法僧とは仏教における三つの宝（三宝）です。

仏と、仏の説いた法と、仏法を行ずる僧または教団のことをいいます。

極楽とんぼ

どんな場面でも呑気に過ごす楽道家。沼とか池とかの上で気楽に飛んでいる蜻蛉の様子を喩えとして使っています。

沽券にかかわる

立場や面子にかかわる。

沽券は土地の売買契約証書。江戸で広い通りに店を出し、暖簾を掲げている商人の存在感を裏付けるものでした。

彼ら沽券の持ち主は江戸町衆と呼ばれ、現代で言う固定資産税は免除された。しかし、町入用（町内の自治に関する費用）を負担したり、売上に比例して一定の金額を幕府に上納する運上金、株仲間に入っていれば独占事業の対価としての冥加金、臨時の上納金である御用金を納める義務がありました。反面、町政にも発言権がありましたから、自分だけの繁盛を目指すのではなく、地域の繁栄につながることを意識するようになりました。

このため、何かの事情で立場や面子を汚されるような事が起きると、沽券にかかわると言って一步も譲りませんでした。一定の資産ができ、社会的立場も確立した後は、プライドが自分を動かす原動力になっていきました。損得は抜き、譲っていい話しと絶対譲れない話をみきわめて行動していたそうです。

子犬はよく咬みつく

小さいものは大きなものに対して不利であり勝てないので、少しの抵抗の表現。

子犬はよく吠える

自分の危険や、存在、寂しさを知らせる合図。

光陰は光陰そのもの

光陰矢の如しではなく、光と陰である。

郷に従う松は緑る

自然に逆らわなければ 松も生き活き。

紅葉に時雨（しぐれ）をきく季節

葉は赤く、雨や雪が降ると秋から冬に移るなどという環境の変化で季節を感じる。

心が無ければ人間ではない

人間は考えるあしである。

心の大掃除

一年に一度は 穢れを払うこと。

小魚には小骨が多い・のどにささる

いろいろ口うるさい人のたとえ。

## 湖沼河川

江戸の自然対策は優れていた。

## 白河夜船（毛吹草）

何も気づかないほどぐっすり眠ること。

自分が知らないことを、知ったふうに話してしまう。

京都見物に行ったと嘘をつく男がいた。その嘘つき男に対して別の男が「白河はどうだった」と聞くとあの川は夜船で通ったのでよく分からないとこたえます。ちめいの白河を川の名前と勘違いしたのです。この逸話が元となり「白河夜船」という言葉が出来たとされています。

## 松・竹・梅

植物三界 めでたいものとして、祝い事の飾りものなどにつかわれます。

松・竹は冬でも緑を保つ、梅は花を開く。

## 住めば都

何処に行っても完璧なところはありません。長く住み人とのつながりができる事で、その場が自分にとって一番素敵なところになります。

## ねんし（お年始・賀状）

おねんしは、年の初めに何う挨拶であり、伺えない方は、年初めの手紙をだします。

賀状は、生きているというコールサイン。どんな人でも差別せず公平に受け入れるので、喧嘩した友にも出します。

## 棒手振り

長屋が連なる狭い路地が多い江戸では、天秤棒で商品を担いで売り歩く行商人が多かったそうです。これを「棒手振」と言いました。魚や豆腐、納豆売りから煙草、歯磨き、殺鼠剤にいたるまで売り歩いたそうです。

## 避震小屋

地震対策のために、壁に斜交い（Xの字型）に組んだ支柱を入れるなどの建築様式を取り入れていました。大名屋敷では地震部屋、町方では避震小屋を一定の間隔に作っていました。

## 指南番

大名の武芸などの指南をした人 後に指導する人も指南番とよびました。

透察眼が必要でした。

## 銭売り

庶民を顧客にした規模の小さい両替商。

庶民は日々の暮らしにかかわる支払いだから単位が細かい、そこで、常に銅貨を用意しておく必要がありました。

例えば、腕のよい大工の月給は二両一分でした。本人は、そのままの金額をもらっても困るから、棟梁が基本的に銀貨や銅貨に両替して渡しました。

## 背中に目

背後の気配に要注意。

人間の目は顔についているから、目の前で起こることについては、いやでも目に飛び込んできます。したがって、対応可能であります。



ところが、背後で起きていることには目が届かない。その分だけ、自分で意識して注意をする必要があります。

襖や障子の開け閉めでも「バカの三寸、間抜けの八寸」という言葉が残っています。勢いよく閉めれば、柱にぶつかって戸は開いてしまう。手で押さえるようにできないのが馬鹿の証拠である。また八寸も開いたままなのはきちんと閉めようという意識自体がない、間抜けなせいだ。

この教訓、家の中だけでなく、外出した際にも十分有効であります。

呱呱の月（ここのつき）

十月十日。赤ちゃんが生まれるまでの日数。暗闇で育つ月のことです。

だいばば

母親がわり 祖母がわりの役目の人のことをいいます。

田吾作歩（たごさくあるき）

病気でもないのに 頭や体を左右に振りながら歩くこと。

たちはだかり

通せんぼしぐさ。

他人に自分の本を薦める時

「この本はどこからでもお読み下さい」と謙虚にすすめ、「いやいやもったいないこと。ご本の文字をひとつずつ勘定させていただきますよ」と受ける。

稚児行列

芝増上寺から上野まで 稚児が身じろぎもせず行列しました。

月番年番

当番の月かわり、年かわりのことです。

つかの間つきあい

見知ら人と軽く挨拶をかわし、わずかな時間も気持ちよく、対等な庶民同士の付き合いがありました。

ただし、会話は名前や職業をきかないのがきまりで、天候の話題などを選びました。

一期一会の考え方によるもので、人間関係を円滑にし、江戸の住みやすさを作りました。

つくし・よもぎ・れんげそうより沈丁花・雪やなぎの花を咲かそう

野の花もよいが庭木の花もよいものですよ。

付け焼き刃

その場しのぎの習い事や知識。

切れない刀に、鋼の焼き刃を付け足した刀の事を付け焼き刃といった。後に、その場に間に合わせるために、急に習い覚えることや、一時的に覚えた知識の事を指すようになりました。

現在で言えば、一夜漬けで試験に臨むようなものです。

つまらないものですが・・・は決して言わない

人に物を差し上げるとき、へりくだって言うあいさつ。

訪問する際に手土産を持参するのは常識。その際、「よろしかったらどうぞ・・・」ということで、控えめに言いました。

江戸には全国各地から珍しいものが集まってきます。地方よりも品揃え豊富で情報も多い。その江戸に住んでいるあなたには満足いかないものかもしれないが、あなたのために用意したので受け取ってほしい、こんな気遣いが背景にあって出た言葉なのです。

## 出職と居職（でしょくといしょく）

働く場所も職人の気質に影響した。

大工、左官など建築関係に従事する職人は現場に出向き、チームで仕事をする。これに対し、指物師、塗師など根気よく手技を磨いて物づくりする職人は自宅で仕事をする。つまり、外に出て、しかも多くの人とかかわりあって仕事をする場合と、屋内にこもって一人で仕事をする場合では、同じ職人といっても、ものの考え方、言葉づかい、日頃の立ち居振る舞い、遊び方などに違いが出て来ました。

## 手妻（手品）

てづま てじな ともいう。 しかけを明かさないこと。

## でく介

でくの坊とも。

## でばかめ

でしゃばるやつ。

## 天下祭り

将軍お膝元の祭りは山車や神輿がでる豪快なものばかり。

江戸の祭りと言えば、まず天下祭り。山王祭りと神田祭りが1681年から隔年で主役を張ってきました。

神幸祭 附け祭に大鯰と要石がひと際めだつ。鯰講。

## 同情

江戸では人を馬鹿にする言葉でした。

「捨て子や親なし子を同情するほど、それほど非人間じゃない」などと使いました。

## 東都参詣（遊覧名所図会）

恵方詣（須崎・山王台・隅田川）初卯詣（亀戸）初午（王子）三社祭（浅草）

納涼（両国）不動詣（目黒）水天宮詣（人形町）富士詣（鉄砲洲・駒込）

山王祭（永田・馬場）住吉祭（佃島）牛頭天王祭（品川）八幡祭（深川）

権現祭（根津）神田祭（神田）生姜市（芝）年の市（浅草）

## 道路はお城のお廊下（城下町）

将軍様のいらっしゃるお城へ続く廊下ですから、ゴミを捨てるなんてとんでもないこと道路を清潔に保つことも勿論ですが、お城への道を妨げないようにしたのが、往来しぐさだったのです。

## 刻の鐘

江戸市中に刻を知らせる鐘。

一号は日本橋石町に設けられた。時刻は幕府から与えられた時計によって決めました。

刻の鐘の維持運営費は鐘の音が聞こえる範囲にある各家から「鐘役銭」として一か月当たり四文を徴収しました。施設の維持費や人件費を差し引くとさほど割のいい仕事ではなかったそうです。

明暦の大火後は江戸市中が拡大するにつれ、11か所に増えました。

## 刻を共有する

今日この時間、この時にみんなが時間という旅人を共有しているんだという喜びに色ときめいていたそうです。

## どこからでも

あえて自分が強調したいことを和らげる場合などに使います。

「どこからでもかかっておいで」子供と相撲を取る時、大人はこう言う。体力差もあるし、自信も

ある。

実力があるからこそ、「どこからでも」と言えるし、興味を持たせながらやる気にさせることも出来る。

#### 渡世法

世渡り、つまり世の中を渡る方法。自然の波の上を、そーっと、よごさずに渡ろうという人間のぬくみと親しさがあると思います。

#### 土地神

大地の神であり、村落の守護神。穀物や豊作の神でもあり人々に繁栄をもたらします。

#### とっさの機転

転ばぬように 手でかぼう 杖を用意してあげることです。

#### 酉年(とりどし)は歴史の流れが変わる年

良いことがあった方は、いよいよ良く、何か悪い事があつたらますます悪くなる年。

#### 夏は暑くてあたりまえ

江戸では海水浴などしないで 知恵を絞って暮らしていました。

もっぱら自然任せで、庭や屋根へ水を打ったり、行水したり、舟遊びをするのがせいぜい。海水浴に行くという記録はないそうです。

#### 長屋

狭くとも江戸の庶民のパラダイス。

町人は狭い土地に住んでいた。人口密度は武士の四倍でした。場所は表通りに面した店舗の裏側、下水道を挟んで四、五軒ずつ並ぶのが典型でした。一軒当たりの居住空間は六畳分、実際には水屋と土間があるので、四畳半しかありませんでした。

住人たちの暮らし向きは筒抜けで、お互いに思いやる、人情細やかな付き合いがありました。

#### 生殺しの目に合う(半殺し)

人や事に感じて動かされること。

#### 似たもの夫婦

お人よし、世話好き、夫婦はよく似ている。

見ず知らずの男女がたまたま出会い、恋をして生涯をともにするのだが、実は前世ですでに一緒でありました。現世では出会うまで、ちょっと、はぐれていただけのことという。結局、このパートナーと人生をともにすることに変わりはない。運命の赤い糸は、すでに前世でつながっていたということです。

#### 歯と江戸寺子屋

虫歯にならない稚児を育てる。師匠は親代わりなので責任重大でした。。

#### 箸の上げ下ろし

躰の程度も、器用さもわかる。

迷い箸、なめ箸、ねぶり箸、突つきはし・・・箸の握り方や使い方を見ていると、確かに見た目にも美しく見える場合、いかにも下品に見える場合、さまざまです。

幼い頃から上手に躰けておかないと上手くいきません。

実は、箸をつかうことによって、行儀作法を学ぶだけでなく、指先の器用さや脳の機能を高める効果もあります。

#### 初上り

就職後、初めて故郷へ戻る、昇格試験の旅。

江戸周辺の出身者なら、商店に就職後、三年立てば藪入りがありました。年に二回、盆と正月に、一泊二日で親元に帰ることが許されました。

しかし、江戸店持ち京商人といわれた関西出身者が経営する商店の場合は、その店独特の制度があって、そうそう簡単に親元に戻るわけにはいきませんでした。

「初上り」は10年前後でした。もっとも、そのときまでには、同期七、八人のうち、半分程度しか残っていない。それだけに、番頭や手代に引率されての初上りは晴れがましいものだったに違いありません。本店でご主人に挨拶して、実際の働きぶりを見て合格すると手代に昇格しました。

#### 初かつお・初なす

初ものを食べると寿命が75日伸びると言われました。中でもかつお、なすは縁起のいいものとして特に好まれた。かつおは「勝つ魚」なすは「成す」と書きました。

#### 春芝居

春にしか立てない芝居。

#### 春で龍でご縁日

縁日は神様や仏が民衆の前に現れたり、靈感が示された日をいいます。

#### 人交わり

市場と言うものは本来人間交流の場です。

#### 日和見(ひよりみ)

有利な方に着こうと、形勢をうかがう。空模様をみること。

#### 福のふりかけ(非常用の食品)

ふりかけは沢山出来てしまうので皆で分け合うこと。

#### 風呂敷

万能包みぎれ。

風呂が蒸し風呂だったころ、足元に敷いて湯気の量を調節したのが「風呂敷」という名前の由来とい

います。銭湯のように大勢の見知らぬ人と一緒になると、今度は衣類を包む機能を発揮しました。包むという機能や文化が進化するにつれ、材質や文様などデザイン面にも関心が広がっていきました。

。手ぬぐいと同様、風呂敷も日本人ならではの繊細な自己表現の手段にもなっていきました。

#### 町屋歩き

「迷い蛾は雇うな」と言います。

隣の料理教室よりもこっちのほうが面白そうだからなどと、いきあたりばつりに飛び込んでくるような人のことです。

#### 右まわり

まわったり、まわりこんだりする動きをするとき、江戸しぐさでは「右まわり」が基本です。例えば、大勢の人が集まっている場所でみんなの前に出ていくような時には、最短距離を通らないで、左のほうへ出てから、右まわりで舞台などへと向かいます。

出ていくときに人前を横切らなければならない場合は、軽く右手を出して「ごめんなさい」という気持ちをあらわします。

#### むすめとむすこ

どちらが大切か？ 出来の悪いむすこは養子に出しました。

目から鼻へ抜ける

賢い上にぬけめがない人を指すたとえです。

物産み連中

何かを一緒に作った人々を、江戸しぐさでは物産み連中と言いました。

ものぐさ野郎（田舎っぺ）

面倒くさがりや。ものぐさ野郎がふえたら、大江戸はお釈迦になるといって、江戸の町衆たちは、自らをいましめたそうです。

類は友を呼ぶ

気の合う者や似通った者同士が集まって仲間を作る。その人間関係が嫌であれば自分がちゃんとした人間になりなさい。人間関係が一時的に減っても必ず成長した自分にあった人達が集まってきます。

指切りげんまん

約束を守るしぐさが子供たちの遊びに残りました。

「お夕飯の時間よ」と、家に戻ってくるよう母親から声がかかると、あちこちで「指切りげんまん」の声があがりました。明日もここで遊ぼう、といった内容ですが、子供たちにとっては大事な約束でした。昔の約束を守ると誓い合う所作の名残であります。

卵淡湯（らんたんとう）淡雪たまごともいう

泡立てた卵白を煮だしたすまし汁に流し込んだ料理。

ひなぶに対峙（たいじ）する概念は雅ぶ

ひなぶ・雅のわけ。ひなぶはひなびた所・田舎、雅ぶとは宮廷風

針麻醉

あんまの針、きゅう。江戸では主流。

光り輝く夏のご機嫌伺い

暑中見舞い。

日暮れて道遠し

努力してもむくわれない徒労。

病気は悪党

健康が一番。

不意の地震に、不断の用意

備えあれば憂いなし。

奉春 賀新 （江戸の賀正）

江戸の正月につかう枕詞。

無口無表情

愛の無い人に育てられるとこうなるとか。

厄払い行脚

いやなことがあると徳を求めて旅行にでる。

ゆかり、ゆとり

おもむきのあるもの。

良いことがあったら名前を変える

新しいものを見出したら名（あだな）を変えて前の自分に戻らない。

世は楽し

ゆとりをもつ。

料理は夫婦で作るが原則なり

人間の理想。

### 明日は我が身

良くないことが、いつ自分自身に降りかかってくるか分からないという事で他人事ではないこと。

### あととり娘

男は力仕事、女は家の切り盛り。あととり娘の活躍で実家が繁盛。

### 相手を疑う言葉

たとえあいづちであっても、相手を疑うような言葉は軽々しく言っていないものではありません。また、「はい」は一回きっぱり言えばいいのに、「はい、はい」とぞんざいに言うような態度だと、誰からもきらわれてしまいます。

### いきずり言葉

行きずりの会話では、「お連れさんは」「連れ方様は」などという共生語（男女平等を地で行くような商人言語）をつかっていました。

### 意思表示

「はい」「いいえ」の意思表示をはっきりと。はい参ります。いいえ参りません。

### 上から何か言われるとすぐ信じてしまう

批判精神のなさ。いい意味では素直ですが、少しは自分なりに考えることが必要です。

この世の中は、“ぷかぷか波の間に浮いている小舟のようなもの”と考えがあったようです。

ものの見方を変えてしまえばいいのだともいえます。

### うけあいのすいか

保証する。确实だと請け合う。叩いたり見た目で、スイカの美味しさを保証する。

商人のプライドにたった言葉。

自分の扱っている商品は、全て安心できますよと保証する。

### 送り言葉、迎え言葉はより丁寧に

お客様をお迎えしたり、お見送りするときの心づかいや言動を丁寧にすること。

子供の特性に合わせ、六歳までにしつける「六つしつけ」となったようです。

### お返事やあいづちは「ハイ」

呼ばれた時、頼まれごとをされた時の返事は一回の「はい」だけでよい。

### お着物と置き物

アクセントが違ると言葉の意味が変わる。よく聞き分けることが肝要。

### おかめ

古くから存在する日本の面の一つ。

笑いを呼ぶ、福笑い、縁起物。

### 押し付け

人の意思を無視し、反発できないようにしてしまうこと。

### お誕生日の誓い

お誕生日にお仲間に精進しますと誓うこと。

### おびんずる

お釈迦様の弟子。慈悲深く神通力を持っていたので、涅槃(ねはん)が許されず、現世に生きることとなった。体の痛むところや、具合の良くないところをなでると、神通力で治癒してくれたとされて

いる。上野寛永寺・建長寺等の門前に安置されている。

顔に出すな

人に分かるようでは 先達になれないという戒め。

書き入れ

お得意様との取引記録を帳簿に書きこむ。

今、書き入れ時なので・・・といった具合に、この書き入れという言葉が芝居などに登場する。

通常の店ではツケが利いた。「付けておいてくれ」そこで、帳簿に売掛として記録し、月末などに一括して請求した。

「忙しい」という言葉を嫌ったので、「書き入れ時」という言葉が流行った。

書くと俗化する

連想ゲームのように 最後は違ったことに伝わること。世間一般のくだらないものになる。

カタカナ表記

姓名など、漢字がわからないときはカタカナ表記をした。

名前を間違えて書くのは失礼なので、わからないときは耳から入った音をカタカナにして書いた。分からないときは分からないと表現し、カタカナで書く事で、相手も正しい漢字を教えてくれた。

カタカナは元来、経典を読むための表音文字として発達、やがてひらがたと機能を二分して、日本語の豊かさを紡ぎ出すのに貢献した。

漢字、カタカナ、ひらがたと三種類の表現ツールを持つのは日本語しかない。

昨日・今日・明日が最高

来年は頑張ろうと考えないで 最短の時間を楽しもうという気持ち。

気のきかぬ 気とは

気宇の気 見識・心意気・度量である。

切るまえにすること

木を切るバカ 人を斬るバカ何が大事なことから、その前によく考えて。

記録するな（江戸の聞き上手）

聞いて覚えろ。

口裂け女

心の醜い人の言葉を発する

敬意のある言い方

相手を尊敬し、自分の方をへりくだって複数形にした。（てまえどもなど）上の者が下の者に対する誠意ある言い方をする。

景色より人を見よ

どうでも良いこと(建物等)より人間のしぐさを見よ。

欠伸するな

会議などであくびはしない。

けんかする時は、言葉づかいでけんかしなさい

暴力をふるうと怪我をします。大きなことにならなければいいが、お互いにいいことはありません。それより納得できるように話し合いなさい。それが大人の喧嘩です。

硯墨(けんすみ)を増し、墨人をます

三者一体、どれかひとつ強いだけではなく、三つが一体となって良くなければ駄目だということ。

見聞考（話す）



読み書き算盤より見て聞いて考えて話すことが大切。

「こ」がつく表現

「こぎれい」「小ざっぱり」「小気味いい」など、頭に「こ」がつく表現がある。また、「小耳を傾ける」「小首をかしげる」「小腰をかがめる」なども。

この「こ」には、実は、何事も一歩下がって控えめで、目立たないようにしようという江戸流の表現が潜んでいるのです。

五感、六感、推理、推察、推測、空想、想像力

すべて人間だけができること。

言葉遊び

考は老とイコール。

老と音符ㄎ（長老が曲がりくねりつつ考える）とからなり、もと「長寿の老人の意」です。

老は長者の尊称。「年寄り」とは別。「年寄」は江戸幕府では老中。大名では家老。つまり、偉い役名。

私のようなデキソコナイが、「老人」とか「年寄」と言われたら、モッタイナイ。まだ、“若造”です。（少し謙遜）ちなみに江戸では“おじいさん”と呼ばれるのは名誉だったそうです。

言葉以前の心づかい

「ぼてふり」（物売り）も病気の家（角屋にしるしを出した）の前では、無言で通りすぎた。

言葉づかいには上下が無い

御仏様の前で人間には上下は全くないように、言葉づかいも同じ。

言葉で人生を楽しむ

江戸は「言葉」を駆使して「助け合いの面白さや人生の楽しさ」を満喫する町だった。

古老の話

古老の話しには、沢山知恵が詰まっている。良く聞きなさい、聞いて損はありません。

言葉の乱れは生活の乱れ

言葉は人間関係を円滑にする「道具」や「潤滑油」と考えられ、口から出た言葉は事の端ではなく、事（行為、行動）と等価していた。

きちんとした言葉づかいが出来ないのは生活が乱れている証拠。

他人からすると、その言動で付き合っている相手か、取引するにふさわしい相手か、見分けられる。気を付けなければいけない。

さま

江戸の庶民はこころねが優しかったので、人や物に「さま」を付けていう癖がありました。そこで講や世間にも「さま」を付け、講さまとか世間さまなどと言うことが多かったようです。

山林樹木

江戸は宝物と考えた。

しっかり、しっくり、しっとり

言葉の成長を見守る様子。

師は三世のつきあい

師との付き合いは前世・現世・来世にまたがるほど深いということ。

滋養

栄養ではなく その人に必要なもの大切なものを整える。

知らない人をみたとき

天子様より偉い人と思いなさい。

知り合い

顔と名前だけでなく人柄も知っている間柄をいう。

舎蜜学(せいみがく)

化学の意味。

姓名の漢字が解らない時

耳から聞いた音声をカタカナで書く。

せん弁をつける

途中で流れや話がつまること。

そうです

聞いたり、調べたりしたことを伝える言葉。

「尊異論」はリーダーの条件

少数意見は尊重する。

有能な番頭は、小僧たちの意見をよく聞いた。

あるとき、小僧たちが「街中で流行の反物をうちの店でも売りたい」と番頭に訴えた。多数が同調した。

しかし、一人の小僧だけが、「この反物は品質が悪い。すぐに破けてしまい、またお客様が買い直すことことになる」と違う意見を述べた。

番頭はその一人の小僧の意見を採用した。たとえ皆と違う意見であっても、良いと思う意見は取り入れたのである。

少数意見の方にビジネスチャンスがむしろあることを江戸の経営者は知っていたようです。

縦書き・横書き

縦は田舎の発想・横は江戸的发想があり、どちらかに偏らないこと、半分半分が望ましい。

茶通(さつう)

薄茶をいれる器。

通人(つうじん)とは

お金にならないことでも 一生懸命やり遂げること。その気になれば、誰でもできる。

つけんどん

無愛想な対応。

出会い

出会いは人生最高の感動である。会い難くしてあえた、かけがえのない出合いを無にしてはならない。

です

「ですます調」は、現在では丁寧語とされていますが、江戸時代では乱暴な言葉とされていました。

「でそうろう」「でございます」「でやんす」「であります」など、「です」の語源は諸説あるようですが、遊女など、限られた人達の使うことばでもありました。

また、江戸の商人たちは、「ございましたそうでございます」というように、今ならかえっておかしく感じるくらいに、丁寧な話し方をしていたといえます

「です」と「ようです」

勝手に人の言葉を借りてはいけない。

自分が体験したことは「です」人からの伝聞や調べてわかったことは「ようです」といいます。会社で報告をするときも「です」と「ようです」の使い分けをすることは大切です。たとえばお客様からクレームが入った際に、自分が直接お客様と会話をして、クレーム内容を聞いたのであれば「何々というご意見です」と報告する。受けた本人が上司に報告する場合は「何々というご意見がはいったようです」になる。

頂門の一針（ちょうもんのいっしん）

人の急所を突いた厳しい戒め。（頂門は頭のとっぺんのこと）

手前ども・私ども

相手に敬意を表すために、自分の事を複数形にへりくだった言葉。

商人はお客様第一である。「対応している店員だけでなく、お店全体でお客様であるあなたを歓迎していますよ」という気持ちが「手前ども」に集約されているようです。

店が一丸となつての大歓迎である。客としても気分が悪いわけがない。つつい財布の紐が緩むというものだ。個人プレーよりも組織プレーのほうが長続きすることを江戸の商人たちはよく知っていました。

出られない（でれない）

とんでもない言葉「出られない」「でれない」。

どうぞ御随意に

尊敬を込めて「お好きなように。どうぞ自由に」。

成人して社会人になった以上は一人前である。自分自身で責任を自覚しながら行動するのが当然とされた。物の考え方、言い方は人それぞれ「人には勝手にものを言わせておけ」というのも「江戸しぐさ」その人にはその人なりの考え方、振る舞い方があるという前提だったから、相手の自由を尊重し。このように言った。

刻盗人は亭主に持つな、水母（くらげ）を嫁にするな

時間にだらしない人間は、いかに学問や教養があっても人間としては失格のようです。水母はふらふら漂い、時々、大群となつて押し寄せる。来たり来なかつたりだらしない人間のこと。

得はいき・損は野暮

いき（息・意気）が合えば商談成功で得、自分勝手な行動をすれば商談は成立せず損。

商取引でも、お見合いでも、大人らしい気の利いた会話の応酬から始まる。お互いにイキが合う事がいきであり、商売もうまくいった。

反面、自分勝手に話を展開するだけで、相手の気持ちを察して対応できなければ、それは野暮というもの。時間がもったいない。商品が売れるはずもない。

江戸では余分な付加価値をつけず、シンプルな儲け方、考え方をした。目的のものしか売らないし、買わなかったという。

年初め

お正月のしきたり 色々。

とづくにづきあい（外つ国つきあい）（赤の他人とのつきあい方）

「異文化との共生」のために危機管理能力を磨く。江戸時代は、言葉や文化の違う各藩との付き合いは、自分とは全く違う事を頭に入れ、おつきあいしたそうです。

この「外つ国つきあい」は、自分とまったく縁のない人とのつきあい方にもあてはめられます。江戸っ子は「会う人はみな仏様の化身」と考え、どんな相手であっても態度を変えず、尊重しつつ関係を築きました。「外つ国つきあい」はそこから派生した考え方で、「十人十色、人は違って当たり前」という、江戸人ならではの生き方の処方箋だったと言えます。

どんな人でも必ずいつか役に立つ

みんなそれぞれ良いところを持って生まれてきているので 個性を發揮する。

何々ですかと聞かれたら

「そうだね」ではなく「そのようです」と何々で「ございますか」と聞かれたら「さようございます」と答えます。

においとかおり

使い分けが必要です。

人間であるということは

1) 人が人を食わないこと 2) 人が人を殺さないこと 3) 人が健康に生きること 4) 人が人の病気を治すこと。

人間40になったら残し文

分かっていることは 忘れるな。

端折り（はしより）

一を聞いて十をしろ。ものごとを省く、縮める、簡単にすること。

もともとは着物の裾を持ち上げて帯ではさむ意味から転じた。

江戸の人の寛容さと臨機応変の哲学をしめしています。

人の口には、戸は立てられぬ

噂が広がっていくのはどうにもしょうがないように情報は独り歩きをするもの。

人に言ってはいけない話

子供に対して七夕に教える重要な話し。願い事

発想のきりかえ

いつまでもごちゃごちゃ考えないで、違う角度で考えてみる。

火の用心

火事は暮らしを破壊してしまうから細心の備えが必要だった。「火の用心」の見回りは自治権を支え守っていく心意気の表れ。

人が人の病気を治すこと

人間であるなら そうすべきである。

人が人を食わないこと

人間は人間の身をたべない。当然のこと。

人が人を殺さないこと

人間は人間をころさない。意見は尊重する意味もある。

人のこころの春

心映えを表すことが出来た春、のどかなこころ。

ひまと忙しい

暇と忙しいという言葉は 心がないということで 嫌われた。

冷者でござい 田舎者でござい

「ござい」というのは謙虚な言葉。

銭湯に入る時、冷たい体が相手に触れて嫌な思いをさせないようにと、ご免なさいと言ひ、あるいはお先へとのべる。すなわち気遣いであり、礼儀が身につけていたようです。

文化とは

人の姿・人のしぐさ・人を敬うこと。

文化は人間が中心。

平和を支えた土台

徳川時代のしぐさ。

榎木（ほだき）ひろい

土台となるもの。

まんだら

宇宙の様子が描かれていると、考えられた。

みっともない

みたくない→みとうない→みっともないと変化してきた。

人間は年齢や人生経験が増えるにつれ、分別や自立心ができるものというのが江戸式の考え方だった。だから、お酒を飲みすぎて醜態を演じれば、「いい歳をしてみっともない」とそしられた。

この「みっともない」という言葉は実にリアリティに富んでいると言えます。「見たくない」を意味する「みとうない」が「みっともない」と変化してきた。つまり、見たくないほどひどい振る舞いという事になる。

むくどり言葉

突然やってきて迷惑をかけ、また突然さっぴいていく。群れで動くムクドリにたとえたしぐさ。マナーをわきまえずに自分勝手に話す、失礼なことをズケズケというなどを指します。

胸刺し言葉（むなさしことば）

相手を尊重しない言葉や行動は、江戸しぐさの考えに反するもの。楽しく話している途中で、「だから？」「はあ？」などと相手の気持ちを逆なでするような言葉を「胸刺し言葉」と言います。勝手に決めつけるのも悪い言い方です。

めでたいとは

芽を出したいと願う武士のしぐさ。（喜ぶにふさわしい、祝うべきである）

目の字

お目もじのこと。（お目にかかることをいう女性語・手紙文などに用いる）

目は口ほどにものを言う

目つきや表情、口のきき方、身のこなしは、その人の思っていることが直接に表れ、相手に伝わるものです。

ものの言いよう

ものは言いようで丸くも四角にもなる、感情のおもむくままに喋ってはいけない、身の破滅につながることもある。言葉は選んで使いたい。

ものを書くときは残し文（遺書）のつもりで書く

いいかげんなものは書き残さない心構え。

桃栗付き合い

本当の人間らしいつきあい。

三年付き合いともいいます。

世の中・世間

社会とは言わない。

夜明けの行灯（あんどん）「昔の照明器具」

カーツときても、その場はぐっとおさえて、胸にしまおう。夜明けの行灯は、あってもなくてもいい存在。今、腹が立っても明日になればどうでもいいことだと思えてくるから待てという。争いごとを避ける知恵。

やたらに人を紹介しない

人を紹介する責任は重大。

商人は自分の足で生産地など、物づくりの現場に出かけ、あくまで自分の目利き、才覚を信じて商売するのが当たり前だった。人の紹介を受けず、自分も紹介をしなかったそうです。万が一、紹介する羽目になった場合でも、自分と同等かそれ以上の人材を紹介し、その責任は自分が負う自覚があった。紹介をすることはそれほどの重みで受け止められていたようです。

野暮天

「いき」の対極にある。田舎侍の呼び名にも使われた。

浅黄裏（あさぎうら）という言葉がある。着物の裏地に用いた浅黄木綿（あさぎもめん）にちなんでいて、田舎侍を馬鹿にした言葉。

良いお日和でございます

「天気がいいですね」といいます。

ハレの日（お祝いごとのある日）に使う言葉。

読み手に、遊びを残す

江戸の寺子屋の本は、読み手に「校正」や「訂正」の余地も残して作られました。今日、それを「いたるところに誤りがある」とみるのは短慮です。このことを「読み手に、遊びを残す」と言っていました。それが物書きの常識（心がけ）でした。

理屈

素直になれない。寂しい人。

わがもの顔

おれがいたから出来たんだ、勝ったんだとする自己主張する振る舞い。

悪い事があつたら名前を変える

嫌なことはあとに引きずらない。名前を変えて心機一転でがんばる。

## 江戸しぐさいろはかるた（和城伊勢）

---

い いきは得野暮は損  
言っではならない言葉「ウソ、ホント？」

ろ 六感しぐさが身を救う  
狼藉には手斧（ちょうな）ことばで立ち向かえ

は 「はじめまして」は他人行儀  
半畳を入れられる年の功

に 人間はじんかんと読んだ江戸の講  
仁王立ち門番だけで十分よ

ほ ほめことば、みんな楽しく生きられる  
本名は呼ばないことよおもいやり

へ ヘヤースタイルの江戸しぐさ  
返事はさっと出そう！江戸の文

と 時には勉強やめてお手伝い  
時の鐘、聞こえるところに住みたいね

ち 遅刻はやっぱり、はずかしい  
ちりをあつめて、リサイクル

り 力士同士のまけ談義  
利己主義のふとどき、わがまましぐさ

ぬ ぬすつとに、情けをかけて、養育し  
ぬりえに折り紙よいこのおもちゃ

る 留守に訪問泥棒？よ  
ルール・マナー・エチケットしぐさの基本

を 老いは長老敬いましょう

わ わかものよ自然科学を大切に  
わいわい集まり文殊の知恵

か 勝ばかり？負けも勝つの一つなり  
葛平は北斎にかわいがられたちようちんや

よ よめない漢字ルビをふり  
嫁は義理の父・母というなかれ

た 楽しむことは人の道なり  
たくましく自立する江戸の女

れ 列にならって七三のみち  
連想は言葉づかいと頭の体操

そ そしりはいけない七夕の教え  
尊異論は先達のあかし

つ つもりはだめよ！手差し確認  
つれづれに机にむかって文を書く

ね 年齢は聞かないしぐさ身につけよう

寝てからもう一度考え直し  
な 並んで歩く癖なおそう  
鯨講とは地震講  
ら らいおんが歩いてくると勘違い  
らんらん今日もカニとびしよう  
む 無理押しは稚児しぐさ恥ずかしい  
昔ばなしを考える稽古はじめ  
う 家に上がるも手・足あらい  
嬉しいと思ったことをメモに書く  
る 命の力草木に教えられ  
いのいち番は富くじの福男  
の 乗りすぎも声援しよう  
のんきは江戸では知恵者のあかし  
お お連れさまは相棒のはじめなり  
おいしいお茶は健康のあかし  
く 功德は上品、妬きは下品  
苦勞はしあわせへの近道  
や 山は火事だんべえ・・トンチンカン  
やきもちの恥と人がいう  
ま 負けるが勝ちやしぐさの基本  
まめまめしく働くは江戸の素っ子ちゃん  
け 決して過ちはくりかえしません  
結界わきまえを心がけ  
ふ 文まわしやってみよう！お仲間づくり  
不届きしぐさは自己中心  
こ 声だして腹式呼吸、病なし  
この道あの道思い出作ろう  
え 遠方からのお客におもてなし  
江戸しぐさは大人のしぐさ  
て 天災がいずれくること忘れずに  
天神さまはとおりにゃんせ  
あ あいさつは上下のべつなくさわやかに  
朝飯まえのお手伝い  
さ さあ一行こう勇気とチャンスの二人ずれ  
さき急ぐときには肩引き・傘かしげ  
き 君とボク共に学び習おう意気の知恵  
きのう今日あしたも元気一期一会  
ゆ 行来はつかのましぐさのはじめなり  
夢をもとうよ明日は宇宙遊泳  
め めんどうと思ってみても遠回り  
迷惑をかけない心おもいやり



み 見栄はらずしぐさで競う江戸の講  
みんなの心集めて一二三

し 四角四面は角がありまあるく行こうお付き合い  
七五三は三つ心から生まれます

え エビさんのお知恵をかりて楽もう  
エビさんは知恵だし味出し我が家の宝  
縁の下の力持ち解って人となる

ひ 人はみな仏の化身  
品は下品を脱することなり

も 黙して語らずはしぐさにあらず  
もしもし？はいはいは一度でよいかも

せ 先生は先に生まれた人という  
世辞が言えてひとり前

す 澄んだ心で清く正しく  
「すみません」とは澄みません

ん 運は運（はこび）がよいことね  
うんだめしおみくじ買って憂さはらし

## 江戸しぐさことば遊び（ゆう爺）

---

講をして 孝行めざせ 鴻のとり  
講中の 努力がみのり 江戸の町  
江戸しぐさ おもき心で 道するべ  
田舎びと 江戸で働き 江戸の人  
江戸の町 あいづちしぐさで 一人前  
三脱の 教えを守り ひとをしる  
遊びには 金かこころか たのしみか  
言葉には 遊びが持てる 人がいい  
ありがとう 心がこもり ありがとう  
意気いきと 生きていくさま 生きだねえ  
人の上 立つには何を する意向  
お客には 言っではならぬ わかりません  
江戸人は 町が一番 遊び二番  
わたしども 謙虚な気持ち 客に受け  
時がすぎ いらだちつのも 普通人  
あいづちを 打てば打つほど 良く切れる  
身に付いた 自然なくせが 美しい  
しめさんの うでにほれたよ 嫁にする  
目つきよし 気持ち伝わる 態度よし  
江戸講は 江戸町衆の 基礎である  
江戸講に 身体を清め 家をでる  
雨の中 傘をななめに すれ違う  
階段を 駕籠をかついで カニのよう  
すみません あい澄みません ころから  
話しても 仲間になれぬ 友達よ  
行動と 知識があつて ひとつだね  
人柄に だまされないで 品を見ろ  
町衆の いきなはからい あだ名呼び  
肥えるひと 関心をもち 敏感に  
いい人は どうでもいいと 同じだね  
いばっては 自分をさげる 行為だね  
そうですね そのようですね 使い分け  
出会いとは 見えない糸の ひきあわせ  
よむ人に 遊びをのこす 江戸しぐさ

講演の後に書いて頂きました

3A

気づかない あなたのまわりの 冷たい目  
電車内 子供の靴が 服を踏む  
電車内 メイクタイムと 兼ねるなよ  
足開き 周りを気にして 座り方  
降りられない 先に乗る人 非常識  
子供RUN 親は叱らん レストラン  
ベルが鳴る 手を入れ開ける 閉まるドア  
文化財 メモ帳にして 落書きは  
見てる人 「誰か言ってよ」 知らぬふり  
荷物置く あなたのせいで 6人席  
学生が おしゃべりしてて 迷惑だ  
香水は 香りじゃないです においです  
怖いですが あなたの体臭 宇宙人  
優先席 マナーを守ろう 携帯OFF  
うるさいな おばちゃんたちの 話し声  
さげてよね その音量と その荷物  
酒に酔う オジサン席を 2つ取り  
音漏れに 音漏れが増える 電車内  
音量より 知りたいあなたの そのモラル  
疲れてる そんなのみんな 知っている  
ぶつかった 満面の笑みで 足を踏む  
暴走族 夜寝る時の バイク音  
虎がらの 香水くさい おばちゃんが  
おしゃべりに 電話が重なり 大合唱  
優先席 携帯使っちゃ ダメダメよ  
イヤホンから 漏れてる音に 私イヤ～  
乗車口 人が多くて まるでバーゲン  
音楽を 聞いていても 人の声  
君の声 どうしてそんなに 大きいの  
優先席 ひとりひとりが 気をつけよう  
座るとき ひとりひとりが 気をつけよう  
乗車中 寄りかかったら ダメダメよ  
優先席 居座る若者 浮いてるぞ  
鳴くならば 消してしまえよ 着メロを  
ありません あなたの荷物の 座席分

電車内 食事されると 迷惑だ  
イヤホンは 想定外の 音魔王  
女子高生 だんだん声が ボリュームアップ  
ブラブラと 手すりにつかまる おさるさん  
おばはんの 香水くさい 水曜日  
おっさんが 優先席で おうさまだ  
知らないよ マタニティマーク やばくない？  
優先席 今ではすでに 自由席  
お年寄り 誰かが譲ると しらんぷり

3B

優先席 堂々と座る 違反野郎  
おじいちゃん ひいて驚く 「なんじゃこりや」  
じいさんに 席をゆずり ほめられた  
電車内 かばんも電話も はなさない  
うるさいと 心の中では 叫んでる  
足広げ 気づけば一人で 二席分  
電車内 ウォークマンの 音でかし  
まわりへの 気配りせずに ベラベラと  
人の壁 動くスピードに 付き合わされ  
マナー違反 みんなの心の 違反だよ  
おじいさん 周りの人皆 眠っている  
知りながら みんなやめない 人事だ  
ファミレスで 勉強するひと ごめいわく  
電車内 着信音で いかりもON  
席ゆずれ そんなあんたも マナー違反  
大音量 しゃべり声と ヘッドホン  
優先席 携帯なって 冷たい目  
優先席 譲ったつもりが 違う人  
電車内 声の大きさ 小さめに  
「好きだよ」と 言い合う二人は 嫌いです  
思いやり するかしないで 命取り  
スモーカー 場所と周りを チェックして  
メールじゃなく みんなの目線に 気づいてよ  
自転車で 携帯いじり 交通事故  
大勢の 中の一人と 思いなさい  
化粧して 怒られ逆ギレ 大ゲンカ  
ヘッドフォン 音漏れ注意 電車内  
自転車の スピード出しすぎ あぶないよ  
子供より うるさい隣の おばさんら  
じいさんに 席譲られる 俺は何？

電車内 わあきやあさわぐ 楽しいか  
電車内 横に物置 迷惑だ  
自転車に 乗ってる姿 ダラしない  
電車内 よったおじさん 倒れてる  
遠足で 電車を使うな 小学生  
「マジウザイ」 しゃべるあなたが マジウザイ  
電車から 遠足軍団 ド・ド・ド・ド・ド  
運動会 泣いて笑って 一等賞  
おばあちゃん 学生の前 立っていた  
あっやばい 気づいたときには 手に携帯  
BUSの中 メールする奴 ただのブス  
地下鉄で 酔ったおじさん 吐いている  
3C

化粧品 ガサゴソ漁る 働きマン  
出入口 開いても気づかぬ ジベタリアン  
心から 助けての声 気付けない  
捨てたのは あなたの心と ターバーコ  
公共の場 気づいてあげよう マタニティーマーク  
ガヤガヤと 聞こえてきたよ 無駄話し  
あなたがた なぜそんなに うるさいの  
女子高生 あなたの声は スピーカー  
電車内 酔っ払いの 家じゃない  
酔っている 自分の姿を 見てほしい  
あなたのは 自分勝手な 行動だ  
ゴミを捨て 拾わず取らず 置いていく  
お年寄り 座れず席を 見つめてる  
席の横 変な縄張り やめましょう  
車内での 化粧直しで ケモノ顔  
ドアくぐり 席に着くまで 特急だ  
ポイ捨てで まるで電車が ゴミ箱だ  
捨てるのは マナー忘れる その心  
守れない 思いやりルール 電源OFF  
電車内 子供大人も 違反する  
ヘッドホン 聴くのは 一人にしてくれよ  
ガム食べて 大また開く チャラ男達  
ヘッドホン 迫る危険に 気づかない  
乗り急ぐ 恥を忘れた ウサギさん  
ヘッドホン せまい車内で 歌い出す  
つりかわで けんすい中の 高校生  
ひとり占め 四肢を投げ出し 夢心地

タバコのさ 煙がぶんぶん 臭すぎる  
ちよつとそこ アンタ臭いな 酒飲んだ？  
大声で 静かな車内が 騒ぎ立つ  
電車内 飲み食いおしゃべり ああうざい  
よっばらい 電車の中で 大騒ぎ  
しらんぷり 見て見ぬふり マナー違反  
違反者よ まだ気付かぬか 周りの目  
電車内 7人席ちゃんと 座ってる？

## 編集後記

---

この度、芝三光の江戸しぐさとらのまきの出版に際し、江戸しぐさ振興会員皆様のご尽力に対し有難く厚く厚く御礼申しあげます。江戸しぐさ振興会が発足して二年目の秋にこのような名誉をいただけるとは夢にも思っておりませんでした。小林和雄氏の生き様・師の江戸の良さを見なおす会編の残し分を大切に保管してきたご褒美のような気がいたします。

今までは、師の残し文を十分理解しないまま発表した箇所も多々ございます。早くお伝えしたい願いでもあったのでお許しいただきたく存じます。

また、きらきら輝く宝石のようなものを拾って世間さまに披露させていただいたようなものでもございます。今回の「芝三光の江戸しぐさとらのまき」もまだまだ未完成の段階ではございますが、江戸しぐさの本質をご理解いただけるようなことに集中いたしました。御目文字いただきましたら嬉しゅうございます。2・3点お目に留まったことを実践していただければこのとらのまきの役割は果たせるものと期待しております。

なお、これから教育関係のお仕事をなさる方々・会社関係に携わっていらっしゃる方々・世の中をリードなさっていらっしゃる方々・さらにご家庭の心のバイブルになれば幸甚に存じます。残し文はまだまだございます。今後振興会の皆様はじめ皆々さまにバトンタッチさせていただきます。更なる江戸しぐさを編集していただきたく念じております。

最後にこのとらのまきになみなみならぬ志をいただきました芥川さま西岡さま粟山さまに感謝申しあげる次第でございます。

師の「戦争許しまじ」の広島まで徒歩の行脚・湯川秀樹博士の世界は一つの願いが叶いますように。

2015年 秋

和城伊勢

## 芝三光のプロフィール

---

芝三光（本名・小林和雄）芝三光町（伊達屋敷内）に生まれる

曾祖父・江戸神田寺子屋の師匠という家柄

生き残りの江戸講中とともに養育される

父 外交官・母 ミッションスクールの副校長

幼少時成績優秀（習字・図工・学業・作文表彰多数）

感性豊かで機智に富む性格

高等学校教諭二級普通免許証（理科・工業）

上記自ら免除願い提出

多摩少年院・テレビ技術社（テレビを自分で組み立て図、草案）・東京アカデミー学

院・医師（耳鼻咽喉科）・コンサルタント・江戸の良さを見なおす会講師等歴任

小冊子（残し文）

女性はずべて大学に・道ずれ雑誌創刊・ポピュラーサイエンス編集・コンサル企業への冊子多数（松下電器・東海漬物・消火器製造会社等）青光文集サポート・江戸庶民の生活哲学を江戸しぐさと命名自ら願い出た弟子たちに伝える（弟子の書籍多数）・江戸の良さを見なおす会編記録冊子多数

1999年1月22日 芝三光逝去